

少し大きな子供になると、今までよりは機嫌が悪い、遊ぶことも好まない、歩くことを厭がる朝起ると泣く、殊に脊柱の強直症状を起すと、脊柱を曲げることが出来ないから、物を取るにしても、普通の子供のやうに、身體を曲げて取ると云ふことは出来ぬから、背部を眞直にして、先づ手を膝に乗せ、膝關節を曲げ、續いて膝關節を曲げ、シャガムやうにして、片手を伸ばして物を取ると云ふやうな、一種特別な體位を執るものである。また坐つてゐて起つにも矢張同様の體位を執るものであつて、要するに背部を曲げないで起ち居をすると云ふ風になるのが特徴である。

本症は、脊椎の椎體が犯されるものであつて、病氣が進むに従つて、その部位が體の重みによつて壓迫され、従つてその後方にある棘状突起にまで畸形を呈するやうになるものである。即ち多くの場合に於て、脊柱が後方に角状彎曲をなすものである。この病氣は脊椎の中で、或は頸椎を犯し、或は胸椎を犯し、或は腰椎を犯すものであるが、その中でも頸椎カリエスは最も大切なものであつて、然も療治は困難である。

頸椎カリエスが起ると、頸の運動が困難となり、丁度斜頸のやうな風になり、時としてはその

區別がつかぬことがある。そして咽頭後壁に膿汁が溜まつて、呼吸困難を起すことがある。

胸椎に於ては、上は頸椎との境下は腰椎との境ひめ、即ち胸椎の上下部は、最もカリエスに犯され易いものである。

腰椎カリエスも、また胸椎カリエスと同様であつて、背部直に腰部に放散性の疼痛を感じるものであるからして、神経痛であるとか、また婦人にあつては子宮病と誤られることがある。

カエスには、また屢々流注膿瘍と云つて、病竈より離れたところ假へば腸骨窩と云ふ様なところに膿が溜まつて腫れる即ち塞性膿瘍を造るか、またはそこに瘻孔が穿いてそこから膿が流れることがある。即ち流注膿瘍をなすこともある。

(療法) 本症の局處療法としては、脊柱の負擔を減じ、變形を去り、且つ安靜にこれを固定するのが要旨である。即ちコーセットをかけて固定するのである。尙ほ全身療法としては營養を良くし、病氣の時期を考へて日光、空氣、溫度、濕氣等の適當なる海岸または山地に轉地せしめて適當の生活をなさしめ、またカルアグレス錠を持藥として長く服用せしめるのである。

本症は、重症の一つであるけれども、早く相當の療治をすれば、完全に治癒するものである。

昔は癒らぬ病氣のやうに考へられて居つたが、今日では醫術の進歩によつて、十分治癒せしむることが出来るやうになつた、従つて彼の龜背等の畸形を残さぬばかりでなく、少しの障碍をも残さずに治癒し得るものであるから、前に申した症状に注意して、成るべく早期に治療を受けることが何よりの注意である。若しこれを打捨て置くときには、病毒は單に脊椎ばかりで無く、全身に蔓延して肺結核を起したり、または全身粟粒結核を起して死に至ることのある甚だ恐るべきものである。

第十四節 老人の腰痛

(症候) 五十才以上の老人に、疝氣とか或は腰痛みとか云ふて、腰の邊に痛みがあつて、立つときに脊延びをして立つと云ふのがある。或はまたこれをリウマチスと云ふものもある。この疝氣は一種の年齢病であつて、老年になつて脊椎骨或は關節に於て、畸形性關節炎の初期に罹りつゝあるか、或は既に畸形性關節炎に罹つたときに起るものであつて、それが即ち疝氣とか腰痛みとか俗に云ふものとなつて現はれるのである。

(五十腕) それからよく五十腕とか云ふて、これも五十才以上の人に、肩胛關節に疼痛があり

またよく手を動かすことが出来ぬ、即ち官能障碍を起すことがある。普通はこれを前の腰痛と同じく年齢の故である。つまり年を老つた爲めに起つたもので、どうも仕方が無い、なり行きに任すより外に方法が無いと思ふて居るが、これは間違ひである。それは主として畸形性關節炎、老人性關節炎であつて、局處の骨の一部が萎縮し、形が變り、前申すやうな疼痛や、官能障碍を起すものであるが、これは豫め用心すれば防ぐことの出来るものである。

この畸形性關節炎あるもの、屍體を解剖して見ると、關節が無くなつて、まるで棒のやうになつて居る、強直に陥つて居るが、つまりその爲めに神経を刺戟して、腰部に疼痛を覺ゆるものである。

(豫防法) 此等腰痛でも、五十腕でも、俗間には年齢病即ち老人になれば、當然來るべき運命のものとして、何等手當を加へずに看過して居るが、これは甚だ遺憾なことであつて、此等のもは年齢病なりとは云ひながら、或る程度までは豫防することが出来るものである。

然らば何如にしてこれを豫防するかと云ふに、それは極めて單純である。即ち運動を盛んにやることによつて、これを豫防することが出来る。一體此等の畸形性關節炎は、その關節の運動を

廢し、或は廢さなくも使ふことが少いと起るものであつて、無暗に隠居がる人には早く起るが、七十才八十才になつても活動して居る人には起らぬものであるから、此等の道理をよく辨へて、冷水摩擦なり、體操なりを怠らずにやる方がよろしい、此等のことは習慣性になれば何でもなくやれるものであるから、壯年時代より運動の習慣を養ひ、これを勵行すれば、よく此等を豫防することが出来るものである。

それから既に本症を發したのものには、根治法は無いが、デアテルミーをかけたたり、湯治したりまた力めて運動すれば、大にその痛みを減することが出来るものである。

第七章 咳嗽、咯痰

第一節 咳嗽咯痰ある病氣の見分け方

咳嗽は、喉頭、氣管、氣管支、肺臟、肋膜等に病氣があれば起るものであるが、これは氣管や肺臟より生ずる排泄物多くは痰を咯出さんが爲めに起るものである。また痰も何も出ないで、單に咳嗽ばかりあるものは、これは乾咳即ちカラセキであるが、普通は呼吸器にある異物を咯き出

さんが爲めに起るもので、咳嗽と咯痰とは常に相伴ふことが多いものである。

咳嗽は主として呼吸器から出るものであるからして、呼吸器の病氣のときには、大抵は咳嗽が出るものである。今咳嗽の出る病氣の主なるものに就て、その見分け方を擧げて見るに、喉頭がイラ／＼してそして時々何か傷痕でもあるやうに痛み、そして咳嗽の盛んに出るものは喉頭カタルで、その痛みが劇しくそして聲の啞れるのは多くは喉頭結核の恐れがある。この二つの病氣は先きに咽喉の痛む病氣のところ詳述してある。それから氣管支カタルに罹ると、急性のときには熱があつて咳嗽が出る、痰は初めの間は唾液のやうであるが、追々に甘いやうな膿のやうな固まつた痰を出すに至る、普通我々が云ふ風邪惹きの中には、この急性氣管支カタルが大分多い。氣管支カタルが慢性になると、熱はないが咳嗽と咯痰はなか／＼止まらない、また老人に慢性氣管支カタルが起ると、遂に氣管支擴張を起すに至るが、これは非常に痰が出るもので、老人の痰持ちと云ふのは、大抵はこの氣管支擴張である。それから腐つたやうな惡臭ある膿痰を出すのは腐敗性氣管支カタルか、肺膿瘍かまたは肺壞疽であるが、肺膿瘍のときには非常に臭いもので患者の居る室に入ると、ムツと鼻を突くやうな惡臭のあるものである。それからこれはさう澤山で

ないが、纖維素性気管支カタルにあつては、丁度肺炎にでも罹つたかのやうに高熱を發して、後に痰と共に、纖維素即ち丁度気管支の通りの、木の枝のやうな固まつたものを喀き出すものである。

肺炎のときは、高熱があつて、胸が痛み、そして鐵鏽色の痰を出すのは前に述べた通りである。また肋膜炎でも咳嗽が出るが、これも前に述べた通り、息を吸ふときに、肋骨の下の方が痛むものである。喘息もまた咳嗽が出るが、これは時々ゼイ／＼咳嗽が出てセキ込むので、一度聞けば忘れられないものである。それから百日咳は主として子供に起るもので、コン／＼と痙攣狀の咳嗽が發作的に起つて後を引くから、これも大抵は素人でも判るものである。それからデフテリアも矢張小兒に多いもので、熱もあるし、咳嗽は犬の吠えるやうな一種特別の調があり、割合に早く呼吸困難を起すもので、これも素人のよく知つて居る病氣である。それからインフルエンザ即ち俗に云ふ流感の殊に呼吸器性のもは咳嗽も多く、熱も出るがそれと同時に頭が痛く、腰が痛んだり、手足の節々が痛んだりするもので、食欲も無くなるものである。

それから肺結核は非常に多い病氣であるが、その起り始めは格別のことが無く、唯乾咳ばかり

長く續く、痰は出ないで咳嗽ばかり出る、追々には夕方になると少し熱が出る、身體が瘦せる、盗汗が出る、痰も出て来る、甚しきは血痰や喀血もすると云ふ風である。尤も耳性咳嗽と云ふて耳の刺戟の爲めに出る乾咳もあるが、これは肺結核のやうに身體の衰へると云ふことはない。

以上のやうに咳嗽の出る病氣は澤山あるが、大した苦痛が無しに長く咳嗽の出るのは慢性気管支カタルであり、それから身體のだん／＼衰へて来るのは肺結核である。實際この二つは割合に多いもので、然もよく間違ひ易いから、長く咳嗽の出るときには油斷をせずに早く然るべき醫者に診て貰ふがよろしい。

第二節 急性気管支カタル

(原因) 急性気管支カタルは、濕冷の空氣殊に荒き風に吹かれるのは直接の原因となるからして、従つて冬季や春先が多い、東京にては名物の空つ風の吹き荒む二月頃は非常に多い。それから不潔空氣の吸入、刺戟瓦斯の吸入等、喉頭カタルの原因になるものは皆本症の原因となる。尙ほまた便通不整による腸性中毒にも起れば、またデフテリアその他の熱のある傳染病にも起るものである。

(症候) 咳嗽の出るのには主徴候である。そしてその發病が急なれば急なるほど、また侵された氣管支が大きければ大きいほど咳嗽が多いものである。そしてひどく咳嗽の出るときは胸や腹にまで響いて痛みを感じるものである。喀痰は初めは極僅かであつて、粘つた稍透明の所謂生痰を出す。追々にその量が多くなり、おしまひには膿のやうな、少し甘いやうな、泡沫の混つた痰所謂熱痰を出すものであるが、咳嗽が甚しいときには、痰に少し血が混入することもあるが、肺結核のものとは違つて直ちに止まるから心配はない。軽いときには熱はないが、重いものになると三十九度以上の熱が出る。また咳嗽が餘り澤山出ると、頭痛がしたり、眩暈、嘔吐を來し、時としては知らぬ間に小便が洩れ出ることなどもある。

(療法) 熱のあるときには、胸に濕布をするのがよろしい。そして温かい部屋に寝て、室内には火鉢に水を入れた鍋をかけて湯氣を立てて置く。飲みものは熱くして與へるがよろしく、熱き茶、熱き牛乳等、それにアスピリン〇、五を頓服せしめて發汗させるがよい。また百倍の食鹽水、重曹水などを吸入器にて噴霧せしめて室内空氣を濕潤からしむるがよろしく、輕きは數日、重きは數週間にて治に至るものである。

第三節 慢性氣管支カタル

(原因) 急性症が癒りきらずに慢性と化すものもあるが、多くは石工、粉挽機、紡績業等の如く、常に塵埃を吸ふものに職業病として來るものであり、また酒客や、煙草を濫用するものにより勝つものである。

(症候) 慢性症は熱が無く、唯咳嗽と喀痰とが頑固に出るだけである。その咳嗽は、朝晩と、夜間に多くなるものである。それから喀痰の性質によつて醫者の方では本症を四種類に分けて居る。即ち第一は乾性カタルと云ふて、殊に老人に多く、咳嗽は盛んに出るが、喀痰は少く、粘つた硝子のやうな丁度膨れた西貢米のやうなものが出る。第二は濕性カタルであつて、喀痰の量は多く、粘液膿性で固まつて出るものである。第三は膿性カタルで、膿のやうな痰の出るもの。第四は、漿液性カタルと云つて、ゴムを溶かしたやうな喀痰が澤山に出るものである。

(療法) 原因を除くは第一の注意であるから、職業性に來るものはその職業を轉ぜねばならぬ。飲酒、喫煙の嗜好は出來得るだけこれを節制するがよろしく、度々本症に罹る人は夏季より冷水摩擦を行ひ、または海水浴をするがよろしく、冬季または氣候の不順なるときには、温暖なる殊

に鹽類泉のある地方に轉地が出来れば非常に結構である。咳嗽に對しては百倍食鹽水の吸入がよろしく、桔梗煎(肺炎参照)を服用せしめ、熱き茶、熱牛乳、熱き梅干湯などを飲用せしめ、食餌も熱いものがよろしい。若しまた熱が出たときにはアスピリン〇、五を頓服(一日三回)せしむるがよい。

第四節 毛細氣管支カタル

(原因) これは氣管支の極く細いところにカタルの起つたもので、百日咳、麻疹などの後に起り、主として虚弱なる小兒を犯すものである。

(症候) 熱もあり、また呼吸困難もある、咳嗽はそれほど甚しくはないが、喀痰が出て、時としては胸が痛むこともある。然し小さい子供や老人には痰の出ないこともあり、此等の人にあつては、痰の爲めに毛細氣管支が閉塞つて、肺萎縮やカタル性肺炎を來すことがあるから、老人、小兒、虚弱者には、本症は大病であると心得ねばならぬ。

(療法) 發汗劑アスピリンを用ひ、また吸入をする等急性氣管支カタルと同様の處置を行ひ、呼吸困難あるときは酸素吸入を行はしむるが、何れにしても熟練なる醫師の治療を要するものである。

ある。

第五節 纖維素性氣管支カタル

(原因) 多くはデフテリア、肺炎等に續いて起るものであるが、また時としては不潔の空氣、刺戟性瓦斯を吸ふために起るものもある。

(症候) 原發性のものにあつては、丁度肺炎のやうに、急に熱が出て、息困しくなり、甚しきは窒息することがある。咳嗽は出初めると、痰の塊りが喀出されるまで續くからして、時には非常に長い間咳嗽することもあり、同時に、氣管支の形をした纖維素の喀出せらるゝが特徴である。また本症は普通十四日間位で癒るものであるけれども、慢性になると一年餘に亘つて、咳嗽發作即ち咳嗽が強くなり起つて、痰の塊りが出ると、それで樂になるとを度々繰り返すものである。

(療法) 發作時即ち咳嗽の出たときには、石灰水と蒸留水とを半々に混ぜたもの、または五十倍の重曹水、百倍炭酸加里水等の吸入を行ふと、痰が樂に出るものであるが、時には催吐劑を與へて嘔かせねばならぬこともある。尚ほその他の療法は慢性氣管支カタルと同じでよろしい。

第六節 腐敗性氣管支カタル

(原因) 腐敗細菌の爲めに、喀痰が腐敗するものであつて、肺結核、氣管支擴張、慢性氣管支カタル、肺壞疽等に續いて起ることが多いものである。

(症候) 始め惡寒がして熱が出る。喀痰は腐つたやうな刺戟性の惡臭を放つもので、室内も爲めに惡臭あるに至り、患者の呼吸もまた惡臭を放つものである。殊に妙なのは患者が直立すれば咳嗽は止まるが、身體を動かすとまた出るものである。その他節肉痛や關節痛などもあり、また喀痰を嚥み下すが爲めに胃腸も悪くなるものである。

本症は間々危険なる腐敗性肋膜炎、肺壞疽、カタル性肺炎等を併發することがあり、また本症そのもの、全治は六づかしいものである。

(療法) テルペンチン油に浸したかガゼを病床の周圍にかけて、その蒸發氣を吸はしむ、また石炭酸水の時々室内に噴霧し、或はテレベンチン油パイプを吸はしむ。ミルトール〇、三をカプセル三個に分け入れて一日三回に服用せしむるもよろしく、また漢藥の瓜婁仁と桔梗各一匁に水二合を入れ、一合三勺に煎じつめて一日三回に服用するもよい。何れにしてもカルアグレス錠

を持藥とし、用ひるがよい。

第七節 氣管支擴張

(原因) 氣管支擴張は、慢性氣管支カタル殊に毛細氣管支カタル、肺結核、百日咳、麻疹等に續いて起るもので、殊に老人に多いものである。

(症候) 俗に老人の痰持ちと云ふのは、多くは本症であつて、痰が澤山に出るものであり、殊に、朝には夜間に溜つた痰が出るので、その量は頗る多いものである。痰は粘液が少く膿のやうで香酸性の臭氣がある。痰壺に入れてそのまゝにして置くと、下から沈澱膜、漿液層、膿性粘液層、泡沫性粘液層の四層に分れるものである。また患者の呼吸は高調にして喘ぐがやうなものである。また本症はなか／＼頑固にして、全治は六づかしいものである。

(療法) 力めて滋養食を攝り、適宜の運動、新鮮の空氣を吸ふ等衛生的生活を守ることが必要である。痰の出るときには、手を以て胸を壓してなるべく痰を出して了ふがよい。内服藥はいろ／＼あるが、テレベンチン油の吸入、ミルトールの内服等、何れも醫師の投藥を要するものである。

(原因) 肺膿瘍は、肺の疾患殊にコロブ性肺炎に罹つた患者が衰弱したとき、またはその人が平生大酒する人であると起るものであり、また流行性感冒、嚥下性肺炎、異物肺炎、吸引性肺炎肺の損傷、氣管支病その他によつて起ることもある。

(症候) 腐敗膿性の臭氣ある痰を出すのが特徴であつて、惡い方の肺を下にすれば膿汁が溜り、その體位を變ずれば、咳嗽が出てそして痰が澤山に、口腔に一杯も出るものである。喀痰は全く膿のやうで、これを靜置すれば、上より泡沫層、漿液層、膿層の三層となるものである。若しまたその膿汁が體内に吸収せらるゝときには惡寒を發し、熱も出て、そして患者は急に力が脱けたやうになるものである。

(療法) 内科的の療治は姑息であるからして、早く外科の療治を受ける方がよろしい。

第九節 肺氣腫

(原因) 肺氣腫は、呼吸困難が永い間續く爲めに起るものであつて、高齢者は多少とも本症を有するものである。

(症候) 肺の下縁が延びて下に下る病氣であつて、甚しい場合には胸廓が洋樽のやうに中央が膨れるものである。本症を有する人は、呼吸時に胸廓の運動することが少く、呼氣は延長し、多少の咳嗽がある位で、大した容態を呈しないものである。尤も重症の場合には呼吸困難を來すことがある。

(療法) 老人性のもものは大した療治の方法はないが氣候の良い所や、温泉場などに轉地せしめると多少は快くなるものである。それから呼吸筋のマッサージ、電氣療法それからワルデルブルク氏の氣槽、トラウベ氏の胸廓壓迫器等を用ひて、空氣療法を施すこともあり、若し呼吸困難を來せば、酸素吸入をなさしむるがよい。

第十節 喘息

(原因) 喘息には數種あるも、眞の氣管支喘息の原因は不明であるが、殊に神經性素因を有するものに多く、貧血、虛弱性體質、腺病質のものは本病に罹り易い、そして少年時代に發して二十才になつても尙ほ治せざるものは多くは生涯癒らぬものである。それからまた一種反射性喘息と云ふて、耳鼻病、胃腸病、皮膚病、子宮病、月經時等に發するものもあるが、此等はその原因を

去れば癒るものである。

(症候) 本症は、呼吸困難が發作性に來るものであつて、毛細氣管支が一時的に痙攣を起すものである。發作は殊に夜間に多く發し、主にも呼氣性の呼吸困難を發し、患者は窒息するやうな感じがあつて、上肢を挙げ、または前の方に屈み、冷汗を流し、甚しきは失神するものもある。そして少量の粘つた膿性の喀痰を咳嗽と共に喀出してそれですべての症狀が去つて、唯ゼー／＼と云ふ喘鳴のみ残るものである。

(療法) 發作時にはアドレナリンその他の注射によつて緩解するものである。またカルチウムの注射もよろしく、カルビタミンを長く持薬として服用するのは最も效がある(小石川區大塚仲町三六救生藥園發賣)これは毎食後に三回づゝ服用するのである。それから發作時に一二三四五と唱へ、六のところを息を吸ひ、次の瞬間は全く呼吸を止め、續いて七八九十一と唱へ、また吸息をするゼンデルの計算法と云ふのがあるが、これは割合に效があるから、發作が起りさうなときにこれをやるとよろしい。

第十一節 耳性咳嗽

(原因) 耳性咳嗽とは、消息子、綿片、耳垢その他の異物が耳内の迷走神經耳枝の分布區域内に外聽道壁を刺戟するによつて發するものである。

(症候) 咽頭に一種不快の痒い感じがあり、次で乾性咳嗽を發するが、この咳嗽は頗る頑固で然も頻發するものである。

(療法) 原因となれる異物を除れば、それきり癒つて了ふものである。

第十二節 百日咳

(原因) 百日咳は主として五才以下の小兒を侵す傳染病であつて、ボルデー、ジャング菌が原因である。

(症候) 百日咳が傳染すると、凡そ三日から七日位經つてから始めて症狀が現はれて來るが時としては二週間位かゝることもある。またその症狀は時期によつてこれを三期に區別するものである。

第一期はカタル期と云つて、軽い氣管支カタルの症狀、即ち軽い咳嗽があつて、少しく聲が嘎れる位である。さうかうして二三日經つと咳嗽の模様が變つて來る。咳嗽の一つ／＼の間は極め

て短かい、これが特異の症状であつて、それと同時に咳き込むのがひどくなる。この期間は凡そ一週間、稀には二週間であつて、第二期に入るものである。

第二期即ち瘵咳期は、百日咳特有の症状を發する時期であつて、咳嗽が一層強くなつて、そして後を引く、コン／＼と咳嗽と咳嗽との間が短くして、その数が連続的につゞく、即ち咳嗽の間は息を長く出し切つて居るので、今度咳嗽が止むと、それを恢復するために息を強く吸ふがこのときにはヒューと所謂笛聲を發するものであるが、この咳嗽發作は、痰が出ると、それで終るものである。一體子供は喀痰があつても嚥み込んで了ふからして、外へは出さぬものであるが百日咳にあつては、咳嗽の終りに必ず痰を出すものである。そしてその痰の色は、他に合併症が無いときには、粘稠な濃い白色なる唾液に少し痰が交つて居るものである。

この發作の回数は、一日三十回から四十回であるが、その中でも強い咳嗽は夜中殊に深夜に起るもので、子供が樂に寝て居るが、急に起き上つて、ひどい咳嗽をして、その咳嗽が済むとすぐ倒れて眠つてしもふ。それから咳嗽發作の際に、餘り力をいれる爲めに、多くは眼瞼が腫れる、時には結膜に出血を來して眞紅になる、また齒齦から出血することもあれば、舌繫帯が切れるこ

ともある。顔が赤くなつて充血の爲めに、衄血や咽喉出血を來すことがある。

この瘵咳期を過ぎると、追々に恢復期に向ふものであるが、その経過は五十日乃至百日であるそして恢復期に向つた後にも、風邪を惹くとか、氣管支カタルに罹るとかすると、殆んど百日咳と同様の咳嗽をするものであるが、多くは再發でなくして、唯前と同様の仕方をしたに止まるものである。

(合併症) 百日咳には恐ろしき腦出血や中耳炎を合併することがあり、また肺炎を起すこともあつて、この餘病の爲めに生命を取られることが間々ある。

(療法) 若し一家に百日咳が出たならば、健康な子供を隔離して、そして豫防注射をするがよい。昔は百日咳にはよい薬は無かつたが、今日では百日咳菌ワクチンの注射で、豫防も出來ればまた療治も出來る。此注射はその量にさへ注意すれば、小さな子供でも少しも危険がない。併し此ワクチンにはいろいろあるから、必ずほんとうの百日咳菌で製したワクチンを使はなければならぬ。異種菌で製したものでは效がない。早野氏の百日咳ワクチンならば確かである。

(原因) チフテリアの原因は、レフレル氏によつて發見せられたチフテリア菌である。本病は主として小兒に多いものである。昔はこれを馬脾風ばひふうと唱へて、小兒長じて十才になれば罹らぬとしたものである。然し十才になつたからとて罹らぬことはない。尤も少いことは少いが大人でも罹るから油断は出来ぬ、普通は二才から五才位の小兒が最も侵さるゝものである。

(傳染徑路) 直接患者に接するか、または玩具等を介して傳染することがあり、また幼稚園などで傳染することもある。

(症候) チフテリアに罹ると、どうなるかと云ふに、咽喉のどに來た場合には、扁桃腺に黄色を帯びた白色の義膜が、多くは内面に向ひ合つて、くっついて居る、初めは小さいが、だん／＼大きくなつて、一日位経つと、扁桃腺の全面に擴がつて、咽喉の後面にまでも進む、始めは綺麗であつたのが、汚穢色になつて臭氣を發するやうになる。そしてだん／＼咽喉の方に進んで行くが、ひどくなると壞疽に陥つてしもふ。また時としては口蓋弓に進み、或は懸壺垂ひんげりにまでも達して、その後より漸次前方に廻つて、そして懸壺垂が落ちて了ふやうなことがある。こんなひどくなつて毒が廻るとどうしても助からぬ、假令血清を注射しても助からぬことがある、と云ふのは

血清は注射してから十二時間経つて、始めて利いて來て、二十四時間位までにつつと利くのであるから、それだけの時間を待つことが出来れば、義膜はだん／＼に落ちるけれども、毒の廻つたのはそれまで待たぬ間に、つまり藥の利いて來ぬ間に、病毒が勢を逞ふして死んで了ふことになる。殊に大きい子供であると、時間の経過して居るのが多い、小さい子供には症候が早く現れるから、親達も早く發見して、早く醫療を受くることになるけれども、大きな子供であると、三十八九度の發熱はつちゅうがあつても、外に出て遊んで居ることがよくある。それに咽喉が痛むなど云ふと、醫者に連れて行かれるのを嫌がつて隠して置くことがあるから、かういふ子供には、得て手後れ勝なるものであるから、若し子供の口が臭いと云ふやうな場合には注意しなければならぬ。チフテリア血清が發見されてから、此の病氣で死ぬ者が大分減つて來たけれども、我が國に於て割合に死亡率の多いのは、この手後れの爲めである。助かるべき病人を見す／＼手後れの爲めに殺すと云ふのは實に遺憾の極みであるから、小兒こどもを持てる親達は、よく／＼この點に注意して、殊に本病の流行時にありては、細心の注意を拂はなければならぬ。

本病に犯されると、小兒は一般に元氣がない。所謂意氣消沈いぎしょうしんの態に見える、小さい小兒でも機

嫌が悪くなる。體温が上る、咽喉が痛む、少し大きな小兒であると、食物を嚙み下すときに咽頭が痛いと言ふ、咽頭を見ると赤くなつて居る、扁桃腺は左右共に腫れて、その表面に義膜を見る病氣の初めに於て顎下腺が腫れて、壓すと痛む、これにも軽重があつて、重いのは前云つた通りに瘰癧を起すやうになる。熱は始めは三十八度位であつて、晩には九度六分、時としては四十度位に達することがある。そして血清を注射して、その血清が利く頃になると、ちよつと熱が上つて、それからだん／＼に下つて、二日目には落ちて了ふものである。

デフテリアが鼻に來た場合には義膜が見當らぬ、濃い膿汁のやうな、血の混つた鼻汁が出る、だからデフテリアなど、思はずに、風邪を惹いた位に思つて居る間に、病勢がだん／＼に進むと云ふことがあるから、注意して早く醫師に診て貰はねばならぬ。咽頭に來た場合でも、義膜が見えぬときには判らぬことがある。それで熱が高い、風邪の手當をしてもさつぱり熱が下がらぬ、相變らず熱が高いと言ふやうな時に、咽頭を見て分らんでも、痰を喀かして見ると、その中に血が混つて居ると云ふ場合には、デフテリアに疑を措いてもよろしい。

デフテリアが喉頭に來た場合は甚だ悪性である。この場合にはクロロプと言ふが、喉笛の聲を

出すところが狭くなつて來るので、呼吸がビュー／＼と笛聲を放つ、粗烈い犬の吠えるやうな咳嗽をする。これは本病に特有の徴候である。衣類を脱がして見ると、胸は波を打つやうに、上下に運動する、心窩や喉頭の邊が凹んで、如何にも苦しさうであるが、實際これは非常に危篤なる症状であつて、一二時間の間に、窒息して死に至ることがあるから、片時も早く醫師を招んで、血清を多量に注射してもらはねばならぬ。血清は量が多くとも害はないから、多量に、そして出來るだけ早く注射して貰ふと云ふことは、必要の注意であつて、決して猶豫をしてはならぬ、一時間は悪か一分時を争ふもので、時によりては氣管支切開術を行つて、窒息を救はねばならぬこともある。

(豫防法) デフテリアは矢張警察に届けねばならぬ傳染病である。本病の流行時には咳嗽する子供の傍へは近付けず、これは家族同士でもさうである。一般玩具の如きも貸借を禁じ、また自宅に患者の生じた場合には、病兒を速に病院に送ると共に、健康兒には豫防的血清注射を行ひ、尚ほ自宅に咳嗽する小兒があれば、假令醫師が寒冒と證明しても、なるべく他の室に隔離するが安全である。何となれば、始め寒冒と思つても、後にデフテリアになることが間々あるので、且つ

如何に上手な醫師でも初めの鑑別はなか／＼難儀な場合が多いからである。それからイヤに寒い時分に小兒を外出させるのはよろしくない。假令脊負つても冷たい空氣が障り、また平素咽喉カタルに罹り易いものであるから、含嗽その他の治療法によつて十分治療して置かぬといけな

い。
(療法) 以上の豫防をしても不幸にして病に侵されたとき、また侵されたと思ふときには、一方醫師の來診を請ふべきは勿論のこと、この場合には醫師は血清注射にて治療するものであるが、自宅療法としては、豚の腸で製した細長い氷袋に氷を詰めて領巻状として頸に冷巻法を行ひまた五十倍重曹水または食鹽水に鹽酸加里を混じたものを吸入させるとよい。また流動食に葡萄酒若しくは保命酒などの強壯劑を與へるのも一つの注意である。

(病後の用心) チフテリアが癒つても、喉頭、口蓋に麻痺を残しまたは懸様垂が曲つて物を云ふことが出来なくなつたり、ムセたりすることがあり、また腎臟炎を起すこともあるから、熱も無く氣分もよいかから大丈夫だなど、云ふ素人考へで醫療を廢してはならぬ。百里を行くものは九十里を半とすと云ふ心得で、癒つたと思つても醫師の許すまでは治療を怠つてはならぬ。それに

本症は一度罹ると、反つて再感し易い素因を養成して、二度も三度も、或はそれ以上も感染すると云ふ風になるから、初めから傳染せぬやうに注意が肝要である。また病氣の後には呼吸器病に罹り易くなるからして、カルアグレス錠を持藥として用ひ、呼吸器の抵抗力を強くするのは、何よりの注意である。

第八章 血を喀く病氣

第一節 咯血病の見分け方

咯血とは、呼吸器からして、血を喀くのを云ふものである。同じく血が出たにしても、消化器から血を嘔くのは吐血と云ふものである。咯血の量はいろいろであつて、所謂大咯血と云つて澤山の血を喀くものもあれば、また極めて少量のこともある、また痰に血の混入のはこれを血痰と稱するものである。

咯血の氣管より出血するものでは氣管支炎、纖維素性氣管支炎、鬱血性氣管支炎、腐敗性氣管支炎、炎殊に結核性氣管支炎等に來るものである。その他異物、出血性素質ある者、尿毒症、膽血症、

腐蝕性瓦斯の吸入、強劇なる壓迫、舉上、咳嗽、高度の空氣稀薄なるとき假へば飛行機に乗り、或は高山に登りたる時等にも咯血することがある。また婦人にあつては、月經の代りに氣管支出血を來すこともある。次に肺から來る咯血では肺結核、肺壞疽、肺膿瘍、肺膿瘍、肺エヒノコックス、肺ヂストマ、コロブ性肺炎、肺外傷、出血性栓塞、肺腫瘍、肺微毒、肺水腫等に來り、また心臓瓣膜病や、ヒステリーにても咯血を來すことがある。

咯血を來す病氣は、斯くの如く澤山あるが、その中最も多きは肺結核である。若し氣分が勝れないで、カラ咳があり、咯血または血痰があると云ふときには、先づ肺結核に疑を措いてよろしい。實際咯血の大多數は肺結核である。その次に多いは肺ヂストマ病であるが、これは長く續いても割合に身體が衰弱せぬものである。そしてその痰を顯微鏡で検査すれば無論判るものである。その他の病氣はさう澤山あるものでないから、先づ普通にはそれを考へる必要はない。

第二節 咯血 吐血との鑑別

前にも云ふ通り、呼吸器から血の出るのは咯血で、消化器から出るのは吐血である。咯血は、咳嗽が出てそして血が出るもので、その色は多くは鮮紅色即ち新しい血の色をして居り、氣泡即

ち空氣を含んで居る。そして呼吸器に病氣を見出すことが出来るものである。

吐血は、嘔吐によつて血を吐くもので、その血の色は帶黄色或は黒赤色の塊まつたものであつて、そして食物の残片を混することが多く、それにまた既往症に胃病の徴候を有するものであり胃潰瘍、中毒、傳染病等に發するものであるからして、少しく注意すれば判るものである。

第三節 肺結核

A 肺結核の原因

よく素人が肺病と云ふことを云ふが、一體肺病とは、肺に來る一切の病氣のことであつて、假へば肺炎も肺病、肺結核も同じく肺病の一種である。併し俗に云ふ肺病、即ち我々の云ひ慣れて居るところの肺病は、肺結核と云つて、結核菌と云ふ一種の細菌によつて起るところの肺の炎症で、打ち捨て、置けば、終に肺に空洞が出來、その人をして死に至らしめるところの恐ろしき病氣である。最も結核菌は獨り肺に來るばかりでなく、喉頭を犯せば喉頭結核、腸を犯せば腸結核と云ひ、その他關節、睪丸その他矢張犯さるゝものであるが、その中最も侵さるゝものは肺臓であつて、結核と云へば肺病のことだなあと、素人までも知つて居る位のもので、肺癆、癆瘵、ノフ

チジス」「ツベルケル」「コンサンブション」など云ふは皆肺病のことで、肺炎カタル、肺浸潤やど云ふは、この肺病の初期のことであるが、この病氣に罹る者の数は頗る多く、全人類の大多數は、殆んどこの病氣に罹らぬ者は無いと云ふても良い位に多くある病氣である。

この恐るべき肺病を起すところの結核菌と云ふものは、どんなものであるかと云ふに、肺病患者の喀痰中にはその數幾百萬と無く見出さるゝ(一塊の喀痰中三億萬個を含む)下等植物であるがその形細微なるが爲めに、肉眼にては到底これを見ることが六つかしく、これに一定の方法によつて色を附けて五百倍の顯微鏡に照らして検査すると、丁度毛髪を細斷したる如き形状に見えるものである。そしてこの細微なる結核菌は、若しその一個にても、その發育に適當なる場所、假へば弱き人の肺臓内に附着するときには、丁度餅の微が蕃殖するが如くに發育増殖して、遂に肺結核を起すものであるが、コレラ菌やペスト菌の如く一二日の中に發育するものでなくして、半ヶ月乃至一ヶ月の間に徐々發育するものであるから、従つて此等の病氣の起るよりも、肺結核の起るのは遙に緩慢である。

結核菌の發育は、斯くの如く徐々であるけれども、その抵抗力は甚だ強硬である。彼のペスト

菌や、コレラ菌の如きは、これを乾燥するときには、忽ち枯死するに至るが、結核菌は、假令これ乾燥するも、日光の射入少き場所にあつては、三ヶ月乃至三年の久しきに亘るも、尙ほ且つ生存してその毒性を保つものである。この乾燥に堪ゆる力は即ち本菌の恐るべき特性であつて、結核患者蔓延の主なる原因は、實にこの理由に存するものである。その他水中、氷雪中或は下水便所等に於ても、矢張數ヶ月生存することを得るものであるから、痰を消毒せずして捨てるのは何れの場合を問はず、甚だ危険であると知らねばならぬ。

斯くの如く頑固なる抵抗力を有する結核菌も日光に對しては、その抵抗力は甚だ薄弱なものであつて、日光に直射せしむれば、一時乃至五六時間に枯死し、屋内等に於ける散擴光線にあつても、二三日乃至九日間に大抵枯死するものである。併し單純なる温度に對しては他の細菌よりも耐久力の強いものであつて、腸チフス、赤痢、コレラ、ペスト菌の如き細菌であつても、攝氏の六十度即ち華氏の百四十度の温熱に逢へば、十五分間で死んでしまふが、結核菌は攝氏の七十度即ち華氏の百五十八度の温熱に逢つても三十分乃至一時間位経たなければ死なぬものである。けれどもこれにアルカリ性の物を加へる、即ち十度の温湯に曹達を溶かしたものの、中に結核菌を

入れると、忽ち死んで了ふものである。

B 結核はどうして傳染るか

(遺傳はしない) 肺結核は、遺傳するものとは、久しい間、人の頭腦に浸み込んで居つたものであるが、併しこれは決して遺傳するものではない。一體結核が遺傳するとせば、第一は精囊に結核があるか、第二には、結核に罹つて居る卵が受精するか、或は母の胎内にあるときに、胎盤血行によつて結核を受くるか、この三つの中の一つでなければならぬのであるが、これは事實に於てあり得べからざるもので、換言すれば結核は遺傳するものではない。

(結核に罹り易き人) 結核は遺傳するものではない、併し結核は遺傳せぬけれども、結核患者の子女は、結核に罹り易い體質に出来て居ると云ふことだけは、内外諸大家の均しく認むるところである。然らば結核に罹り易い體質とはどんなものであるかと云ふと、胴の長き人、顔色が蒼白くして細長き人、所謂身體の薄べつたき人、知覺の極めて鋭敏なる人、鎖骨上の凹み甚しき人、腺病質の人、爪は彎曲して、指の尖端は丸く肉付いて短く、皮膚は蒼白く光澤ある人等は、此體質に屬するものであるから此等の體質を有する人は、大に注意しなければならぬ。

肺結核は、結核菌の爲めに起る、一種の慢性傳染病であるが、呼吸器、消化器等に病氣のある人、身體の衰へて居る人などは、どうしてもかゝり易い、即ち此等は誘因となるものである。また病氣の中で最も多く誘因となるものは肋膜炎であつて、肋膜炎の中には、既に結核が原因となつて居るものが多い。それから肺炎、インフルエンザ即ち流感、麻疹、百日咳等が結核の誘因となるから、此等の病氣に罹つた人は風邪をひかぬやうに注意せねばならぬ。またカルアグレス錠を持薬として用ひてゐて、抵抗力を強くすることも必要の注意である。

(結核の侵入門口) 結核菌が我々の身體に侵入する門戸は三つある。第一は、呼吸によりて氣管より肺臓に入るもの即ち呼吸器傳染、第二は飲食物と共に胃腸内に入るか、または食器その他にくつついて居つて、それから胃腸内に侵入するもの即ち消化器傳染。第三は皮膚及び粘膜炎の創傷傳染であるが、この三つの中、第一の呼吸器傳染は最も多い。一體結核菌は乾燥に對しては抵抗力が強いから、患者の咯き散らした痰が乾燥し、空中に浮遊する塵埃になつて身體に侵襲する場合が非常に多いものである。結核菌が水分を有して濕つて居る間は、傳染の機會は寧ろ少い、直接に痰を以て皮膚の創傷に植え付けるか、患者の咳嗽のときに細菌を有する水滴が噴霧

狀になつて出て来たのを吸入するか、または病毒に接觸することが多い場合、例へば結核患者を看護したとか云ふことからして傳染するのは別であるが、乾燥によつて空氣中の塵埃の中に浮遊して居るのを知らず識らず、我々の呼吸器に受くると云ふ傳染の徑路が最も多い、だからして停車場とか、その他轉地療養地などで、此等の機會に遭遇することが間々あると思はれるのである。

○ 結核に罹ればどうなる乎

肺結核に罹つても、その初めは潛伏して居つて、症狀を現はさざることが多いものである、この際にあつては、如何に精細に調べても判らぬことが多いものであるが、その症狀が現れるやうになれば、頑固の氣管支カタルがつくことがあり、そして風邪を惹き易い、ちよつとしたこと少し寒いと思つた位でも直ぐ風邪を惹くと云ふやうになるものである。それからもう一つは胃の故障、即ち丁度胃カタルのやうな容態になり、その中にだんく顔色が蒼くなつて来る。また婦人にあつては月經が不規則になると云ふ様のは、普通最も多く現はる、徵候であつて、それに少しく運動すると息がきれる、その場合にまた熱が出ると云ふやうなときには、ことによると肺結

核の初期かも知れぬと心得て注意せねばならぬ。また人によりては非常に神經質になつて、胸が痛い、咳嗽が出る。さてはいよく結核に罹つたか知らんと、氣を揉んで、反つて自分で悪くして、そして醫者に來る人もある。

結核に罹つても咳嗽の無い人はいくらかもあるが、若し咳嗽が出れば、それは極く短い乾咳でいくつも出て、そして少量の痰がある。また痰の中に血線を混ざることがある。血がまざると人は非常に驚くものであるが、その中にはほんとうの咯血ではなくして、齒齦の出血または咽喉の出血等が咯痰の中に混ざることがあるから、咯血ある場合にはよく醫師に就て診斷を求むるがよろしく、醫師もまたこの點に注意しなければならぬ。

この咯血は必ずしも、肺の症狀の劇しい場合にのみやつて來ると云ふものではない。する分初期にもあり、また咯血があつたとて、症狀が劇しいとは決つて居らぬ。即ち咯血の有無によつてその症狀の輕重は定まつて居らぬ。咯血があると素人は非常に恐れて大袈裟に考へるが、少量の出血にありてはさほど恐れるに及ばぬ。また咯血の量は、通常非常に過大に思はれるもので、一升も出たと云ふときに検査して見ると、一合にも足らぬ場合が多い、通常そんなに澤山に出るも

のではない。咯血が極く少量なるときには、膿汁のやうな痰の中に血線が交つて居る。またその量の多いときには、鮮紅色の泡沫を混する痰或は血液が咳嗽と一緒に出るものである。前にも云ふ如く出血は人の恐る、ところであるが、併し乍ら出血の爲めに直接生命に危険を及ぼすことは稀れである。また患者によると、度々出血があつて、それが爲めに非常の貧血に陥るものもあれば、また出血の後、適當なる養生によつて恢復に至り、安心して居るときに、再度の出血を來すことがあるから、よく注意せねばならぬ。

發熱は、極初期には、過多の運動をした後に出て、また多くは夕方には少しく出るが、その度は高くない。また熱の無いのもあつて、この熱の無いのは熱のあるものよりは病氣の性質がよろしく、大變に良い證據である。また中には非常に高い熱が続くこともあつて、チフスかと思ふ様に高熱の持續するのは、多くは肺炎または粟粒結核を併發せる爲めであつて、甚だ面白からぬ症候である。この外毎夕規則的に高熱が出るので、マラリアと間違へるやうのこともある。また熱はさほど劇しくなくも、弛緩性の熱が長く続き、殊に夕方になると熱が高くなり、熱が出ると食欲が無くなり、氣持が悪くなると云ふ風のものもある、また悪寒がして夜になれば熱が下つて朝

は出ないが、晩になると屹度熱が出る、そしてマラリアの如くに熱の下るときには汗が出ると云ふのもあれば、また盗汗が出て冷く感じ、衰弱の感あるものもある、殊に盗汗は、結核の第一の症候であるから、假令他に何等の症候が無くとも、盗汗のある場合には注意せねばならぬ。

それからまた熱の無き患者にあつても、朝と晩との體温に相違があつて、朝よりも夕方の方は體温が高い、殊にその差の多いものは、これは口呼吸熱と云ふて、假令他の何等の症候が無くとも、早晚結核が現はれるものと思はなければならぬ。少くとも結核に疑を措かねばならぬものである。また散歩若しくは運動などをなせる後に、體温が攝氏の三十七度以上に昇ると云ふやうな人にあつても矢張用心せねばならぬ。

それから動悸が起る、即ち心臓の鼓動は早くなる、それから血壓が低いこともあり、少しく感動することがあれば、脈搏は忽ち早くなる、また平生に於ても健康人よりは、少し脈搏の早いのが常である。また胃は極く初期に於て多少侵される、即ち食欲は進まず、何時でも腹が張つて一杯なやうな感じがして、少しく物を食べても腹一杯になる、また嘔氣があつて、殊に咳嗽と共に嘔き、そして胃液の酸が不足して來る。腸にあつては、痰を嘔み込むために、肺と一處に病氣に

罹つて、結核性の潰瘍くわいようが出来ることがあつて、かうなると頑固な下痢げりが起る。殊に鶏鳴下痢と云つて、夜明けには必ず下痢が起る、また便に血が混ることもある。時にはまた腹膜炎を起すこともあるから、結核患者は決して痰を嘔み込まぬやうに注意せねばならぬ。

(不治の症に非ず) 肺結核の経過はいろいろであつて、一定しない、結核と判つてから間もなく死ぬものもあれば、また何年も何十年も生きて居るものもあつて、要するに養生次第であつて決して不治の症ではない。結核は十分癒るものなることは、今日の學問上一點の疑を入るゝの餘地の無いものであつて、養生次第では必ず癒るものであるから、假令結核の診断を受けても、恰も死刑の宣告を受けたが如く考へて失望するは無益の業である。殊にそれが爲めに自暴自棄に陥るが如きは、益々その病症を増悪せしめて、反つて癒るべきものを自ら死地に導く愚を敢てするもの故、結核患者はよくこの點に注意して十分なる攝生を加ふることが必要である。

D 肺結核の豫防法(消毒法)

(危険なる場所) 肺結核は、前にも云ふた通り一種の傳染病である。それ故にこれを豫防すると云ふことは何より必要なことである。またその原因は結核菌であることも前に云ふた通りであ

るが、この細菌は素人の考へる如くに、さう無暗に空中に飛んで居るものではない。最も危険なのは病人の周囲である。殊に結核患者の出した痰、唾液その他の分泌液や排泄物は危険であるによつて、特に此等に注意しなければならぬ。殊に咳嗽と共に飛んで來るところの唾痰の切片せいはんには結核菌を含んで居つて、最も恐ろしいものであるから、咳嗽する病人に近づくのは最も危険である。

(消毒法) その外食器類、衣服類、半巾、寝具、枕等、すべて結核患者の使用せる物は、皆傳染を媒介するところの危険物であるによつて、最も注意して消毒せねばならぬ。此等の物は、物によつては煮て消毒するもよろしく、また一定の消毒器に入れて消毒するも宜しいが、蒲團の如きものは、日光の直射する場所に長く放置して日光消毒を行へば、十分に消毒が出來て、案外に安心なものである。

患者の寝起きする室、病室、仕事する室、書齋等もまた危険である故注意せねばならぬ。殊に咳嗽する患者にあつては、一層その危険の度は劇しいもの故、この場合に於ては、書籍は勿論、家具その他のすべての道具類を消毒しなければならぬ。それからまた轉居する場合には、その家屋

に空気が日光を十分に入るべきは勿論、その他の方法を以て、家屋消毒を行ひたる後に始めて居住すべきである。東京などにはこの専門の消毒屋があるからこれを頼むもよろしく、また懸念の醫者に相談するもよからう。

(結核の擴がり易き所) 殊に結核の擴がり易いのは貧民窟、監獄、寄宿舎等であつて、此等のところは、平生衛生上の注意も乏しく、また光線の射入悪しきばかりでなく、此處に住するものは、多く不衛生に流れ易いものであるから、此等の場所に於ては非常に用心せねばならぬ。また大勢の人の中には假令結核の症狀が外部に現はれぬにしても、結核患者のあることは屢々故、特別に注意しなければならぬ。

(患者自身の注意) 結核患者また自身も注意して、無遠慮に公會の席に出るなどは避けなければならぬ、此等は患者の公德心に訴へて、決して人に害を與へるやうなことをしてはならぬ、殊に咳嗽のあるときには尙更此等の注意は必要であつて、咳嗽をしながら他人に向つて談話をしかけることなどは十分に慎むべきは勿論、假令他人と對座中でなくとも、苟くも咳嗽の出るときにはハンカチなり、若しくは紙片なりで、鼻と口とを被ふべきものである。それから咳嗽の防禦に用ひたハンカチなり、手拭なり、紙片なりは、必ず消毒を加ふべきは勿論である。

(痰壺の用意) それから患者は健康なる子供と同室に居ることや、食器、夜具等を共用しまたは同室に寝ること等は皆避けねばならぬことである。尙ほまた咳嗽ある病人が歩行中道端に痰を咯き出すことなどは最も慎まねばならぬことであつて、痰中の結核菌はやがて乾燥して土に交り空氣中に飛び廻り、危険を醸すことは火を賭るよりも明らかなること故、此等も前同様よろしく患者の公德心に訴えて慎んで貰はねばならぬ。それ故に患者は常に蓋のある痰壺を携帯するか、或は紙袋の中に痰を出して、後に之を焼き捨てるのが安全であるが、一番簡單なのは、便所の中に捨てることである。それから今では停車場、料理屋、旅人宿、寄席、劇場等多種の人、多數の人の集まる所には痰壺を備へてあるから、唾痰は必ずこの中に咯出しなければならぬ。また此等の痰壺は必ずしも石炭酸水を入れなくとも、唯の水でもよろしい。また砂や鋸屑を入れて置いてもよろしい、そしてこれは一定の消毒を加ふべきものであるが、便所の中にその内容物を捨てるのは一番簡單で然も安心である。

(消毒法) ハンカチ、手拭その他の布片であつて、重ねて用ゐることの出来るものは石炭酸水

または昇永水等に浸して直ちに消毒を行ひ、紙片等を便所の中に捨てるがよい。また痰壺は凡そ半分位も痰が溜つたならば、その中に洗濯曹達を一と攪み入れて、ぐらぐら沸騰した熱湯を壺一杯に注いで置けば、その湯の冷める頃には、結核菌は残らず死んで了ふものである。また痰一合に付き曹達を凡そ一匁の割合に混じて、五分間も煮沸するのは前より今一層安全な消毒法である。

それから椀、箸、皿等の食器は沸いて居る熱湯に約三十分入れてから之を洗ひ、寝衣、敷布等は二三日隔きに熱湯に浸けてから洗濯し、衣服、寝具等は、時々日光に曝らせば、立派に消毒が出来るものである。

E 肺結核の最新療法

肺結核の治療法としてもはやされて居るものは澤山あるが、矢張攝生療法は最も大切であつて、これと共に適當なる藥物を用ゐるのが一番よろしい。今これ等に就て、その主なるものに就て説明しよう。

(食餌療法) 食物は身體の營養に缺くべからざるものであるから、病人でも健康者でも無くてはならぬものであるのは、誰人でも知つて居るところである。殊に肺結核の如き身體の消耗の甚しき病氣にあつては、成るべく滋養食を多く攝つて、體力の消耗を補はなければならぬ。結核の治療に就ては、種々特異な意見を有つて居る學者もあるが、どんな療治をするにしても、體力の維持増進即ち滋養食を十分にやらなければ、その効果を擧げることとは出来ぬと云ふことだけは、誰人も否むことの出来ぬ眞理である。體力が強壯であれば假令病毒が勢を逞うしても、これに對抗することが出来ぬから、結核を患ふる人は、胃の許す限り澤山の滋養物を攝るやうにすることは大切の注意である。

滋養物と云ふと大抵の人は、牛乳とか鶏卵とかに限るやうに心得て、嫌ひでも何でもかまはずに我慢して食べると云ふ風があるが、何も滋養物は此等のものに限つたと云ふわけではない、米飯は勿論、魚、鳥獸肉その他何でも食物の中には皆滋養分を含んで居るから、出来得るだけ滋養分の多き、消化し易きものを澤山に食べるのがよろしいので、然もその食物は一方に偏せず、五穀、蔬菜、果實、魚肉、鳥獸肉卵等、種々なる食物を適當鹽梅併用するがよろしい。それから肺結核は脂肪分の消耗の甚しき病氣であるから、牛乳、バター、鶏卵、肝油、落花生、胡麻、鳥獸肉

等なるべく脂肪分の多いものを食べるのがよろしく、日本人には矢張どうしても米食を主とし、他のものを副食とした方がよい。

それから結核は身體にカルチウム分が少いと起り、またカルチウムによつて結核を癒すことが出来るからして、結核患者はなるべくカルチウム分に富む食物を用ゐる方がよろしい、烏賊、鰻泥鰯、数の子、人乳、牛乳、乾酪、卵黄、糠、豆腐、京菜、小松菜、菠薐草、つまみ菜、キヤベツ、サラダ、大根、牛蒡、ワカメ、昆布、蜜柑汁、覆盆子、苺、大豆、するめ、澤庵漬、佃煮、餅の昆布巻、小鳥焼等はカルチウムを澤山含んで居るものであり、また魚の骨や頭を焼いて食ふこと、鶏の骨たきを食する等は、最もカルチウムを多く攝ると最も都合の良い方法である。

(轉地療法) 結核患者の轉地に適するところは、高地氣候を呈する處、低地氣候を呈するところ及び森林地、海濱等であるが、一般に云へば空氣清良にして塵埃なく、水質純良、交通便利にして新鮮なる食料等を得易く、且つ熟練なる醫師のあつて、これを監督する等の主なる條件の外、少くとも冬は比較的緩和にして、夏季は稍清涼、また晝夜寒暖の差のなるべく少き土地を選ぶがよい。我が日本の如き島國にあつては、此等の要求を満足せしむるところは、海濱の地を措いて

他に求むることが出来ない。本島、四國、九州の南海岸即ち太平洋に面する海濱に於ては、此の要求に適すべき土地は澤山あることと思ふ。

轉地療養地として人に知られて居るところは、房總の南岸には銚子、小湊、白濱等、その西海岸にては北條、館山。相模の鎌倉、江の島、鶴沼、茅ヶ崎、平塚、大磯、二の宮、小田原、三浦半島、三崎、逗子、葉山等。伊豆半島東海岸の熱海、伊東、其南岸の下田。駿河灣の沼津、興津、遠州濱松附近。紀州東岸の熊野、その南岸の田邊、西岸の和歌の浦。和泉西岸の岸和田、濱寺附近。攝津南岸の灘地方。瀬戸内海の須磨、明石並にその附近等である。

(空氣療法) 空氣の新鮮なるは何人にも必要のものである。一體我々の身體に於ける酸化作用と云ふものは、空氣の力によつて營まるものであつて、百般の活動は皆それが爲めに行はる、ものである。新鮮なる空氣は、その作用完全なるが爲めに、血液の循環を良くし、食物の消化を良好ならしむるものであるが、これに反して不潔なる空氣殊に煤烟、種々の微菌等を含んで居る空氣を呼吸するのは、甚だ不衛生且つ危険である。肺結核患者が塵埃を含有せる空氣を吸入すれば、病の治癒を妨げ、病勢を増進せしむるばかりで無く、若し肺炎菌、化膿菌、インフルエンザ

菌等の侵入を空気より受くるときには、所謂混合傳染を發して俄に病勢の増進を來すものである。新鮮の空氣は斯くの如く大切にして且つ有效なるものであるによつて、彼の有名なるデットワイレル氏の、肺結核衛生療法の第一ヶ條に「新鮮にして汚れて居らぬ空氣を十分に呼吸すること」と云ふことになつて居るのである。

その他出來得るだけ、日光の透射よろしき處、即ち日當りの良きところに居る、所謂光線療法を行ふことも、また必要缺くべからざる療法である。

(藥物療法) 肺病に良いと云ふ薬はどの位あるか知れぬが、何れも一時的で、何時の間にか忘れられて消えて了ふ、古いところではヘトール、新しいところでは古賀液などは一時素晴らしい勢で賣れたものであるが、それも何時の間に無くなつて、今日ではそんなものもあつたけなあと、云ふ位しか人は覺えて居らぬが、これは實際利かないから使ふ人が無くなつたので、利くものならば益々世に行はれなければならぬ筈である。新薬などいかに巧妙に宣傳しても三年経たぬ中は使はぬと云ふ大家があるが、なるほど三年の中には良いも悪いも判るから、ほんとうに利くものならば、益々評判がよくなるわけで、よい薬は百年千年に亘つて決して無くならぬもので

ある。

我國に於て古來肺結核の聖薬として用ひられたものに葱蒜と云ふものがある。これは獨り我國ばかりで無く、支那に於ても數千年來これを賞用したものである。尤も一時洋薬萬能と云ふ妙な風の吹き廻しの爲め、一寸顧みられなかつたが、流石に我國だけでも二千年以來使はれて居つたわけであつて、今日ではまたこれを賞用する人は澤山出來て居る。現今我國に於ける漢薬研究の大家岡崎醫學博士の如きも醫事新聞並に實驗醫報に「前略或る特殊の有效成分現存し、これを久服すれば新陳代謝機増進し、筋肉の亢奮性を亢め、白血球を増進し、炎症の自然治療を催進する等(中略)肺病患者がこれが爲めに、豫防、治療の奇效を奏す云々」と述べられて居る。

著者も幼時亡父がこれを肺結核に用ひて奇效を奏せるを見聞して居り、自分もまたこれを用ひて幾多の肺患者を救つて居る。然し從來の用ひ方は煎じて服むか、或は粉末にして大量を用ひるので、永く用ひるには不便があつたので、その有效成分を拆出して皮下注射薬を拵へ、先づモルトに結核を植え、一定の症状を呈したる後、これに右注射薬を一定時注射したる後、これを撲殺し、屍體を解剖して、病毒の恢復せるを認め、即ち結核の癒るのを確めた。次にまた健康

モルモットの血液を採取し、その白血球の数を計算し、然る後右注射薬を注射して、一定日の後またその血液を採取して、白血球の数を計算せるに、其数の増加せるを認めたのである。

以上の試験によれば、薏苡は白血球の数を増加して、結核菌を喰殺す力を多くならしめ、また新陳代謝機を盛んならしめて、結核病を治癒せしむると云ふことが判るのである。それで余は更にその薏苡の有效分にカルチウムを加へて、一種の錠劑となし、これをカルアグレス錠（小石川區大塚仲町三六救生薬園發賣）と名つけて、結核患者に内服せしめて居るが、これも非常に成績がよろしい、流石に數千年賞用せられたるものだけあつて、昨今雨後の茸の如く輩出するものとは違つて、なか／＼よく利く、予は今日結核病（肺結核ばかりでなく、すべての結核病）の豫防薬または治療薬としては、これは一番良いものと思つて居る。用量は症の輕重に應じて、一日三回毎食後に三粒または五粒（豫防には三粒づつ）づつを服用するのである。

カルチウムは、現時醫學界に評判のあるもので、これは矢張白血球を増進して、微菌を喰ひ殺す力が強くなり、また肺の結核に罹つたところ即ち病竈の周圍に沈着して、所謂堤を造り、その病竈を追々に潰して了ふ、即ち病氣が堅まる。カルチウムはこのやうな效能のあるもの故、これ

と薏苡の有效分とより成るカルアグレス錠の有效なるは、寧ろ當然すぎるほど當然のこと、云はねばならぬ。近時カルチウムを御飯に入れることを奨勵して居る向きもあるが、元來御飯は御飯だけで食べるべきもので、決して外の物を混ぜるものではない。それに御飯に混ぜるカルチウムはクロールカルチウムで、長く用ひれば胃を害するものであるから、決してこれを用ひてはならぬ。それよりも前に擧げたカルチウムに富む食物をふだんに多く食べてゐた方はよい。この方は自然で然もよく吸収されるのである。一體薬は病氣のときにこそ用ふべきもので、ふだんには決して用ふべきものでないから、肋膜炎とか、百日咳とかの後で、肺結核豫防の必要があるとか、または肺病體質の人とかは、それはカルアグレス錠を服用した方がよろしいが、無病の人は食物からしてカルチウムを取るがよろしく、決して藥物のカルチウムを用ゐるの必要はないのであるから、この區別をよく忘れぬやうにしなければならぬ。（伊藤）

第四節 肺チストマ病

（原因）肺チストマ病は、肺臓二口蟲なる一種卵形を呈する小蟲が肺臓に寄生する爲めに起るものであつて、熊本、岡山、仙臺地方には、なか／＼多い病氣である。

(症候) 暗赤色の痰を咯くのは特徴であつて、時としては純粹の血液のみを咯くことがある。そしてこれは始終血を咯いて居ると云ふわけではなく、時々、少し睡いやうになつて、ほんやりする。それから血を咯く、これが數日或は數十日續いて、一時血が止まつて、また時が来ると咯くと云ふ風である。これは肺結核と違つて、身體の營養はそれほど犯されない。つまり身體はそれほど衰弱はしないが、咯血のあるときには顔色が蒼白くなり、多少呼吸困難を感じるものである。またその咯痰を顯微鏡で見ると、蟲卵を認むるものである。

(療法) 鹽酸エメチンの注射によつて治癒するものである。

第五節 肺壞疽

(原因) 腐敗微菌が肺の中に入つたために起る病氣であるが、糖尿病の人は、これに罹り易いものである。

(症候) 初めに惡寒がしてそして熱が出る。その熱はちつと續くこともあれば、また時々出ることもあり、また汗の出ることもあるが、病人は非常に早く衰へるものである。そして咳嗽が出て痰も出るが、その痰は甘いやうな腐敗臭氣を放つのが特徴であつて、患者の呼氣や痰は鼻を刺すやうに非常に臭い。痰は痰壺に入れてそつとして置けば、臭氣は無くなるが、それを振動するとまた臭氣を放つものである。出る痰の量は非常に多いもので、これを靜置すれば、最下層は膿沈澱物、中層は汚穢漿液層で、上層は粘液、膿、泡沫との混合層である。患者はまた時として咯血を來すことがあり、患者は咳嗽、咯痰を防ぐために患側を下にして寢て居るものである。

(療法) テルベンチン油に浸したるガーゼを病床の周圍にかけて、その蒸發氣を吸はしめ、またはテルベンチン油パイプを用ふ。根治療法としては、外科手術を受くるよがろしい、また漢藥の瓜萎仁と桔梗と各一匁を、水一合五勺入れ、一合に煎じつめて一日三回に服用するのが實用されて居る。それから食物にては、葱、蒜等が賞されて居るが、殊によいのは大蒜であつて、それを生で食べれば尙ほ結構であるが、煮て食べてもよろしい。

第六節 肺腫瘍

(種類) 肺に出来る腫瘍はいろいろあるが、その中重いのは癌腫、肉腫及びエヒノコックスである。

(症候) (一)肺臓癌腫 咯痰は頑固に血が混ざるもので、それが粘液と密接に混合して、丁

度覆盆子汁のやうになるのが特徴である。そして屢々痙攣様の刺戟咳嗽、呼吸障害、呼吸困難を來すものである。また多くは本症と同時に出血性肋膜炎或は心囊炎を合併するものである。

(二)肺臓肉腫 稍若年者に來り、主として左りの肺を犯すものであるが、その症候は肺臓癌腫のそれと大同小異である。

(三)エヒノコックス 多くは單室性であつて、その小なるものは化膿後石灰化するが、時としては大囊を形成することがある。若しこれが氣管支の中に破裂すれば、咯痰中に包蟲頭部、鈎及び囊包等を見るものである。者しまたその囊包が大きくなれば、心臓その他を壓迫するものである。

(療法) なるべく早く、外科手術によつてこれを除去するがよい。

第七節 肺臓微毒

(原因) 第三期微毒に來るものであつて、普通慢性間質性肺炎の型を以て、殊に肺の下葉並に中葉を犯すものである。

(症候) 咳嗽が出て、そして粘性膿性の痰を咯き、また屢々咯血を來し、或はまた呼吸困難

發熱等を來すものもある。

(療法) 全身驅微療法(微毒参照)に兼ねてヨードカリウムを永く服用せしむるのである。

第八節 肺臓水腫

(原因) 心臓左室の機能が減弱するか、または全く消失せるにも係らず、右室の機能が尙ほ佳良であつて、肺氣胞中に、鬱血或は血液性滲漏を來すによつて起ることが最も多いものである。

即ち心臓瓣膜病、慢性肺疾患或は腎臓炎によつて起るものである。

(症候) 咯痰は稀薄溶液性であつて、その量甚だ多く、且つ著しく泡沫を含み、粘液が乏しきものである。そしてその色はコロロブ性肺炎の咯痰のやうに梅汁様の紅色を呈するものである。その他呼吸困難、チアノーゼ等もよく見るところの徴候である。

(療法) 心臓興奮薬、強壯薬等と共に、また體幹部、四肢等に出来るだけ熱き濕布纏絡を施し血液を皮膚に誘導して以て、心臓の負擔を軽くする等のことを行ふが、何れにしても醫師の治療を要するものである。

第九章 嘔吐

第一節 嘔吐する病氣の見分け方

嘔吐は、直接に腦の嘔吐中樞を刺戟するか、また胃の粘膜を刺戟するか、或は反射的に咽頭を刺戟して起ることもあるからして、腦または腦膜に病氣があるとか、或はまた胃に病氣があつても起り、また咳嗽がはげしいとか、デフテリアなども起る。

それからまた婦人が妊娠すると、妊娠嘔吐と云ふて、二三月月目から嘔くこともあり、これが甚しくなれば悪疽、俗に云ふツハリであるから、これは誰にでも判る。また腦や腦膜に異常があつて嘔吐が起るときには、それよりも腦の症狀の方が主になつて、頭痛がしたり、譫語を云つたり、小さい小兒にあつてはヒキツケたりするものである。

胃から起る嘔吐では、第一に何か悪い物を食つたときに起る、急性胃カタルで、此時には腹が痛んでそして嘔く、少し経てば下痢もすると云ふので大抵自分で何か食べた爲めに嘔くと云ふことが判るものである。それから酒客によくある慢性胃カタルにあつては、毎朝早く、口を吐くと

きに、きまつて嘔く、粘液を吐くもので、これを酒客嘔吐と名づくるものである。それから胃痛も矢張り嘔くが、これは四十才以上の人に多いもので、長いこと胃が悪く、身體がだん／＼衰へて、そして珈琲滓のやうな薄黒いものを嘔くものである。それから食道癌でも嘔くが、これは同時に嚥下困難と云ふて、物が嚥み込めないものであり、食道憩室にあつては、臭氣ある不消化の食物を嘔くものである。また胃擴張にあつては、腹がガブ／＼して、常に腹が脹つて居る。それから別に胃の症狀が無くして嘔くものには神経性嘔吐があり、また食後間も無く、食物を口に戻してまた牛の如くに嘔んで居るのは反蕪症或は再噎症である。それから腸閉塞にあつては、便秘がして腹が脹り、遂には糞汁を嘔くに至るものである。この外熱のある病氣、または中毒等にも嘔吐が起るが、それは嘔吐よりも他に主要なる徴候がある。

小兒の胃は、大人と違つて、口まで眞直になつて居るから、少し乳汁を飲み過ぎても嘔くし、哺乳後直ぐに身體を動かしても嘔くが乳を嘔くと同時に、青便をするやうであつたならば、それは消化不良症と云ふて、頗る大事な病氣である。大人の消化不良症はそれほど恐ろしくはないが、哺乳兒の消化不良症は、生命に關する大病であるから注意せねばならぬ。

第二節 食道憩室

(三)

(原因) 本症は、食道の壁に於て、一部分が膨れるのであるが、誤つて嚥み下せる異物または頸部の外傷等が原因となるものである。

(症候) 初めには殆んど何等の症候を呈しないが、漸次嚥下困難を來し、飲食物の一部分は憩室に止まつて居つて、一定時を経てその食物が口中より吐逆するものであるが、その食物は腐敗し、甚しき悪臭を放つものである。また憩室の増大甚しき場合には、壓迫せられて、遂に食道狭窄の容態を呈するものである。

(療法) 百倍の硼酸水を以て洗滌するのであるが、根治には外科的手術によつて、その部分を切除せねばならぬ。

第三節 食道擴張

(原因) 先天性には、筋肉の發育不十分なるが爲めに起り、後天性には食道糜爛、潰瘍、狭窄等によつて起るものである。

(症候) 嚥下困難、食物の逆流等が主徴候である。本症の特に一局部に強く起れる場合は、即ち

食道憩室である。

(療法) 瘰癧によるものは、狭窄の如くデオヂナミン、フィプロリジン等を注射し、その他は對症的に行ふのである。

第四節 胃癌

(原因) 胃癌と云へば、素人でもその恐るべきものを知つて居るが、その眞の原因に至つては、他の癌腫同様不明である。併し統計によれば、四十才乃至七十才の、云はゞ老人に多い病氣である。そして一般に女よりも男子に多い。胃癌の原因に就てはいろいろの説があるが、器械的竝に化學的刺戟を受くることが頻繁であれば、發し易き傾きのあるのは事實であつて、居常濃き茶を好む人、刺戟性香料を多く取る人、強烈なる酒類を常用する人などにはどうしても起り易いやうである。尙ほまた經驗上、胃潰瘍の瘰癧よりして、本症に轉ずるは認められて居る。

(症候) 胃癌に罹つても、初めの間は、僅かに慢性胃カタルの症狀があるに過ぎない。即ち食欲は進まず、胃部は常に膨滿の感じがあつて、時々鈍痛がある。また嘔氣が出て、多くは便秘すると云ふ位のものであるが、追々全身無力の感、即ち何と無く力の脱けたやうな氣がして、症狀

の割合に早く身體が瘦せ衰へる、さうかうしてゐる間に嘔吐が始まるとか、又は腫物に觸れるやうになる。吐物は酸臭或は醜臭のあるもので、コーヒやうのものを吐き出すのが本症の特有のものである。本症は多くは無熱に経過するものであるが、時としてはまた熱の出ることもあり、どんなに養生しても、身體は日に増し衰へ、貧血して、醫學上で云ふところの癌腫性惡液質と云ふ状態に陥つて、遂に死に至るものである。

(療法) 本症の治療は、元より醫師に一任すべきものである。近來はラヂウムやレントゲン線療法も應用されて居るが、未だ確實とまでは行かぬやうであるから、一般人の心得として、年齢四十才以上にもなつて、慢性胃カタルの症状があるときには、速かに醫師の診療を受け、若し胃痛であつたならば、早く外科手術を受ければ、之を救ふことが出来るものである。

第五節 胃 擴張 症

(原因) 胃アトニー、慢性胃カタルその他によつて、胃筋の弛緩衰退を來す病氣によつて起るものと、また胃の幽門部の狭窄によつて起るものとある。

(症状) 俗に溜飲と稱するものは即ち本症である。症状は、その始めは多くは不定であるが普

通食欲がなくして、口が渴き、胃部に重苦しいやうな食物が停滞して居るやうな感じがするもので此等の症状は殊に午前よりも午後に増加するものである。その他惡臭ある嘔氣を發し、吞酸嗜雜が出、大便は多くは秘結し、追々容態が悪くなるに従つて嘔吐を發し、吐物の量頗る多きものである。そして吐物は酸性の反應を呈し、強き醜臭を放つ、常に陳久の食糜を混するものである。その他胃部が膨脹して、これに觸るれば、丁度空氣枕に觸れるやうな感じがあり、またガブ／＼と云ふ音、即ち振水音を感じるものである。

(療法) 嘔吐するものは、胃洗滌を行ふがよろしい、これは始めに醫者から習へば、あとは病人が自分で出来るから、毎朝胃を洗つて、胃を清淨にしてから朝御飯を食へるがよろしい。その他電氣療法、按摩法などもよろしい。薬は醫者から貰はねばならぬが、吉益牡蠣と云ふ薬をよく粉末にして、一日分一〇、〇を三度に分けて、毎食後に服用するのは、割合に效があるものである。

第六節 神經性嘔吐

(原因) 胃に器質的の疾病が無くして、特發に起るものであるが、その原因は腦病、脊髓病、

または腸寄生蟲、妊娠等によつて反射性に来るものもあり、また中毒によつて起るものもあるが神經質やヒステリーによつて來ることが多いものである。

(症候) ステルレル氏は、眞の神經性嘔吐の特徴として、嘔吐の容易なること、飲食物の性質並に分量に關せずして起ること、或は一定の食物に關しては決して嘔吐せざること、時間的關係なく、急速に發すること、悪心なきか、若しあるも極少なること、嘔吐によりて來る饑餓に堪へ得ること、嘔吐後直ちに心身の平和を得ること、一定の食品に對して發すること、頻々發するも全身状態は極めて僅少の障礙に止まること等の九ヶ條を擧げて居る。

(療法) その原因を治すことが第一の注意である。鎮嘔劑としてはいろ／＼あるが、割合に利かぬものである。併し漢藥の半夏一匙、茯苓一匙、生薑三片の三品に、水一合二勺入れて七勺に煎じつめて、冷めたくして度々用ゐるのは、大に效のあるものである。

第七節 反 芻 症

(原因及症候) 一度嚥下したる食物を再び口中に戻して、牛の如く再嚼するのは、よく見るところであるが、これは病氣と云ふよりは、寧ろ習慣であつて、その多くは人のするところを模倣

するより來るものである。

(療法) 患者自身が、力めてこの惡習をく正するやうに心がくるがよろしい、また食後直ちに氷片を與へて奇效を奏したと云ふ報告もあるから、これを試むるがよろしく、頑固のものは、催眠暗示療法を行ふがよい。

第八節 小兒消化不良症

(原因) 哺乳兒の消化器の構造は未だ完全に發達してゐない。又體質が纖弱のために傳染または中毒に對する抵抗力が至つて弱いから、消化器の病に罹り易い素因を具へて居るのである。即ち口腔には齒も生えてゐず、唾液の分泌及びその性質も大人に違ひ、胃は殆んど鉛直になつて居りその筋肉も發育が十分でない。腸もまたその通りである。要するに解剖的並に生理的に、既に病氣に罹り易くなつて居るのである。

本症の直接の原因は乳汁である、これを便宜上天然營養法即ち人乳によつて養育せらるるものと、人工營養法即ち牛乳、山羊乳等によつて養育せらるるものとある。

天然營養法によるもので、授乳婦の精神感動、月經、食物、藥劑、年齢、疾病、腐敗、授乳の

不規則なること、不適當なる病乳等はその主なる原因となる。

人工營養法に由るものでは牛畜の飼餌、疾病、腐敗牛乳、過飲、不正の授乳、稀釋法の過失、哺乳器の不潔、温度の不適當等は主なる原因となる。

それから不適當なる藥劑を飲ませるために、消化不良症を起すことがある。例へばマクリ、胎毒下し、救命丸等現今盛んに行はる、賣藥を用ゐること、その他によつて本症を起すことが少なくない、此等賣藥の爲めに重症なる消化不良症を起して斃れるのを屢々實見して居る。

其他誘因となるべきこともある、即ち季節の關係(夏季最も多い)生齒の時期(生後七―十ヶ月)等であつて、この頃になると、凡ての器官もだん／＼揃ふて發育するのであるから、多少抵抗力も弱くなつて居ると思ふ。その外口腔疾患も誘因をなすものであるから、哺乳後には時々湯水または硼酸水等で口腔を拭ふことが必要である。口瘡、口内炎、アフタ、早産、結核性遺傳等も、補助原因となるものである。

(症候) 初めその兒は不安となり、平常のやうに安眠せず、哺乳量も減じて元氣が無くなり、よく泣く。大便は初め軟便で粘液、顆粒を混じ、色は綠色で臭氣も平常より強く、水分も多くなり、一日二三回位のものが、だん／＼と回数が増して來て十回以上になる。吐乳もその間に始まつて、哺乳後十五分乃至三十分も経つと吐くが、乳は少しも變化せぬこともあるし、或は多少粗大に凝固して居つて、酸臭或は腐敗臭を帯びるが、此の症狀の惡化に連れて回数も多くなり、嘔めば直ぐ吐くやうになり、遂には黄色を帯びた胆汁の混つて來るやうになる。また熱も出て、高きときは四十度近くになることもあるが、これは一定せぬ。口腔は渴いて、舌は白くなり、乳を嘔む氣が無くなる。腹部は膨れて、腸の蠕動も亢進し、疝痛もあるやうになるが、この時はまた輕症消化不良のときであるが、素人は時候に中つたのだと云つて、醫治を受けず油斷をする方が澤山あるし、醫者でも經驗のなき人は簡單に考へる場合もあるが、此等の症狀が四五日も續くと患兒は羸瘦と疲勞とを増し、吐乳下痢も多くなり、高熱を發し、痙攣などを起すやうな重症消化不良症に陥るのであるから、油斷をしてはならぬ。

重症の場合になると、下痢は一層強くなつて、水のやうな便が下り、口渴甚しくなり、吐乳も一層烈しくなり、患兒は絶えず頭を左右に廻轉し、嘆息するやうな深い呼吸をするやうになり、眼は陥没して半開し、眼球を屢々上の方に向け、角膜は光澤を失ひ、粘液で被はる、やうになり

口は尖りて見え、口唇の周囲は暗紫色を呈することがある。四肢は冷くなり倦怠を覚え、太腿の内側などの皮膚は著しく皺裂を増し、羸瘦と疲労とは著しく増して来て、熱も高くなり、利尿の数は減じ、精神は無慾または嗜眠状になり、慈愛深き両親の顔を見るも一向に平氣になり、大顎門も陥没しに、時としては脳膜炎のやうにヒキツケることもある。腹部なども初めは膨滿するが次第に綿のやうに軟かになり、腸の蠕動も明らかに見えるやうになる。このやうな症状を呈してからは、如何に騒いでも心配しても、大抵は治癒の見込が無いから、小兒の吐乳、下痢は決して油断してはならぬ。

(療法) 本症は最も大切の病氣であつて、とても素人療治は出来ぬ。必ず熟練なる小兒科醫の治療を要するものである。また家庭の注意としては、小兒に與へる乳汁は、平常から注意して、授乳の度數、稀釋度、消毒に氣を付けなければならぬ。若しまた既に下痢または吐乳をしたならば、直ちに専門の醫師に診療を受けるやうにするがよい。

さうして醫師の来るまでに、是非灌腸をして腸の中にある悪いものを早く出して置かねばならぬ。乳は非常に薄くするか、または全く乳を廢して燕麥汁、卵白水或はソキスレッドの滋養糖等

を飲ませて、胃の負擔を軽くするやうにした方がよろしい。卵白水は、エプスタイン氏の試験によると、細菌の發育を防ぐことが出来ることである。その作り方は鶏卵一個の白味を一旦煮沸して、水二合五勺ばかりに混和して、それをガーゼで濾して、それに少量の白糖を加へて、少量づつ、三乃至四時間目位に飲ませるのである。

第九節 妊娠嘔吐(つはり)

(原因) 妊娠中に嘔吐を來し、所謂ツハリなるもの、原因に就ては、種々の説があるが、要するに、妊娠そのものが、大なる意義を有するものである。

(症候) ツハりは、妊娠の初期には誰でも多少はあるから、世人はそれを輕視して、少し位重くとも、ナアに今に癒るだらう位で打捨て、置くから、飛んでも無いことになる。輕症即ち毎朝空腹時に少し水を嘔く位のなら、打捨て、置いても、妊娠三ヶ月位になれば自然に癒るが、若しそれで一度でも食物を嘔くやうなことがあつたなら、直ちに醫者の療治を受けなければならぬ。水を嘔くのと、食物を嘔くのととは、第一妊婦の身體の工合が違ふ、それを打捨て、置くと、身體は益々衰弱して、精神も沈鬱し、瘦削骨立して、終には嘔吐の間歇時が短縮して、絶え間無く發

し、夜間も休むことは無い、爲に胃部に疼痛を發し、食物を甚しく嫌惡し、非常なる渴を覺え舌は乾燥して鮮紅色を呈し、齒齦に汚穢なるものを附着し、口中は惡臭を發し、脈の數は多くして弱くなり、人事不省となつて遂に死に至るもので、之は所謂妊婦の不停性嘔吐又は惡性嘔吐と稱する頗る恐ろしいものであるから、若し食物を吐いたならば、手後れにならぬ中、片時も早く醫ぬを受くるは何よりの注意である。手後れになつてはいかなる名醫でも手の盡しやうはない。中には人工早産法を以て胎兒を下して母を助くる場合もあるが、何れにしても子か親か、甚しきは母子兩方を失ふことになるから、誰でもあることだなど、云つて輕視せぬやうにしてくれども注意を忘つてはならぬ。

(養生法) 妊娠嘔吐の養生中最も大切なのは精神の安靜であるから、心配事で心をいためることや、怒り怨むことなどは無論悪いが、また餘り悦び過ぎるのもよろしくない、何でも精神を激動させるのが一番の禁物である。さうして若し出來得るならば何より先に轉地(入院)させるとよい。轉地すれば氣が樂になる、自分の家に居ると、家事やその他の雜用の爲めに氣を揉むことがあつたが、轉地とか入院とかすれば、精神に刺戟が少いから一番樂になる。誰でも妊娠すると

神經が過敏になつて、少しのことでも苦勞の種となる。その苦勞はツハリを重くする原因であるから成るだけ苦勞をさせぬやう。財政の許す家であつたなら、假令ツハリが無くとも、妊婦は轉地させた方がよろしい。さうして若し吐くやうなことがあつたら、早速醫療を加ふべきは申すまでも無いことである。

(療法) 妊娠嘔吐に用ひる藥は澤山ある。漢家で用ゐる小半夏加茯苓湯は非常によく利くものである。この處方は神經性嘔吐のところに書いてある。又新藥にてはユゴールがよろしい。これは注射の方は早い、内服にはカプセルに入れ、一日三回二個乃至四個づつ、服用するのである。

嘔吐劇しきときには、室を暖くして置き、少量の冷たき食物と冷飲、氷片等を早朝尙ほ床中にあるときに與へて、それから一時間ばかり後に起すとよい。それでも尙ほ嘔くときには十二時乃至二十四時間斷食をなし、または灌腸をなして、腸内を清掃するがよい。

第十章 排便の異常

第一節 排便異常(下痢、血便、便秘等)の見分け方

我々は一日に一回若しくは二回の排便があれば健康であるが、これが二回以上で然も便が軟かい、甚しきは水のやうである、或は粘液を混ざると云ふやうな時には、それは下痢と云ふて一種の病氣殊に腸の病氣である。そしてそれが腹が痛んで度々下るのは急性の腸カタルで、下痢するともあれば、また便秘することもあつて、便の性質は不定であると云ふのは、慢性腸カタルである。またそれが決つて毎朝早く腹が痛んで、そして不消化性の下痢があると云ふのは、大抵は腸結核である。また腹が痛んで吐くこともするし、下るもすると云ふのは急性胃腸カタルであるがそれは何か悪い物を食つた、即ち俗に云ふ食傷であるから、自分でも判る。またコレラにあつては、嘔吐、下痢頻々として、遂は米泔汁（ちみじ）のやうなものを下すに至り、多くは死に至る甚だ恐るべきものであるが、これにはアジアコレラと、エウロッパコレラとあるが、その鑑別は顯微鏡で細菌検査をして見なければ判らぬ。

それから下痢と同時に血の混るのはいろいろあるが最も多いのは赤痢であつて、これは熱もあれば、裏急後重（うらきごもも）がある。それから直腸炎にあつては、下腹部（したはら）に痛みがあつて、血液或は粘液便を下すものであり、直腸微毒にあつては血便と共に腸狭窄の症状がある。直腸癌もまた腸狭窄の症状があつて、糞便の通過が困難であり、また裏急後重もあつて、殆んど直腸微毒と同じやうな症状を呈するものであるが、直腸微毒にあつては、比較的年の若きものに來り、殊に微毒の既住症または微毒患者に鶏姦（けいけん）されたと云ふやうな原因があり、直腸癌の方は比較的老人に來るものであるからして、少しく注意すれば判るものである。しかし此等の病氣はさう澤山あるものではない。

時々血が下る、然も身體に別に異常が無い。さうして肛門の内若しく外部に疣（いぼ）のやうなものがあるときには、痔疾と思ふがよい。また痔瘻にあつては肛門の外或は内部に孔があいて、其處から膿やら血やら始終出て居るものである。

それからウヰルヒヨ氏の紫斑病と云ふて、血を下す病氣があるが、これは澤山はない（後に詳述す）また皮膚に出血斑が出来るから判る。尙ほ此の外に血の下る病氣はあるが、普通あるものは上記の數病である。

それから下痢と反對に便通がない。三日も四日も無い、甚しきは一週間以上もない。と云ふことが普通であるならば、それは常習便秘と云ふ一種の病氣で、殊に婦人に多いものである。

第二節 アジアコレラ

(原因) 通常コレラと稱するのは、このアジアコレラのこと、コッホ氏の發見せるコンマ菌によつて發生する病氣である。

コレラ菌は、熱に對しては極めて弱く、従つて晴天で日光に逢へば、僅かに二三十分間で悉く死んで了ふし、曇天の日であつて、ジメ／＼してゐない限り、一日若しくは三日間で死ぬものである。また淡水にも海水にも繁殖するが、淡水は海水にくらべて繁殖の度は低い。そして淡水では一週間若しくは三週間生存し、海水にあつては、約三週間の壽命を保ち得るものである。

(症候) コレラに罹ると、どうなるかと云ふに、何人も知つて居る如く、吐瀉が第一の症候である、時としては吐瀉が無くして死ぬこともある。度々吐瀉して來ると、皮膚の色は蒼白となり、弛緩して來る、そして益々吐瀉が頻繁になると、糞便は全く普通の糞臭を失ひ、水のやうになつて、丁度米の磨き汁のやうになる、即ちコレラに特有なる米泔汁様となるが、かうなると最早末期にて、吐瀉の數は一層甚しく、二十回乃至三十回位に達し、眼は陥没し、食慾は全くなくなり、それに鼻尖は尖り、音聲は嘶嘎れて來る。かうなると、患者は非常に若しみ、呼吸も非常

に困難になつて來る。腓腸筋や指には極めて強劇なるところの痙攣を起し、甚しきに至つては、全身に畜癆を起すことがある。そして脈搏は糸のやうに細くなる。顔色は憔悴し、形容は枯稿し、口唇は暗紫色に變じ、所謂俗に云ふ佛顔になる。

この恐るべきコレラに對しては、藥劑は殆んど效が無い。否藥劑は腹に收まらない、併し小便の出るものは、往々癒る見込がある。コレラ患者に小便の無くなるのは、吐瀉によつて、身體の水分が無くなるからであつて、これを無尿症と名づけ、此を補ふが爲めに食鹽水の大量を數回に注射するものである。

(豫防法) コレラと聞けば、多くの人は慄然として恐れるが、これは死亡率の多いのと、即ちその約六割は死ぬこと、他のチフスや赤痢のやうに、二三週間乃至一ヶ月と云ふ緩慢の經過を取らずに、僅か二三日で急に斃れるからである。併し豫防の方から云へば、此等の病氣は何れも同じで、唯或る事に注意すれば、よく此等の傳染病を併せて豫防することが出来る。唯コレラの流行する季節は、多くは夏季であるから、氷や果物その他の生物を食ひすぎたり、或は寢冷へをしたりして、腸胃を害し易いときであるから、それが誘因となつて發病するものである。故にこ

の誘因に注意すれば、殆んど心配するの必要はない。

すべて腸に來る傳染病は、原因と誘因とが必ず相伴ふもので、例へば新聞などによくある、朝に天ブラを食つて出て、其日に停車場で吐瀉したとか、或は馬肉を食つてコレラになつたとか云ふのは、決してその天ブラや馬肉が發病の原因ではなく、夫等を食つて胃腸を悪くした爲に起つたので、つまり誘因に外ならぬ。そして原因は、既に前にコレラ菌に感染して居たと云ふ其處にある。だから右の例を見て、天ブラや馬肉は悪い、魚肉の方が寧ろ危険でないなど云ふのは皮想である。要するに腸の傳染病は誘因となるべきことを避ければ怖るゝに足らぬものである。

健康者なれば、假令コレラ菌が口から入つても、胃に於て胃液の爲めに殺される、唯暴飲暴食や寝冷えなどをして、下痢でも催すと、この隙に乗じて微菌が働いて病氣となるのである。だから最初の然も最善の豫防法は、腸胃を健全に保つにある。萬一不幸にして自己の家族若しくは勤め先きなどに、コレラが發生したならば、豫防注射を行へば、大抵は感染せずすむ、勿論例外はある。併し豫防注射を行ふても、誘因があれば矢張發病するから、誘因を避けることは最も良き豫防法である。尙ほその他の豫防法に就ては、チフスのそれに準ずるがよい。

第三節 歐羅巴コレラ

(原因) 病原不明、多くは夏期に於て流行性に來り、大人より小兒に多いものである。

(症候) アジアコレラと同じであるが、唯その容態が軽いのみである。そして本症にはコツネ氏のコンマ菌を認むることが出來ぬ。

(療法) 初めに下劑を與へて腸を掃除し、後には收斂劑を與へるのであるが、元より素人療治の出來るものではない。

第四節 小兒コレラ

(原因) 本症は小兒吐瀉症と云ひ、アメリカでは夏季下痢と云ふて居る、今まで健康であつたものが、突然犯さるゝこともあり、また小兒消化不良症から轉症することもあるが、急劇に經過して、直ちに虚脱の症候を發する恐るべき病氣である。

本症の原因は、まだ判明せぬが傳染病たることは疑ひが無い、夏季に多く、秋冷になるに従ひ自然に減じ、冬季に至れば消滅するのが通例である。屢々流行性となつて、人家稠密な非衛生的生活を營むものにあることがある。殊に生後一年若しくは二年位の小兒にして、人工營養法に由

るもの、及び離乳期に當れる者に、最も多く本症を發するものである。母乳で育つて居る子供は、本症に罹らないと云ふ學者もあるが、時としては母乳養育の健康兒にも本症を發することがあるが、此等は他の食物殊に菓子類、果實類、或は水、不潔なる玩具などから傳染したものである。

(症候) 本症の多くは、初め突然の下痢を以て起り、嘔めば直ぐに下痢すると云ふ有様で、その便は水瀉便で褐黄色或は黄色の水分が澤山にあつて、その中に青色または黄色或は無色の粘液(シムヘ)が交つて居る。また時としては血液の色を呈して、一種固有の臭氣を放つ、二十四時間中に十回乃至四十回、或はそれ以上になることがある。同時に體温も昇つて三十九度から四十度位になるのが普通である。然しチフスなどのやうに定つた熱型はなく、時としては平温よりも下ることがある。このやうにはけしい下痢と、熱のと爲めに著しく渴いて、何でも手に當るもの、例へば頭部を冷す氷嚢などをつまみ、口に入れやうとするほどで、牛乳壘とか匙などを見ては、殆んど堪へ切れない様子である。しかしこれは口渴の爲めで、食慾の爲めではないから、誤解して食物を與へてはいかぬ。口腔粘膜は乾き、舌は白苔を帯ぶるやうになる。嘔吐も次いで起り、飲

だ物は勿論、粘性液体または茶褐色或はコーヒ滓様の色を呈する物を吐いて、はけしいときには、飲めば少しでも直ぐに吐くやうになる。

心臓の力も弱り、脈搏は頻數にして細小となり、血液内及び諸臓器の水分が減する爲めに、紅顔肥滿したる小兒は急に瘦せ、その他すべて重症の消化不良症に見るやうな状態になつて、重いのは二十四時間以内に死することもあるが、通常は五日乃至九日位で死亡するものである。併し早く手當を施せば、多くは癒るものである。

(豫防法) 夏季にあつては、特に牛乳は十分に消毒し、哺乳器を清潔になし、授乳時間及び哺乳量に注意し、善良なる空氣、純良なる飲料水、室内の清潔に注意して、少しでも小兒に異常があつたならば、速に醫療を受くるがよろしい。殊に方々に小兒の下痢病があると云ふやうな年にあつては、一層注意せねばならぬ。

(療法) 消化不良症のやうに處置するのであるが、何れにしても素人療治の出來ぬものである。

(原因) 赤痢の原因に就ては、種々の説がある。第一は微菌説、第二はアメーバ説、第三は器械的説である。第一の微菌説は、志賀氏の發見せる赤痢が最も賛成者が多い。第二のアメーバ説は、我國に於ては臺灣が多く、すべて熱帶國の赤痢は大抵アメーバが原因となつて居る。第三の器械的説は、器械的の刺戟により、腸粘膜を潰瘍狀に損傷するによつて起るものである。要するに赤痢の原因は一つでなく、此等の何れか一つあれば赤痢となり得るものである。

赤痢の誘因となるものは、第一に感冒と食物の不攝生より起る腸カタルである。感冒に罹れば、身體の抵抗力を弱めて本症に罹り易くなる。また腸カタルの爲めに下痢を起せば、従つて本症に侵害され易き誘因となるのであるから、本症の流行時には大に注意して、身體を壯健にして腸胃を強壯にせしめてその侵害を受けぬやうにするがよい。

(症候) 本症は夏から秋への移り際が一番多い。そしてそのはじめには惡寒を感じ、次で下痢を催すが、その状態は頗る特異である。普通腸カタルの爲めに起る下痢は、一時に大量の水瀉狀排便をなし、排便後は腹部に何となく爽快を感じるものであるが、本病のはそれと違ひ、先づ下腹部に痛みがあつて、次で便意を催すが、便所に行つて見るに、糞便の量は極く少く、多量の粘

液を混じ、さうして排便後もまだ何か残つて居るやうでサツパリしない。醫者の方ではこれを裏急後重と唱へて、本症の重要な症候である。それが再び上痢して見るに、矢張便量は少く、多量の粘液を混じて居る、それがだん／＼重くなると、今度は血液を混するやうになるが、その血液は單純のものでなく、丁度肉を挫いたやうな、組織を掻き裂いたやうになつて出るので、一種厭ふべき臭氣を帯びて来る、そして便前には必ず下腹部に痛みを覚え、その度数は一時間に一回位であるが、漸次その數が多くなつて、一時間に二回乃至三回となり、多きは一晝夜百回、少くも十回乃至二十回に及ぶものである。同時に體温昇騰して三十八度乃至三十九度に達するが、その熱型は全く不定型である。吐き氣は減多にないが、熱の爲めに舌が乾き、舌苔を生じ、口渴を覚え、飲料を多く欲するやうになる。また脈の數が多くなり、身體が倦怠く、頭重、頭痛等の症狀を發し、小兒は疫痢のやうの症狀を呈するものもある。此等の症狀が適當の治療を加ふれば、熱も下り、下痢の度数が少くなり、一週乃至二週の後には輕快に至るが、重症のものにあつては、死ぬものもある。

(豫防法) 豫防法はチフス、コレラと同じことである。また東京などでは餘り無いことだが、

地方人などにはかゝる病氣に罹つたことを恥辱のやうに心得、隠蔽して賣藥または手療治をやる人もあるやうだが、これは甚だ危険である。初期に適當の治療さへすれば大抵は癒るが、若し治療の爲めに治療の機を失するやうなことがある。可惜貴重生命を失ふに至ることが間々あるから、大に注意せねばならぬ。また醫師にかゝつて赤痢と判つても、それを發表するを忌み、醫師に隠蔽を依頼する人もあるが、醫師は元より法の命ずるところによつて、斷々乎として之を謝絶し、相當の手續をなすべきは勿論であるが、地方にあつては種々情實の纏綿の爲め、これを謝絶し得ざるものあるやに聞くが、これはそも／＼大なる心得違ひであつて、斯様のことからして、大流行を來すの基となるものであるから、若し赤痢、單に赤痢に限らず傳染病に罹つたならば、速に届け出で、規定の消毒をすれば、家族及び他に蔓延するを防ぎ得て、自他共に安全であるから、これらは文明國民たる我々がお互に大に注意すべきことである。

(療法) 赤痢は、元より法定傳染病の一種であつて、自己療養を許さず、また自己療養の出來得るべき性質のものでないが、一體この病氣は、當初に於て腸内を掃除すると、病勢が頓挫するばかりでなく、時にはそれで癒ることもあるから、腹が痛んで然も裏急後重があると云ふときには、早く醫療を受くべきは勿論であるが、若し醫者に遠いとか、または醫者に直ぐ來て貰へぬと云ふやうな場合には、ヒマシ油を飲んで下すとよい。これは油薬で少し飲み悪いが、水または薄荷水を湯呑に入れ、それにヒマシ油三〇、〇を浮べて、グツと一口に服み下すとよい。さすればこれで腸の掃除が出来るから、醫者に診て貰ふときには大變に役に立つものである。若しまた赤痢でなくとも、すべて下痢には初めに下劑をかけるのが法則となつて居るから、少しも差支無いのみか、反つて良いことであるから、これだけの自分手當はやつてもよろしい。近時赤痢に對する治療法は非常に進んで來て、早期に治療を受ければ、殆んど百人が百人まで助かるやうになつたのである。

第六節 疫 痢

(原因) 疫痢は或る微菌によつて起るところの一種の傳染病であつて、赤痢の流行する時分に本症を見ることが間々ある。それで或る人は疫痢も赤痢も同様のものであると云ふて居るが、また赤痢とは全然別のものであると云ふ學者もある。かくの如く二説あるがどうも疫痢と赤痢とは別のものゝやうに思はれる。本症は哺乳兒には殆んど無く、雜食する小兒に多い、年齢で云ふ

と、三才から六才の間に多いものである。

(症候) この病に罹れば、どんな風になるかと云ふに、軽いのもあれば重いのもあるが、重いになると急にヒキツケル、丁度腦膜炎のやうな容態を呈して來る、嘔吐はあることもあれば、無いこともあり、熱は四十度或はその以上に昇ることもある。糞便は粘液便の一種、妙な便である、甚しきは診断のつかぬ間に死んで了ふやうな急性のものもあつて、小兒に取つては誠に恐ろしき病氣である。

(豫防法) 本病の流行時には、すべて下痢のある小兒へ近づけてはならぬ。それから食物はすべて煮たものを食べて、生のものは食べさせぬやうにする等、赤痢やチフス、コレラ等の豫防法に準ずるのである。

(療法) 療治は勿論醫者でなければ出来ぬが一體本症の病毒は腸内にあるから、盛んに腸を洗つて毒物を外に洗ひ出して了ふ、丁度汚溝が固へたときに汚溝掃除をするやうな意味を以て腸を洗ふのである。洗ふには硼酸水或は食鹽水を以て、灌注器にカテーテルを着けて腸内深く挿入して洗ふ、一リール或は二リールも此等のもので洗つて、粘液の無くなるまで洗ふのである。

幸ひにして粘液がすっかり洗ひ出されて了ふと、助かることになる。何分経過の早いものであるから、薬を服ましてその薬の利いて來るところなどを待つては居られない、毒が腸の中にあるのだからして、器械的にその毒物を外に、なるべく早く洗ひ出して了ふと云ふのが療法の主眼である。それから下劑としてヒマシ油を與へるのである。

第七節 腸結核

(原因) 腸結核は、結核てによつて起るものであるが、原發性のもは少く、多くは肺結核患者が、結核菌を含む喀痰を嚥下すが爲めに起るものである。

(症候) 本症の特徴は、鶏鳴下痢と云ふて、夜明け近く腹痛があつて下痢をするのである。またその糞便は消化せざる食物を多く含んで居るので、これを完穀下痢と稱するものである。それから夕方になると少し熱が出る、即ち日晡潮熱があり、腹が張つて、これに觸るればゴロゴロ鳴るものである。追々に身體が瘦せて、多くは遂に死に至るものである。

(療法) 本症は元より醫師の治療を要するものであるが、止瀉劑は多くは效無きものである、その他すべて肺結核と同様の處置をなすがよろしく、カルアグレス錠を持藥として一日三回毎食

後に三粒づゝ服用するがよろしい。

第八節 慢性下痢

(症候) 下痢の原因はいろいろあるが、それは略する。下痢の初めには痛みがあるが、慢性になると、それがあまり感じなくなる、營養も比較的犯されずに繼續することがあるが、患者に向つては不愉快なことであるが、生命の危険を伴ふことはない。また慢性下痢の経過中に體重が減る、衰弱の度を増す、貧血を來すこともあるが、此等は必ず起ると云ふわけでも無い、と云ふのは靜穩のときには、此等を恢復するからして、割合に侵されぬものである。

慢性下痢のある人にして、注意深い人であつては、下痢の起るのはいふ原因かを考へて、腸胃を害する原因あるを覺えるものである。食餌中でも鶏卵を食へたとか、肉を食したとか、或は冷めたい飲み物、ビール、餡氣の菓子類、醱酵に傾き易きものを食へたとか、身體殊に下腹部を冷やしたときとか、食物の咀嚼が不十分であるとき等の後には、下痢が起ると云ふことを、少し分つて居る人は注意して居るのである。

便通は何時も同じではなく、種々に變るもので、例へば何時も水様ではなく、一日たびゝ水

様便の出ることもあり、また早朝に軟便が一度出て、日中に稍々固まつた有形の便が出て、その後粥のやうな軟便を排泄することもあつて、排便の状態、程度、種類も變ると云ふことに誰でも注意する。慢性になると、比較的便秘の後に下痢が起り、下痢の後にはまた便秘がつくと云ふ風に、長い間に便秘と下痢とが代るゝに來ることがある。また胃の故障から來る下痢にあつては、便量が増山にある。また一種の臭氣がある。腹が鳴つて、腹の深部に痛みを感じ、下腹部が脹る、食慾は割合に犯されずに、中には反つて亢進を訴へるものもある。しかし食慾は減らぬも、下痢の初發には胃の膨滿壓重を訴へるものである。

下痢はその原因によつて、便の性質が異なるものであるから、その便を検査して見て、蛋白質が消化されぬか、澱粉が消化されぬか、または脂肪が消化されぬかを検査して、それによつて大體治療の方針を立てるのである。

(療法) 一體下痢は、その何れの種類のものかを問はずに、初めは腸に何か悪い物、早く云ふと毒になるものが入るか、溜るかする爲めに起るものであるから、第一に下痢を以て之を掃除して了ふと、それだけでも癒ることがある。下痢の中で一番簡單なのはラキサツール錠であるから、

これを三個ほど服用するのである。そして腸の中にあるものがしつかり出て了つたならば、今度
は止瀉劑を用ゐる。これにもいろいろあるが、素人が用ひるに都合のよいのはデルマトール又は
タンナルビンである。これを何れも三、〇を三包に分けて、一日三回に服用すると、軽いものな
らばそれで癒る。

下痢があると口が渴くものであるからして、この場合にはタンニンを含むものがよい。即ち
茶、コーヒ、赤葡萄酒、コマア等を飲むがよい。牛乳はいけない、殊に我々日本人の下痢には、
牛乳はよろしくない。

下痢が慢性となつて、容易に癒らぬときは、その食養は大に注意しなければならぬ。即ち腸を
器械的、温熱的、化學的に刺戟する飲食物は有害である。即ち多量の木纖維を有する食物、例へ
が野菜類、甘藷、澤庵、麥飯、蕎麥等の如きは、器械的に腸粘膜を刺戟するからよろしくない、
温熱的の關係に就ては相當の温を有するもの、即ち人體温ぐらゐるのは最も適當であるが、こ
れに反して冷めたきものは、腸の蠕動作用を亢進せしめて、腹痛及び下痢を來すから、その品質
の何たるを問はず、すべて冷きものは害がある。また香料、酢、酒類、食鹽等の多量は、化學的

に腸粘膜を刺戟するものであつて、その刺戟の強きは、胃粘膜を刺戟するときよりも、遙に強き
ものであるから、此等のものもまた避けなければならぬ。

それから腸粘膜の分泌を亢進するもの、炭酸ガスを發生するものは矢張避けなければならぬ、
假へば植物酸や糖分の多量を攝取するときは、一方に於ては分泌を盛んにして下痢を醸し、他の
一方に於てはまた炭酸ガスを發生して、腸の蠕動運動を亢進すると同時に、また腸管を擴張し
て、所謂鼓腸を呈せしむるに至るものであるから、此等のものや炭酸含有の飲料即ちビール、サ
イダ、シトロン、ラムネ等は禁物である。また糖分の代りにサツカリンを用ふるときは、此等の害
を除き併せて腸管を消毒するの效があるが、長く用ゐるときは、胃の障害を起すの弊があるから
注意せねばならぬ。

下痢症の食餌は、すべて温かくして無刺戟のものがよろしく、消化容易にして残渣の少きもの
がよいのであるから、下痢の劇しき場合には米湯、葛湯等の粘滑性のものがよく、ソツプは初め
は禁物であるが、少し快くなつたならば、ソツプに鶏卵またはサナトーゲン等を混じたるものを
與へる。片栗湯は殊によろしく、その他コンスターチ、レグミノーズ等より製せる流動食もよろ

しく、少し後には米粥、馬鈴薯粥、ソツプを以て調理せる粥、または牛乳(粥馬鈴薯牛乳粥、米牛乳粥、西穀米牛乳粥、タビオカ牛乳粥、オートミール牛乳粥)等と與ふるもよろしい。また贛胸腺、魚の白子、挽き肉等もよろしく、脂肪は成るべく避けた方がよいが、純良なるバターは適當に與へても差支がない。

第九節 直腸炎

(原因) 下劑の濫用、灌腸液の不適、異物例へば果核の刺戟、蟯蟲の寄生によつて起り、その他淋毒の蔓延、内痔核、痔瘻等からして起ることもある。

(症候) 急性症と慢性症とある。急性症は直腸の痒みまたは灼熱或は壓重の感があり、また疼痛があつて、裏急後重があり、此等の症状は起れば重くなるのが常である。また痛みの爲めに、小便が近くなつて、出るときに痛む。また陰莖が勃起する等のあることがある。

慢性症は、急性症よりは、症状が一般に緩和であつて、直腸の壓迫または壓重の感、排便に際して裏急後重を訴ふるのである。便は急性慢性共に、粘液性、血液性、膿性の分泌物を混するものであり、また往々脱肛を伴ふものである。

(療法) 原因を除くことが第一の必要である。そして急性症にあつては、患者を側臥位に安臥せしめ、肛門周圍に水蛭を貼け、または腰湯をさせる。食べ物、米湯、葛湯、牛乳、粥等の流動食がよい。慢性症には收斂藥を以て直腸を洗ふのであるが、これは醫師に處方して貰はねばならぬ。

第十節 直腸癌

(原因) 眞の原因は不明であるが、主として特發するものである。

(症候) 便秘に障礙あるのが主徴候である。尤も初めには何等の障りも無いが、追々病氣が進むに従つて、排便に障礙が起つて、帯のやうな或は小指のやうな恰好をした便が出る。そして一回に出る量は極めて少い。肛門の上部には絶えず壓重の感じがあつて、度々便意を催すものである。病勢がたんと進めば、今度は便に血液を混じ、粘液または膿を交へ、裏急後重があつて、追々に衰弱するものである。

(豫後) 長きも四五十年の壽命である。そして若し外科手術を施さなければ、一二年にして死ぬものである。

(療法) 早く外科手術によつて痛を取つて了らば助かることもある。またラヂウム療法も行はれて居る。内科的には對症療法として、唯苦痛を軽くする位のものである。

第十一節 直腸 微毒

(原因) 先天性または後天性に來り、或は原發性に來ることもあれば、また續發性に來ることもある。即ち婦人なれば外陰部の下疳潰瘍の分泌物から傳染し、男子なれば鶏姦によつて傳染するが、一般に男子よりも婦人に多い。

(症候) 糞便は、粘液、血液、膽汁等を混じ、裏急後重があつて、便秘と下痢と交代して來り、甚しきは排便障害を來すものであるが、疼痛は左程でなく、また身體は痲痺ほど衰弱せざるものである。

(療法) 全身療法として嚴重なる驅微法を行ふ、その他局部の療法は何れも専門家の施治を要するものである。

第十二節 痔 疾

(原因) すべて直腸下部に鬱血を來すものが原因となるもので、坐業者には多い病氣である。

(症候) 痔と云ふ言葉は、何人も知らぬものは無いが、普通人の云ふ痔疾の中には、單に痔ばかりでなく、肛門やその周圍に來るいろいろの病氣をも含んで居る。併し痔疾の中で一番多いのはイボ痔、醫者の云ふ痔核である。痔核云ふのは、肛門並に直腸下部の靜脈血が、體内の深部にある門脈系と云ふ大靜脈に還流するのを妨げられ、此處に鬱血を起し、それが丁度袋の中に血液を盛つたやうの風になつて、肛門の内壁に大小種々の結節が出来る。この結節が即ち疣痔である。然るに此處は歩行や便通その他に際して擦れ易い場所なので、どうかすると上皮の袋が破れて鮮血淋漓と迸り出ることがある。これ俗に云ふ「ハシリヂ」で、素人の云ふ痔は、この結節と、この出血とを云ふので、血が出ると毒血が出たとか、惡血がとれたと云つて喜んで居るが、それは以ての外のこと、打捨て置くと全身貧血を呈するものである。

痔疾が益々ひどくなれば、肛門の内外には宛然葡萄の實の様に、累々たる大小幾多の結節が相垂れ相重なるやうになるが、この肛門の内部にあるのが内痔核で、外部にあるのが外痔核と云ふものであるが、唯さへ狭き肛門に斯様に澤山の結節が出來ては、坐臥行歩は不便であり、遂には核が破れて、だら／＼始終出血することがあり、或は此處より微菌が入つて膿毒症と云ふ恐ろし

き病氣を惹き起すことがある。

脱肛

肛門の周圍に結節があつては、どうしても糞便の通過の邪魔になるからして、便通の際に平素よりは餘計にイキムことになるが、これが度重なると、遂には肛門粘膜と周圍との結合が破れて、肛門外に押し出さるゝやうになるが、これが出痔即ち脱肛と云ふものである。

痒痔

痔疾があると、器械的やその他の刺戟で、肛門に炎症が起り、遂にはその分泌物からして肛門に濕疹が出来て、その痒みが堪へ難くなることがある。こうなれば今度はこれを痒痔と唱へる。

肛門裂瘡

それからまた肛門の縁邊が裂けて、便通その他の努責の場合に、疼痛の堪え難いのは「サケチ」即ち肛門裂瘡である。

肛門周圍炎

肛門裂瘡の爲めに、病毒が肛門の周圍に擴るがり、そこに廣く炎症を發すれば、それが即ち肛門の周圍炎と云ふものになる。

痔瘻

肛門周圍炎が益々侵略を逞うして、痛む、熱が出る、化膿する、遂には破れると云ふ風になると、俗にいふ「アナヂ」即ち痔瘻といふもので、痔疾中最も重症なものになる。

(療法)

痔はどつしても便秘ある人に多いもの故、常に便通がよくあるやうにせねばならぬ(常習便秘参照)また入浴は局部を清潔にし、兼ねて血行をよくするもの故、最もよきものである。痔疾の療法はいろいろあるが、塗り薬は要するに姑息療法に過ぎぬ、近來は無痛注射療法にて確實に根治せしむる方法があるから、これをやつて貰ふがよい。

第十三節 痔

瘻

(原因) 痔瘻は、直腸周圍炎、肛門周圍炎または痔核を打捨て置いた場合、或は魚骨等によつて傷けられたる場合にも起るが、多くは直腸潰瘍、淋病、微毒、結核等によつて起るものであつて、殊に結核性のものは多いやうである。

(症候)

痔瘻は、肛門外に瘻孔の穿いたものであるが、これには直腸と肛門外の皮膚とに交通し得るやうに孔の穿いたもの即ち全痔瘻と、交通せぬもの即ち不全痔瘻とあり、不全痔瘻の中で、直腸にのみ孔の穿いて居るものは内痔瘻といひ、肛門の外にのみ瘻孔のあるのは、これを外痔瘻と稱するものである。

全痔瘻にあつては、不潔なる腸の内容物が、絶えず内孔から外孔に洩れ出て、その内容物が通

る度に、瘻孔壁を刺戟され、分泌が多くなり、外孔の周圍は常に濕潤して、糜爛濕疹を生ずるなど、非常に氣持が悪い。内痔瘻にあつては、直腸内容物の爲めに刺戟されて疼痛を發するばかりでなく、その中にある膿が直腸に出でんとして、矢張苦痛を感じるものである。外痔瘻は、直腸内容物の爲めに刺戟されることはないが、膿が溜まる爲めに炎症を發し、疼痛を起すものである。要するに何れの痔瘻にあつても、絶えず尻から膿が出て、甚だ氣持が悪いばかりで無く、結核性にあつては、その中に恐るべき結核菌を含んで居るから、甚だ危険なものである。

(療法) 外用塗布薬や坐薬または洗滌などは、畢竟するに一の姑息法であるからして、根治にはどうしても外科的手術によらなければならぬ。

俗間に痔瘻を切れば肺病になるといふことをいふが、それは穴勝さうとも限らぬ。普通結核性の痔瘻ある人は、多くは他部にも結核菌があり、或は既に肺結核があつたのがその機會に増悪したものと見るべく、手術の爲めに肺結核になるといふことはないから、安心して、然るべき醫師に就て治癒を受くるがよい。

第十四節 常習便秘

便秘の原因はいろいろあるが、それは略することとして、便秘があつても、別に不快の感じが無ければ、療治を加へなくてもよろしいが、若しそれが爲めに不快を覺えるやうであつたならば手當をしなければならぬ。さてその治療法は種々あるが、成るべく藥物を用るずに、食物その他の方法によつて、自然に排便するやうにするがよろしく、藥物は最後の手段としてこれを用ゐるといふことにしなければならぬ。

食餌療法 便秘ある人は、常に注意して便秘を來すやうな食物を攝らぬやうにしなければならぬ。假へば日本固有の米飯は、秘結させる傾きを有するものである。その他饅頭、赤葡萄酒、シヨコラーデ、カカオ、ココア等も同様便秘せしむるもの故、此等のものを避けて、その他の便通を催進する食物を攝るやうにするがよい。

食物の中で、機械的に腸運動を促すものがある。滓の多いものは即ちそれで、假へば蕎麥、麥、甘蔗、野菜等は、この目的に最も適當なものである。

また化學的に腸運動を刺戟するもの、假へばヨーグルト、バナナ、果汁、果實がよろしい、果實中には有機酸を含んで居るので、それが刺戟となるが、中にも梅實、葡萄等は多く此等の酸類を

含んで居る、殊に葡萄は酸の外に糖分を含有して居るので、便秘症の人には最も良好なる影響を與ふるものである。その他乳糖を含むものもよろしく、蜂蜜、ジャム、甘い葡萄酒、葡萄の汁、梅の汁などもよろしい。

また温熱的の刺激も便通を催進するものであつて、冷たいものは殊に腸を刺激するからして、朝起きると直ぐに冷水を一杯飲むか、或は冷たき食鹽水即ち鹽加減の良い位に食鹽を溶かした水を一杯飲むもよろしく、冷牛乳、冷リモナーでも同様の效がある。

それから油類を多く食するのは賞用すべきことで、殊にバターを澤山に擽るとか、オレフ油を澤山に擽るがよい。さすれば宿便による腸の刺激は、粘膜を滑らかならしむるによつて去ることを得て、快通するに至るものである。

喫煙療法 早朝空腹時に、煙草二三服、巻煙草ならば一本を吸へば、通じをよくするものである。

精神的療法 我々の身體はすべて習慣の附き易きものであるから、毎朝起きると直ぐに便所に行き、便通を試み、若し無くとも決して努責すること無く、通じのあるまで毎朝これを實行し

て、爾後その習慣を持続すれば、自然何時の間にか便秘が癒つて了ふものである。

電氣療法 これは有力なる療法であるが、醫者にして貰はねばならぬ。

體操的練習 坐食して運動の不十分なる人は、歩行運動をするがよろしく、また體操的練習といふて、仰臥の位置より起きては、又仰臥する運動、または仰臥のまま膝を胸に近づけて、更に故の位置に復する運動、仰臥して伸したる下肢を上げては下ける運動、此等の運動を反復數回行ふのがよい。

按摩法 これには按摩球を用ゐる方法もあるが、また大腸の徑路に沿ふて按摩する法、即ち患者自身が右の手にて、右の下腹より上りて心窩を横に、左は心窩より下の方に按摩する方法を毎日一回づゝ繰り返せば、數週日にして、よく便秘の習慣を治して、毎日快く通ずるやうになるものである。

水治法 突然冷たきものを腹部に貼けると、腸の蠕動機を亢進して便通を催すものである。これには下腹部に冷器法を施すもよろしく、また腹部に冷水と温湯とを交代性に水線をなして漑ぐか、または霧のやうにして注いでもよい。

灌腸療法 以上の方法にて速效無きときは、灌腸をすれば、直ちに通ずるものである。これに最も簡單なのはグリスリン灌腸であるが、食鹽水でやれば尙ほ結構である。それからグリスリン坐薬を肛門内に挿入してもよろしい。

藥物療法 下劑は習慣になり易きもの故、成るべく用ゐる方がよいのである。けれども萬己むを得ざる時には、ヒマシ油二〇、〇を頓服するか、またはラキサトール錠三個若しくはカスカラ錠六個を服用するがよろしく、或はまたカスカラ錠四個づゝ、毎食前三十分、一日三回服用するもよろしい。

第十一章 寄生蟲病

第一節 寄生蟲病と其見分け方

人體に寄生する蟲類は、いろいろあるが、腸に寄生するものにあつては、その確かなことは、糞便を検査して見ねば判らぬが、大體に於て、これと思ふ原因がないのに、だん／＼貧血して、顔色が蒼白になるやうであるならば、十二指腸蟲が居ると考へなければならぬ。それから格

別胃も悪くなし、また食物も相當に食へる、別に悪いところもないのにたん／＼痩せるやうであつたならば、條蟲の寄生を考へて宜しい。それから子供の機嫌が悪くて、眼の瞳孔を見ると、普通より擴がつて居るといふやうであつたならば、先づ蛔蟲が居ると思ふてよい。それから肛門の周圍が痒い、女兒にあつては前陰部も痒い、殊に夜る床に入ると、餘計に痒くなつてくるといふ風であつたならば、蟻蟲の寄生を考へなければならぬ。これは殊に小兒に多いものである。それから小便が白く濁るやうでは、糸狀蟲の寄生に疑を措かねばならぬ。それから肝臟チストマ病は肝臟が腫れるだけで、格別の症狀を呈しない、肺臟チストマ病は、前に書いた通り、時々血を咯くものである。尙ほ此の外にも二三の寄生蟲があるが、詳しくは各節下を見られたい。

第二節 サナダ蟲病

(原因) サナダ蟲は、俗にサナダムシといつてゐる。これには十餘の種類があるが、最も普通なるは無鉤サナダ蟲、有鉤サナダ蟲及び裂頭サナダ蟲の三種である。

(寄生徑路) サナダ蟲に眼らず、すべての寄生蟲が人體内に入るには、多くは之の間に於て中間宿主なるもの、體中を経て來るものである。即ち先づ母蟲の子宮を去つたところの卵子は、通

常の場合に於て、宿主即ち人間（これを終結宿主といふ）排泄物と一所に外界に達して、適當の場所、假へば水中に至れば、其處で仔蟲となるものである。最も一定の種類にあつては、母體の子宮内にありて既に仔蟲を形成するものもある。この仔蟲は早晚卵殻を去つて水中に出で、その體面に發生せる纖毛によつて活潑なる運動を營爲し、第一中間宿主を求めて、その中に侵入し、次でまた體外に出で、第二中間宿主を求むるものであるが、中にはまた中間宿主が一つのものもある。そして獸類が此等の卵或は仔蟲を有する水を飲むか、また此等の附着せる軟草等を食する時は、其等の體中に入り、囊蟲となつて、その肉質中に生活するものである。そして此等獸類の肉を人間が生食（或は生煮、生焼等）するときには、即ち此等の蟲の寄生を受けるものである。

有鈎サナダ蟲の中間宿主は豚である。人が囊蟲を含有する豚肉を生食するときは、その被膜は胃液の爲めに消化せられて、唯頭のみより成る幼蟲は、人の小腸に達して、此處に於て發育成熟を遂ぐるものである。そして卵の發育には大略三ヶ月を要し、囊蟲より成蟲にまで發育するには、また三ヶ月乃至四ヶ月を費すものである。この囊蟲の生活期は二三年、成蟲になつてからの生活期は十五年以上である。

無鈎サナダ蟲の中間宿主は牛である。そしてやはり前者と同一の徑路を以て人體に寄生するに至るものである。

裂頭サナダ蟲の中間宿主は、魚類殊に鮭、鱒等であつて、その發育關係は前者と同一である。飯島博士の自體試験によると、裂頭サナダ蟲の發育は、甚だ速かなるものであつて、その囊蟲より成蟲に發育するには、約三週間なりとのことである。

（症候） サナダ蟲が寄生しても少しも障害を與へない、即ち無症候の場合もあつて、サナダ蟲の片節が排泄されてから、初めて判ることもあるが、多くは胃腸の症候として、食慾はないか或は反對に非常に食ひたくなる、早朝に嘔吐、また唾液が澤山出るといふやうのこともある。そして香料、葦等を食すれば、腹鳴、疝痛等があつて、甚しきは腸内に何か蠢動するやうな感じがあり、牛乳または鶏卵を食すれば、その反對に今まであつた蠢動が忽然として消失するものである。その他貧血、下痢或は便秘を來すことがある。

（驅蟲療法） 驅蟲は素人には出來ぬから醫者を頼むがよいが、中には蟲は下したいが、絶食するのが困しい、いろいろの準備的處置をされるのが困しいから、まあ我慢してゐるなどいふ人も

あるが、今日では絶食などさせずに簡単に驅除することが出来るから、安心して治療を受けるがよい。

それから櫃の實を皮のまま、で炒り、皮を取り去り、澁皮の付いたまゝ、一合を凡そ三日位にて食し、一升ほど食ひ盡す頃には、自然に出るものである。これは獨りサナダ蟲に限らず、すべての腸寄生蟲を驅除——豫防——することが出来るから、子供には時々食べさせて置くといひ、味もなか／＼うまひもので、著者の如きも幼時には好んで之れを食べたものである。

第三節 蛔 蟲 病

(寄生徑路) 蛔蟲は最も普通な寄生蟲で、人も知る如く丁度蚯蚓のやうな蟲である。この蟲は中間宿主を要せずに、仔蟲を含有する蟲卵を水または野菜と共に、人間が口にするときは、人腸内に於て約十週乃至十二週にして、成長せる蟲となるものである。

(症) 蛔蟲が寄生しても、多くは格別の症候を呈しないが、時には食慾不進となり、或は反對に食慾が進むこともある。その他口内の惡臭、疝痛等があり、或は左右の瞳孔の大きさが違ひ、鼻腔痒い、動悸元ぶり、眩暈甚しきは人事不省となることがある。また蛔蟲が多數寄生すれば種々の症候を呈するものである。

(療法) 醫者の用ひる驅蟲劑はサントニネであるが、これは素人には危険である。世間には毎月一度つゝ子供にセメンエン即ちサントニネを服ませるところがあるが、これは時としては危険を醸すことがあるから、やつてはいけない。素人には海人草がよい。これをを大人ならば一〇、〇煎じて服用するのである。

第四節 蟻 蟲 病

(寄生徑路) 蟻蟲は丁度白絹絲を細かく切つたやうな白色の小圓蟲で、長さ一分乃至一分五厘位のもので、不潔なる社會に多く、中間宿主を要せずして、人體内に入るものである。

(症候) 蟻蟲の寄生によつて症候を呈するときは、肛門に痒みを覚え、殊に茶、コーヒを用いたとき、夜間褥中に入つたときに甚しく、また外陰部、腫、龜頭包皮下等に入り、爲めに充血、痒さを來すものである。

(療法) サントニネの内服、八十倍醋酸水の灌腸を行ふ等であるが、矢張醫療を要するものである。また蟻蟲の肛門に出づるを防ぐには、肛門周圍に灰白軟膏を塗擦するがよい。

第五節 十二指腸蟲病

(寄生徑路) 本蟲はその名の如く主として十二指腸内に寄生するものである。また本蟲の傳染は、水若しくは土の媒介によつて、被殻仔蟲を嚥下するによるものであるが、尙ほまた幼蟲は人體の皮膚より體內に侵入し得るものである。即ち先づ皮膚の靜脈及び淋巴管に入り、心臟、肺臟に至り、その後氣管乃至喉頭に達してから後、口腔、咽頭、食道、胃を経て遂に腸に達するのである。實際農夫が田圃に於て肥料を撒布する際、皮膚の小瘡または濕疹より侵入せる報告がある。

(症候) 初めには食慾増進するが、後には進まなくなり、胃は重苦しく胸が灼けたり、ゲップが出たり、痛んだり、嘔いたりする。そしてゐる中にだん／＼貧血して、顔色が蒼白くなり、動悸が亢ぶり、眩暈がしたり、耳鳴りがしたりして非常に衰へるものである。岡山地方では、本症を青瓢箪といつてゐるが、誠に適評である。

(本症) 本症も醫師の驅蟲療法を要するが、別に絶食せずに、簡単に驅除することが出来るものである。

十二指腸蟲を有するものは、米國にては上陸を禁止するもので、これは大變八釜しい問題になつてゐる。然しこれまで十二指腸蟲と思つてをつたものの中には、大分東洋毛様線蟲がある。これは渡米が差支がない。その區別は糞便を檢査して、虫卵で鑑別するのであるが、熟練した人ならば無論分るから、念の爲めに申添へて置く次第である。

第六節 鞭蟲病

(寄生徑路) 鞭蟲の傳染は、仔蟲を含有する卵子を、野菜、果物、飲用水と共に攝取するによつて起るものであつて、別に中間宿主を要せざるものである。

(症候) 本蟲の少數の寄生に於ては著明の症候を呈しない。大多數寄生する場合に於て始めて種々の症候を現はすものであらうと思ふ。諸家の報告によると、頑固の下痢と、營養障礙を起せるものや、種々の神経症を起せるものがある。

(療法) 驅除は困難であるが、驅蟲藥の持久的應用によつて驅除し得るものである。

第七節 人腸アメーバ

(原因) 人腸アメーバには四五の種類があるが、その中主なるはエントアメーバ、ヒストリ

チーカであつて、これがまた熱帯赤痢の原因となるものである。

(症候) 輕症は格別のこともないが、重いになると、腹鳴、腹痛、裏急後重等を來し、糞便に粘液、血液を混する等丁度赤痢のやうになることがある。

(療法) 赤痢の如く、先づ下劑を與へて腸を掃除するのである。また本症に對しては、鹽酸エメチンの注射がよく利くものである。

第八節 肝臟二口蟲病

(原因) 肝臟ジストマ病は、窠形ジストマの寄生によつて起るもので、これが寄生には二個の中間宿主を要するもので、第一の中間宿主は通常淡水中に棲息する軟體動物即ちモノアラ貝などで、これから出て、今度は淡水産の小魚に寄生する。この第二中間宿主となるものはヤナギハエ別名ホンモロコ。モロコハエ一名ヌモッコ。ヒガイ。シロカメンドウスヌヤリタナゴ。スナグゲリ一名ヌドロモロコ。イロカメンドウ一名ヌタナゴ。ドンコツ等であつて、此等の鱗片、尾鰭、皮下組織乃至筋肉中に寄生してゐるから、人が若し此等の小魚を十分煮焼せずして食する場合には、入體內に入り、そして終には肝臟内に寄生するに至るものである。

(症候) 本症に罹つても患者は何等苦痛を感じない。何かの機會に醫者から診て貰つて初めて肝臟の腫大を認めらるゝとか、また檢便によつて、偶然に蟲卵を發する筈である等、中にはまた多少の症候を發することもある。

(療法) 格別の方法は無い、近來鹽酸エメチン注射の奏效せる報告がある。

第九節 日本住血吸蟲病

(原因) 本病は一種の住血吸蟲病即ち日本住血吸蟲の寄生によつて起るところの病氣であつて、廣島、佐賀、三重殊に備後の片山地方、山梨地方に於ては流行性に發現するものである。

(寄生徑路) 本蟲の人體内に入る徑路は、初め蟲卵の母體を去るときには、既に仔蟲の發生するを見るのであるが、その卵子が水中に遡すれば、速かに卵殼を破つて、水中に出て遊いでゐる間に一種の小蝸牛族(ヒドロドイデ)に逢へば、その體中に侵入し胚腫囊に變化し、囊内史に數多の小蟲を形成し、この小蟲はまた水中に出て、その權尾を揮ふて活潑に游泳してゐる。この際に若し人がこの水中に入れば、その體表面に附着して、その皮膚を穿通して體內に入り、遂にはその門脈系統に占居するものである。

(症候) 本病の發するのは頗る緩慢であつて、患者は何時から發病したかを知らぬのが多い、そして疾病が或る程度にまで達すれば、此處に始めて症狀を呈するものであるが、この際には胃部の疼痛、腹の張つたやうな感じ、動悸がたかぶり、呼吸困難等を發するものである。その他血を出すこともあれば、また血様粘性の下痢をも發し來つて、患者は甚しく貧血に陥るものである。

肝臓の變狀は、本病に於ける症候中最も重要なものである。即ち肝臓は腫大して硬くなり、之を壓せば痛みを發するが、その中はだん／＼小さくなつて、今度は觸れることが困難になる。

それから脾臓も腫大すれば、腹水を發したり、血性下痢を來したり、黄疸を發したりすることもある。

(療法) 既に本病を發すれば殆んど療治の仕様が無い、それで流行地では豫防法に重きを置いてゐる。一體本蟲の仔蟲が初め水中に游泳する際に、中間宿主となるべき小蝸牛が無ければ間もなく死滅する故、この小蝸牛を無くするのが一番である。これには蝨の幼蟲がこの小蝸牛を喰ひ殺すといふことが判つたので、近時蝨を盛んに養殖してゐる。

第十節 糸狀蟲病

(原因) 本病は、パンクロフト氏フキラリアの胎虫を以て原因とするものであるが、我が國に於ては一千八百七十八年でベルツ氏の始めて發見せるものである。

(寄生徑路) 糸狀蟲も、また中間宿主を有するが、その關係は他の寄生虫とは異つてゐる。即ち本病に罹つてゐる患者が蚊に螫されると、蚊は血液と共にその胎蟲を吸引して自己の胃中に送る。蚊の胃中に入りたる胎蟲は、その一部分は消化せられて死滅するが、他の一部分は、胃壁に孔をあけて胸部の筋肉に入り、此處に一週間棲んで、一定の大きさに達するが、その中、中間宿主たる蚊は溺水中に於て死ぬが、小絲狀蟲はこの蚊屍から出て水中に游離するのである。若し人があつて、誤つてかゝる水を飲用すれば、その小蟲は人の胃中に入つて、その壁を穿孔して淋巴道及び血液に行き、そして最終には尿中に出るものである。

(症候) 本病の症候中特有なるは、尿の乳糜様となる。即ち白く濁ることである、この血乳糜尿は數年間續いても、患者の營養には大した故障を呈しない。然し時として顔面蒼白、全身倦怠を呈し、時としては尿を出すに困して、痛みを訴へることもある。また時としては度々下痢を起

じて、漸次貧血衰弱に陥ることがある。

(療法) 本病の根治はなかく困難である。また豫防法としては不潔の水を飲用せざることが必要であつて、本病の流行地にあつてはマラリヤ蚊屬を撲滅する如き方法を取らねばならぬ。

第十二章 黃 膽

第一節 黃疸を來す病氣の見分け方

黃疸とは、膽汁色素が皮膚に出るために起るもので、俗にアオダんと云ふて、身體は勿論、眼の球まで黄色くなり、甚しきは搔けば黃疸の粉末が落つるものである。

黃疸の起る病氣は澤山あるが、その主なるものを擧げて見ると、膽石症は初めにヒドイ痛みがあつて、それから數日して黃疸が出る。急性黄色肝臟萎縮は突然黃疸が起つて急に衰へるし、肥大性肝臟硬變は、腹部の靜脈が怒脹し丁度メザシのやうに見えるし、また肝臟膿瘍にあつては長く熱がつゞく、それから肝臟包虫腫は脾臟が腫れて、そして腹水即ち腹に水が溜る。肝臟痛は老人に多くて、惡液質になる。また肝臟微毒は他に微毒の症狀がある。

黃疸にはかくの如くいろいろあるが、此等は減多に無い病氣である、普通最も多くあるのはカタル性黃疸であるから、身體に大した故障が無くして、黄色くなつたときには本症と思ふてよろしい。それから黃疸と同時に熱が出たならば先づ傳染性黃疸と思ふてよろしい。

それから初生兒黃疸と云ふて、生れてから二三日目の子供に黃疸を發する事があるが、これは大抵數日の中に獨りで消えて無くなるものである。その他腹部の腫瘍の爲めに出るのもあるが、要するに膽汁の胃に出るところを塞がれると何時でも黃疸になるものである。またビクリン酸と云ふ藥の中毒によつて身體が黃疸になることもある。

第二節 カタル性黃疸

(原因) 多くは急性十二指腸カタルより、延いて輸膽管即ち膽汁の出る管に炎症が波及して、その粘膜が腫れ、膽汁が出られなくなり、膽汁が鬱積する爲めに起るものであつて、人によつては十二指腸カタルとも云つて居る。

(症候) 初めは胃腸カタルの徵候を發する、即ち食慾が無くなつて、胸が悪くなり、口が渴いて嘔氣が出る、又は吐いたりして、便は多く秘結するものである。時としては少し位熱の出るこ

ともあつて、三十八度位になり、頭痛したり、眩暈したりすることもある。そして一二日乃至三四日経つと、だん／＼皮膚が黄色になり、六七日にしてそれが最も強くなり、眼の球までも黄色になる。またそれと同時に皮膚が痒くなつて、夜は眠れなくなることもある。肝臓は腫れて大きくなり、硬くして壓せば痛む。尿は褐色または暗褐色となり、振盪すれば黄色の泡沫を生じ、これが久しく消えない。便は臭氣が強く且つ腐敗性を帯び、帯黄白色若しくは灰白色陶土様となるが、これは胆汁が腸内に滲がざる爲め糞便に色が附かぬからである。

(療法) 便通を整理するのが第一に必要である。即ち天然カルルス泉鹽一〇、〇乃至二〇、〇をコップ一杯の水に溶かして、早朝空腹時に服せしめ、少くとも一日二回の軟便を排泄するやうにしなければならぬ。また民間療法としては河原蓬の乾燥せるものを煎じて服用すること、また田螺の味噌汁や、鯨なども本病に效ある食物と云はれて居る。また脂肪は食べても消化しないから、脂肪の多いものは食しない方がよい。身體の痒いところには醫者から藥を貰つて塗るとよい。

第三節 傳染性黄疸

(原因) 本症は従來ウィル氏病と稱せられたものであるが、我が稲田博士がその原因として一種のスピロヘーテを發見してから、反つて稲田氏病と稱するに至つたのである。

(症候) 本症はカカル性黄疸の熱の高いものと見れば差支がない。即ち急に惡寒がして熱が三十九度位になり、八日位つゞく、熱が高くなると重い病氣に罹つたやうな風になつて、その翌日には黄疸が出る。その他脾臓部や腰部に痛みがあり、下痢することもある。脾臓腫大や蛋白尿、腎臓炎等を發することもある。然し中には輕症のものもあるが、これは反つて長くかゝるものである。また本症が癒つてから、再發することもある。

(療法) 安臥せしめ、初期には甘朮及びアスピリンを與へ、筋肉の疼痛に對しては、ブリースニツツ氏療法を行ひ、腎臓炎を併發せるときは食餌療法(腎臓炎参照)を守らしむる等は主なる療法であるが、元より素人療法の出來るものではない。

第四節 急性黄色肝臓萎縮

(原因) 若き婦人に多く、殊に妊娠時及び産褥時にこれを見るものである、その他或る種の傳染病に發することがある。本症の眞の原因は不明であるが、恐らくは一種の傳染病または中毒で

あらうと思はれる。

(症候) 初め胃腸の症候、即ち食慾の不振、悪心、嘔吐、頭痛、全身の倦怠等を來し、次で黄疸を發するに至る。この黄疸は高度であるが、併し時としては全く無いこともあつて、唯肝臓が大きくなつて、壓痛あるのみのももある。そして第一週の終り或は第二週の始めに至つて、譫妄、痙攣、嗜眠等を發し、それと同時に肝臓は急に縮少するに至るものである。

(豫後) 多くは二週間以内にして死に至るもので、治癒するものは稀れである。

(療法) 對症療法を行ふのみ、元より素人療法などの及ぶところではない。

第五節 肝臓硬變

(原因) 本症は、酒を無暗に飲む人、または辛辣なる香料や、濃き茶、コーヒー等を多飲する人に起り、また燐、砒素、鉛等の中毒、魚貝の中毒等に來り、またマラリヤ、微毒、結核、糖尿病等によつて起り、下等社會の中年男子に多いものである。

(症候) 食慾が進まず、胃部が重苦しく、胸が悪くて、オクビやゲップが出、時には嘔くこともあつて、腹が膨れる。追々には肝臓に變化即ち初めは腫大して後に小さくなる、大きくになると

きには腹水と云ふて腹に水が溜まり、また黄疸や浮腫を來すことがある。

(豫後) 普通一年乃至三年の壽命であるが、療養よろしきを得れば、尙ほ數年或は十數年を延ばすことが出来る。

(療法) ヨードカリウム等を服用せしむ、また牛乳療法も賞用せられて居るが、何れにしても十分なる醫療を要するものである。

第六節 肥天性肝臓硬變

(原因) 不明、甚だ稀れなる病氣であるが、女よりも男に多く、然も壯年者を犯すことが多いものである。

(症候) 本症はまたアノー氏病と云ふ。不定の消化障礙を以て始まり、黄疸を發し、肝臓の腫大、及び疼痛を來し、時にはまた熱の出ることもある。そして此等の症候は數月乃至數年の間歇を以て、發作性に反復するものである。發作は數日にして止む。

(豫後) 多くは重症黄疸を發して死に至るものであるが、その經過は頗る慢性であつて、四年乃至八年稀れには二十年三十年に亘るものもある。

(療法) 殆んど手の下すべきやうは無い。唯滋養物を與へて、腸胃の障礙を癒す位のものである。

第七節 肝臓癌

(原因) 原發性のもものは極めて少く、多くは續發性であつて、胃、腸、膽道、子宮、卵巣、食道または乳房の癌腫に續發することも最も多いものである。

(症候) 初めは特殊の徵候が無く、唯食欲不振、消化困難、便通不足または衰弱感位の徵候を以て徐々に来り、或は肝臓部に疼痛を覺ゆるものである。そして腫瘍が一定度に達すれば、肝臓は腫大し、黄疸を來し、甚しきは膽血症を來すことがあり、腹水を來し、夜間の嘔吐等を發し、追々特有の惡液質に陥り、三四月より半年乃至一年にして死に至るものである。

(療法) 殆んど效なし、外科的治療も無効である。唯對症的療法を施すのみである。

第八節 肝臓膿瘍

(原因) 外傷によつて發することもあるが、多くは續發性轉移症であつて、血管または淋巴管または膽管からして、他臓器より病毒が肝臓に達するために起るものである。

(症候) 患者は一般に疲勞し、黄色を帯びた特有なる顔貌を呈するものである。また肝臓部に疼痛があつて、右の肩に放散し、熱は惡寒、戰慄を以て始まり、高熱に達するも、時としては無熱に經過することがある。黄疸は發することもあれば、發せざることもある。

(豫後) 手術し得るものは豫後良即ち助かるが、多發性と云つて、肝臓の所々に膿を持つて、手術し難いものは、助かる見込が無い。

(療法) 診斷確定したならば、速かに手術を受くるより、外に方法が無い。

第九節 肝臓微毒

(原因) 先天微毒または後天微毒に發するものである。

(症候) 他の微毒症に隠れて、多くは特有の症狀を發せざるものであるが、時としては黄疸或は腹水を發し、肝臓の腫大を來すことがあり、その他肝臓硬變症に似た症狀を發することがある。

(豫後) 初期に最重なる驅微療法を行へば、豫後は佳良である。

(療法) サルブルサンの注射、水銀劑の塗布等、十分なる全身驅微療法を行ふもので、何れに

しても専門家の十分なる治療を要するものである。

第十三章 不眠症

第一節 眠られぬ病氣の見分け方

身體にどこか痛いとか困しいところがあつたり、何か心配事があつたりすると、誰しもロクに眠られぬが、茲に不眠症と云ふのは、不眠そのものが唯一の症候となるもので、眠られぬ爲めに翌日は頭の工合が悪い、仕事が出ぬと云ふのであるが、これに一番多いのは神経衰弱である。神経衰弱にもいろいろあるが、夜更に入つても寝付きが悪くて容易に眠られない、眠つても夢見勝で、すぐ眼が醒めると云ふのは、先づ神経衰弱である。兎に角他にこれぞと云ふ原因が無くして、毎晩眠られぬと云ふのであつたならば、神経衰弱と思ふてよろしい。

それから外傷性神経病と云ふものがあるが、これ外傷即ち怪我が原因で起り、殊に鐵道乗車員などに起るもので、神経衰弱に似て居るが、外傷と云ふ原因があるからして、本人がそれを知つて居る。それから麻痺狂と云ふ病氣の始まりは、神経衰弱と同じで、醫者でさえも熟れぬ人は間

違ふ位であるが、これは微毒を患つた人に起るものであり、それによく注意して見ると、どこか常人と違つたところがある。これは一種の精神病で、精神に變調を呈するものである。それからヒステリーこれは男子よりも女に多く、病氣を過大に話すものであり、毎晩少しも眠られぬと云ふも、見るとよく熟眠して居ると云ふ風である。尙ほ詳しくは各病氣に就て見られたい。

第二節 神経衰弱

第一 神経衰弱の症候

先づ第一に神経衰弱に罹ればどうなるかと云ふに、それには急性と慢性とあり、また肉體的の症状と、精神的の症状とあるが、急性の神経衰弱は非常に心配事をしたとか、或は學生が試験前にひどく勉強をしたとかの結果として起るもので、その状態は殆んど痴呆症になつて、記憶力が著しく減退し、また判断力もなくなつて、殆んど飯を食ふことも、小用を足すことさへも忘れて了ふが、然しそれは一時性のものであつて、適當の療治を加へれば、無論速かに治癒するものである。

それから慢性の神経衰弱、先づ精神的の症状を擧げること、第一は記憶力の減退で、書物を讀

んでも少しも覚えぬ、唯讀むと云ふだけで頭腦には少しも入らぬ。人の名前を聞いても忘れる、甚しきは親友の顔をも忘れる、容易い文字を忘れたりする、のみならずよく間違へる、書き違へる。云ひ違へる、甚しきは電報文を認めることさへも、葉書を書くことさへも出来なくなる。

第二の症状としては倦惰を來たし易い、僅かなことをしても、直ぐにイヤになる。疲れ易い、休息をしても急には恢復しない、やつと恢復したと思ふて、また何か始めると、直ぐにまた倦きて來て、何事をなすにも元氣がなく、面白くなく、負重をもなしたくない。考へることもイヤなれば、考へてもそれが纏らない、全く何事も出来ない、了ひにはヂツトして居ることさへ苦痛になつて仕様がなない。

第三の症状として表るるは意志の薄弱である。普通の人には極めて平凡なことであつても、容易に決斷がつかず、よし一旦決斷しても他人の話を聞くと、すぐにその決心を翻すやうになつて、少しも自信力と云ふものはない。一寸したことでも他人の判斷を請ひ、他人の助力が無ければ決行が出来ぬやうになり、終りには自分で自分が判らないやうに思はれるが、それがだん／＼進んで來ると、今度は失望と云ふことが顯はれて來るが、これは一番危険である。その失望も事

業の失敗とか失戀とか、直接自分に關係あることならまだしも、唯自分には何等の關係が無い、自分には何一つ不足はないが、唯言葉でも筆でも云ひ現はすことの出来ぬ煩悶即ち厭世觀と云ふ風になつて、終には自ら一命を捨てるやうになる。この失望の爲めに、惜可貴重な生命を歿したものは澤山ある。

それから少しのことを氣にかける、何でも無いことが氣になつて仕方がない、棚に載せてあるものが落ちて來はせぬかと思つたり、高い建物の側を通ると、それが倒れて來はせぬかと恐がつたり、首筋の方から蟲が入つて來はしないかと心配したり、幾度手を洗つても、手に汚いものがついて居るやうに思はれたり、或は人と話をして居れば、自分の風評をして居る様に思はれたり、或は戸口を出る時には、左足から踏み出さなければ氣が濟まぬ、途中まで行つてから左から出たか、右から出たかを忘れて、一旦歸つてまた出直すなど云ふ滑稽もあるが、此等は皆一種の強迫觀念と云ふもので、神經衰弱には殆んど附き物である。

それから赤面恐怖症と云ふものがあつて、人の前に出ると顔が赤くなる、何も恥かしかることも無い、赤くなるわけではない、そのことは自分も十分に承知して居るが、さて人の前に出ると、

何時とはなしに顔が赤くなる、或は電車に乗ると赤くなると云ふ風で、果ては人の前に出られなくなると云ふのも、矢張神經衰弱によく見る症状の一つである。

それから人情の變化がはげしくなる、つまらぬことに感じて喜ぶかと思へば、さも無いことにムキになつて腹を立てる、今の今まで嬉しさうに話して居たかと思へば、急に怒り出して、其處等にあるもの投げ出すと云ふ仕末で、まるで駄々子と同様である。そして他人のすること、なすこと、言ふことが癢にさはつて耐まらぬ。他人が皆自分一人を馬鹿にしてゐる様に思はれ、人が皆自分に反對してゐる様に思はれてならぬのも、矢張神經衰弱の重なる症候の一つである。

次には注意力が乏しくなる、精神を集中することが出来なくなるから、常に浮々として深く物事に注意することが出来ない、考へが徒らに散漫になつて取り留めがないから、書籍を読んでもすぐ外のことを考へる、新聞を読んでも一段の記事を読むときに、その最終の一二行位しか頭腦に残らぬと云ふ風になるのが常である。

次に肉體の方には、如何なる症状が顯はるか云ふに、これも随分多いが、その中最も多く

來るのは頭痛で、これは内部が痛むこともあれば、表面が痛むこともある。表面の痛むときには、一寸觸れても痛む、甚しきは毛髮に觸つても痛むやうになる。それから頭か何かで壓迫されるやうな感じがあつて、その時に強く頭を壓すとか、鉢巻でもして居れば氣持がよい。また時には疲労の感じのすることもあり、時には頭ばかりでなく、肩や背部に、その他諸處の筋肉に、この感じの起ることがある。或はまた頭が非常に熱く感じたり、高く感じたりすることがある。

眩暈も多く表はる、徴候で、俄に立ち上げれば眩暈し、歩けば起り、書籍を読めば起り、凝視れば起り、甚しきは寝返りしても起ることもある。身體の震頭、個々の筋肉が震へたり、眼瞼が震へたり、手を出せば指先が震へ、舌を出せば舌先が震へる。臆反射を始め、種々の反射作用が亢進する。

睡眠障礙も度々起る徴候であつて、寝付きの悪いのが非常に多い、床に入つて寝やうとしても眠られない、度々時計の鳴るのが聞える、煩悶が起る、萬感刻々胸に集つて、眼が益々冴へて來る。漸く眠つたかと思ふと、ガタリと云ふ音でも直ぐ眼が覺めてまた寢られない、寢て居る間も決して熟睡をして居るのではない。夢ばかり澤山見て仕様がな、その癖畫になると、コクリ

くをやる、それちや此間に十分寝て置かうと思ふて横になる、サアどうしても今度は眠れないと云ふ有様で、實に苦痛である。神経衰弱に罹ると、この不眠の爲めに苦しめらるゝのは一番にツライ、尤もなかには夜となく晝となく、いくら寝てもくゝ眠くて仕様がなないと云ふ正反對のものもあるが、多くは眠られぬ方である。

内臓諸器の症状としては、心悸が亢進することもあれば、或は減退することもある、時としては卒中發作を起して人事不省となることがある。それから消化器の障害、殊に胃の弛緩症を起して、神経性消化不良と云ふ状態になる。泌尿器にては、尿の成分が變つて、磷酸尿或は糖尿を洩す。また遊走腎を起すこともある。それ生殖器の障害としては、陰萎、早漏、遺精等を起し、婦人には月經異常、不感症等を關することがある。

五官器に顯はるゝ障害では、第一は視力の障害、即ち眼が疲れ易く、羞明を來す、調節機能が障害され、視野に欲損を來す、聽官では耳鳴りがしたり、或は音響を聞くと身體に異常を感じ、或は身體の一部に疼痛を感じることもある。それから嗅覺は非常に鋭敏となることもあれば、或は或る臭氣を非常に嫌ふやうになることもあり、味覺もまた非常に過敏となり、或はまた一部脱

失することもある。皮膚には麻痺は無いが、知覺失常を來して、無暗に痛く感じたり、蟲が這ふやうな氣がしたり、また座ると直ぐに麻痺れ、身體の處々が痛む、所を定めずに痛むか、或はまた肺病では無いかと思ふと胸部が痛み、胃病ではないかと思ふと、腹が痛むと云ふ風に、自分で重い病氣になりはせぬかと思ふと、心配する場所が痛むこともあつて種々なる症状を呈するものである。

以上は、主として男子に就て述べたものであるが、婦人に於ても矢張同一の症状を發し、月經不順、不感症等を來すものであつて、婦人の神経衰弱は割合に多く、彼の頭痛持ち、癩持ちなど云ふのは、大抵は神経衰弱である。

第二 神経衰弱はどうして起るか

神経衰弱はどうして起るか、即ちその原因は如何と云ふに、これを大別すれば、先天性の原因と、後天性の原因との二つになるが、元より二者は相關連して居つて、事實はこれを分けるわけには行かぬ。

先天性の原因としては、身體の虛弱で、殊に兩親の何れか、神經質であるとか、癩癩がある

とか、酒客であるとか云ふもの、子供に多く、よく癪持ちだなど云ふ子供や、腺病質の子供などは、よく神経衰弱に罹る素因を持つて居るものである。

それから後天性の原因は非常に多い。よく素人も云ふのは心身の過勞であるが、然し單に心身の過勞では神経衰弱にはならぬ。少し休めば恢復するが、神経質の人が心身に過勞を與へると、よく神経衰弱になるものであるからこれは最も注意せねばならぬ點である。

それから營養障害、飲酒、喫煙その他の嗜好過度、耳鼻病その他の慢性病等、澤山の原因があるが、予の診療所に来る多數の同病者に就て見るに、少年と中年時代の人とは多少原因が異つて居る、即ち十七八才より二十三才乃至三十才位までの人に最も多き原因は自慰である。自慰を過度に行つた結果、神経衰弱に罹るものが頗る多い、また此等の人をよく見るに、自慰そのものより来る惡結果よりも、それを苦慮して焦心の結果神経衰弱を起すものが多いが、これは頗る注目すべき點である。

第二は肺尖カタル、自分は肺が悪いと思はず、單に神経衰弱の症候を持つて治療に来るが、診察して見ると、肺が悪いと云ふのは割合に多い。それから次は耳鼻病で、少青年に一番に多い原

因は自慰、肺尖カタル、耳鼻病、胃腸病と云ふ順序であるが、それが四十才以上になると、奇體にも慢性胃腸病が多い、尤も精神の過勞とか、その他種々の原因もあるが、最も多いのは慢性胃腸病であると云ふ現象である。

第三 神経衰弱に罹つたのがどうして分るか

同じ勞働と云ふても、筋肉を勞する方は早く疲れが来るからして、自分ではそれが判ることも早い、腦力を勞する方は、疲れが早く來ない代り、それが判るのも遅く、また割合に我慢がきくから、遂に無理をして衰弱を深からしむるやうになるからして、この衰弱即ち神経が疲れて居るのが早く分れば、自分で衰弱に陥るのを防ぐことが出来る。それでこの神経衰弱の初期に、自分でそれを知るには、どういふことに注意すればよいかと云ふに

- A 自分の頭に、熱いやうな、重いやうな、平生と變つた感じが生じたる時
- B さうしてゐる中に、自分の頭の中に何か物がある、腦があると云ふことに氣が附く
- C 既にかう氣が附いたときには、即ち腦神経が疲勞し、神経衰弱の初期に罹つて居るのである。

から、此際に早く適當の醫師に治療を受けなければならぬ。實際我々が健全なるときには、内臓のある處などは氣の附くものではない。胃のあるのが氣が附くときは、胃に故障のある時、心臓の鼓動の分るときは、心臓病のときである。これと同様腦神經の健全なときには、頭の中に何があるなど、氣の附くものではない。腦があると氣の附くときは、抑も神經の衰弱しかつたときであるから、若し斯様の感覺があるならば、速に適當の休養法を講ずると共に、早く醫藥を受けなければならぬ。然し茲に一つ注意しなければならぬのは、その醫者の選び方である。神經衰弱殊に生殖障害専門の醫師には怪しいものもあつて精神病者の博士を表看板にして居る人もあれば、或はまた何でも手術する人もある。或る人の如きは手淫の毒が溜まつたとて、手術されて二百五十圓も取られた。或はまた何でも神經衰弱は眼さへ癒せばどんな神經衰弱でも癒る、陰萎も癒ると云ふ大先生もある。尤もこの先生は化の皮が現れて東京に居られなくなつて田舎に引込んだが、外にもこの眞似をするものがある。また手術すれば陰莖が二割も大きくなるなど、巧みに弱點に投ずる先生もあり、醫師講習など巧みに法網をくゞつて患者（この醫者は患者が迷つて來る故亡者と云つて居る由）を釣る人もある。此種の實例は澤山あるから、此種の専門醫の選擇は大に注意を要するもので、度々新聞に廣告するから其處がよからうなど、飛び込んでならぬ、嘗に金錢と貴重の時間とを浪費するばかりでなく、反つて後害を残すことがあるから、よく注意が肝要である。

第四 神經衰弱の最新療法

（苦も無く癒る） 神經衰弱と云ふと、多くの人は必ず長くかゝるもの、やうに思ふて居る、成るほど世間を見ると、一年も二年も醫者通ひをなし、或は病院より病院へと、所謂病院廻りをし居る患者も澤山居るから、此等の事實のみを見た人は神經衰弱は容易に癒らぬ病氣であると思ふのは無理がない。なるほど神經衰弱はその病の性質として割合に長い病氣ではあるが、適當の治療をすれば、決してさう長くかゝるものではない。一年も二年もかゝつて癒らぬものを、僅か二三週で癒した例は澤山ある。一體何病氣でも、原因療法は第一に必要であるが、殊に神經衰弱にはより以上それが必要であつて、その原因を察し、原因を除くと共に、弱れる神經を強壯ならしむる方法を講ずれば、苦も無く癒るわけであり、また事實癒つて居る。然るに唯その主なる神經衰弱のみを癒さんとして、その原因を顧みざるに於ては、何日まで経つても癒る筈はない。所謂鹿

を追ふ獵師は山を見ずと云つたやうなわけで、現在現れ来る症状の驅除のみに腐心して、その由て来る原因に就ては何等顧慮するところが無いやうでは、決して病氣が癒るものではないから、此の點は特に神経病専門家の注意を要する點であり、それと同時に、唯人體を病の器、即ち物體視せずに、その人の精神に就て参酌するの必要がある。一體今の療法は、動物試験ではかうの試験管内の成績はどうのと、單に理化學的の成績にのみ考へを置き、病人その人の精神状態は顧みるところはない、この點は遙に昔の漢方療法に劣つて居る。昔の人は萬病は一氣に存すと云つた位で、患者の精神作用が重大なる影響を及ぼすものであるから、理化學的の治療に此の精神、つまり精神的療法を加味することが必要であつて、殊に神経衰弱の如き、ヒステリーの如き機能性の疾患にあつては、寧ろ精神的療法を主とせねばならぬ位のものであつて、これまた神経科専門家の注意すべき點である。

神経衰弱になると、その初めは多くは過敏症を呈するが、この際にプローム劑の如き鎮靜劑を用ひるのは、場合によつては反つて神経をより衰弱に陥らしめ、その経過を長からしむるの基となる故、成るべく初めより神経の根本的強壯劑を用ふべきである。要するに神経衰弱の最良療

法、根治療法はその原因を除くと共に、何處までも神経強壯藥を用ひ、同時に適當の攝生法を守らしむべきことであつて、これが即ち経過を極めて短縮せしむる理想的療法である。

(規律的療法) 日常生活を規則正しくすると云ふことは、神経衰弱の豫防ともなれば、また治療法ともなるものである。病の輕症にして尙ほ作業に堪ゆるものにあつては、豫めその體質、病症に適するやうに、一日の時間割を定め、午前何時離床、何時朝食、午前中の執務と休養、其他晝食、晩食、就床の時間までチャンと規律を正しくすれば、それだけでも癒る、だから輕症の神経衰弱は、一年志願兵として入營せしめ、軍隊的規律生活を送らしむれば、癒るばかりで無く、再び罹病するやうなことはなくなる。それで先づ規律を正しくすると云ふことは神経衰弱療法の根本義となつて居るのであるから、患者が之れを守らなければ、千百の療法もその效が無いと云ふことを記憶せねばならぬ。

(水治法) 神経衰弱の治療法として醫者の採用するものゝ中、水治療法と云ふものがある。これは主にも冷水にて半身浴を取る方法であるが、素人療治としては、通常用ひるところの冷水摩擦若しくは冷水浴を以てこれに代へるがよろしい。そして頸部を十分念を入れて摩擦するがよろ

しく、また生殖神経衰弱者にあつては、殊に腰部の冷水摩擦を入念に行ふがよろしい。そしてそれを怠らずやつて居れば、よく神経衰弱を豫防することか出来るばかりでなく、また以て既に罹れる神経衰弱を癒すことが出来るから、是非怠らずこれをやつて欲しい。

湯屋に行くと、上り際にさぶ／＼冷水を浴びる人があるが、これも矢張冷水浴のやうな效がある、一寸考へると今まで熱して居つた身體に冷水を浴びるから、所謂寒熱の劇變で大層悪いやうに思はれるが、實際その劇變が刺戟となり、その度が重なる、習性となつて、寒暖に對する作用、抵抗力が強くなるのである。そしてこれをやつた後は、直ぐに堅く搾つた手拭か、或は乾いた手拭で以て、全身を赤くなるまで摩擦することを忘れてはいけない。

(食餌療法) 神経衰弱病者には、肥饒療法と云つて、滋養物を澤山に攝らしむる方法がある位故、本症を患ふるものは、成るべく多く滋養物を食するがよろしい、そしてその種類は何でもよいが、一般的に云ふと、食事は自ら欲しいと思ふ感じのないときはお膳に向はぬこと、そしてその間時は成るべく一定して置く、食物は十分に咀嚼んで用ふ、飲料は成るべく節し、食物は腹一杯食べぬこと、また薬味類を用ゐぬこと、食事の前後には運動せぬこと、食事中新聞を見たり、

考へ事をしたりせずに、唯氣樂相に面白き談話を交換すること、食事後は靜かに長椅子にでも倚つて休むなどがよろしく、またすべて飲食物の冷温その度に過ぎるものは害がある。

それから神経衰弱病者には、如何なる食物が良いかと云ふに、これはその人の年齢、職業、嗜好、土地の關係、貧富の關係その他よりして一定することは困難なるも、要するに比較的量が少くして滋養分に富み、且つ消化吸收の良いものが適して居る。量が多くして長く満腹となつて居つたり、消化が長びいたりすると、血液が胃や腸の方にはかり停滞勝になつてよろしくない、更に之を具體的に云ふと、瘦せた人には軟かい肉類、魚類、牛乳、バター、鶏卵、麥飯、馬鈴薯、新しき野菜等がよろしく、肥つて居る人には、成るべく脂肪分の少き食物がよいのである。

それからまた特に腦によい、即ち神経衰弱によい食物と云へば、第一に腦の主成分たる磷を含むもの、ABC三種のヅキタミンを含むものがよろしく、即ちオートミール、青い豆、牡蠣、鶏卵を始め總ての卵類、魚類の仔殊に雄の俗に白子と稱するもの、鶏の翠丸、其他鳥獸の翠丸、動物の腦、雲丹、胡麻、麻の實等すべて植物の種子、新しき野菜、殊に若き野菜等がよろしきものである。尤も此等のものを一度や二度食つたとて、それで頭腦がよくなり、神経衰弱が癒ると云

ふわけではないが、此等のものを毎日適宜按排して用ひれば、追々に脳がよくなるものである。
(藥物療法) 神経衰弱の藥物療法はなか／＼六づかしい、何故かと云ふに、神経衰弱の初期には神経が過敏となり、不眠を來し、或は頭痛などがあるから、此際に臭素劑の如き麻醉劑を用ひると、それが靦面に利いて、患者に喜ばれるけれども、それは病の全経過に取つては反つて面白くないことが多い。と云つて始めから神経の強壯劑を使ふと、其等の過敏症狀が急に取れぬ故、どうしても麻醉劑を使ひたくなる。これが醫者の最も困しむところであるが、私は斷乎として始より強壯劑を使つて居る、この方は無論自然であつて、全経過即ち癒りも早い、神経衰弱の治癒の長くかゝるのは、一つはその病の性質にもよるが、多くは此療法の間違つて居ることも關係するのであるから、醫師殊に専門家はよく此點に注意され、目前の小康を得ることに腐心せず、よくその大極に目を注がれたいものである。

神経衰弱に用ふる強壯劑は燐製劑を始め、亞砒酸劑その外澤山あるが、醫師が用ひるには、注射藥の方は交效が早い故、多くの醫師は注射に重きを置いて居る。またその注射にも皮下注射、靜脈注射とあり、リンゲル氏液、ヨヒンビン、スベルミン、ヌクレイン酸ナトリウムを初め澤山

の種類があるが、此等のものは價も高く、一回の皮下注射料三四より五六圓、甚しきは十圓のものもあるから、或る大家はそれは藥が利くのでなくして元金が利くのだらうと、惡まれ口をきいて居る。まさかさうでもあるまいが、どうも此等の藥はさう卓效は認められぬやうである。

米國は、萬事世界一を標榜して居るだけに、生存競争も非常に劇烈で、従つて神経衰弱病者も非常に多い。元來この神経衰弱なる病名は、今より四十年前ばかり前に、米國のペアド氏の命名せるものであつて、我々醫家には神経衰弱をアメリカ病といつて居る位アメリカには非常に多い、従つてその研究も世界中で一番進歩して居る。その米國では諸大家がいろ／＼研究の結果、S T液の皮下注射は非常に奏效確實で、然もこれによれば治療日數を非常に短縮することが出来る、即ち短時日で癒ると云ふことを醫學雜誌に發表して居る。

私もS T液を數年前より使用してその偉效を認めて居る。大正十年六月の研醫學會で、その成績を發表した次第である。實に此藥を用ひてからは、治癒の日數は非常に短縮された。即ち輕症は一週間位、二三年越のものは二週間位、十年経過のものも一ヶ月位の治療で大抵癒つて居る、尤も米國では朝夕二回注射するのが普通なさうだが、我々は普通には一日一回用ひて居るけれど

も、それでも治療率はなか／＼よい。兎に角今日ではこれ以上の治療薬はないやうである。

神経衰弱の内服薬は、注射薬よりも更に非常に多いが、その中でもカルビタミン錠が最もよく利くこれはカルチウム、有機燐、ヴキタミンA、ヴキタミンBその他のものを含むもので、普通一日三回毎食後に三粒づつ、重症者には五粒づつ、服用するのである（發賣元小石川區大塚仲町三六救生薬園）即ち直接醫師に治療を求むるものにはST液の注射がよろしく、また治療を受けずに自療法をなさんとするものはカルビタミン錠を服用するのがよろしく、若しそれST液の注射に兼ねて、カルビタミン錠を服用すれば更に奏效顯著となる、これが即ち最新神経衰弱の理想的療法である。今最近に於ける二例を掲げよう。

第一例は二十三才の學生、強度の神経衰弱に罹つて學業も出來ず、不眠、頭痛、遺精夢精等あり、休學して専門醫を三四訪問治療五ヶ月に及ぶも輕快せず、最後に予の診療所を訪ねたのが、昨年十二月の末である。爾來毎日一回ST液の注射をし、二週日にして諸症輕快し、四週日の後は全く健康舊に復し、また元の無邪氣、快活なる青年となり、目下復校して後れたるを取り返すべく、盛んに勉強中である。

第二例は、三十八才の實業家、昨年の震災により多年築きたる地盤は全く覆され、懊惱の結果、強度の神経衰弱となり、人の面前に出れば、自然に血の顔面に上るを覺え、物を云ふことが出來なかつたが、これは初めの一週間は、朝夕二回注射し、その後は一回注射し、前後約三週間に於て全治に至り、今では盛んに活動して居る。

外にこの様な例は澤山ある。要するに神経衰弱の根治法としては、その原因を去ると共に、神經強壯薬を用ひるがよい。尤も強壯薬は敢て前記の二薬に限つたことは無い、他にいくらかもある。唯私始め多數の人が、多くの實例に照して、これが最も優れたものであると云ふことを報告するのであつて、實際この薬を用ひるやうになつてから、治療日数を短縮し、これが神経衰弱療法上、一新紀元を畫せるものとして、専門家に推奨されて居るのである。（伊藤）

第三節 外傷性神経病

（原因） 外傷性神経病と云ふのは、神経衰弱の一つには相違が無いが、ヒステリーの症状を必ず備ふるところの、甚だ奇異なる病氣の一つである。この病症は外傷が原因となるものであるが、殊に鐵道に於ける災害の爲めに、全身に震盪を來たしたなど云ふ場合に起るのが大多數であ

つて、單に肉體の外傷ばかりで無く、神經即ち精神の外傷にも起り、また中には身體の外傷なしに、單に精神の外傷のみに起ることもある。

(症候) さてこの病氣に罹ると、どうなるかと云ふに氣分が曇つて如何にも引立ない。何事をするのも嫌になつて、全く勢力が消耗する。また何か重い病氣にでも罹るやうな恐怖心、つまりヒポコンデリーのやうな症狀を呈して来る。またその顔貌には一種特有のものがある。顔面には少しも表情が無く、茫然自失して居るやうであるが、よくよくその眼を注視すれば、その深い處に悲しい、いたましいやうな状況を見出すことが出来る。そしてまた非常に泣き易くなつて、少しのことでも直ぐに泣き出す。苦悶と不安とは常に患者の腦中から去らない。此等の症狀は頗る頑固であつて、唯の神經衰弱とは違つて、種々治療をしてもなかなか癒らない。また顫震性錯亂状態に陥るが、殊に面白いのはガンゼル氏症狀と云ふて、問に對して必ず間違つた答をすることである。假へばお前の年齢はいくつかと問へば二十五と答へる。お父さんは、十三と云ふ風に、問に對して問相應の答はするが必ず間違つて居る。これは決して嘘を云ふのではない。この點はヒステリーの朦朧状態に似て居つて、普通の神經衰弱と違ふ點である。また記憶力と智力が減じ

たと、患者が訴へるが、これは眞に減じたのでは無くして、唯疲れただけである。それから劇しき頭痛、眩暈、これは主なる症狀である。また心臟神經が亢奮して來て、心臟部に疼痛がある。そしてその癢いところを壓すと、脈の數が多くなつて來る(マウンコッフ氏症狀)それから顫癇のやうな發作も起れば、半身不隨を起したり、癱瘓(運動不隨)截癱(脊髓麻痺)振顫、麻痺等を來し、歩行にも障害を來して、丁度酒に酔つた人のやうに、失調性の無骨の堅き歩き方をする。また知覺機にも障害があつて、時に半身の知覺が減弱することもある。殊に面白いのは手掌大だけとか、帯を締めた處だけ、またはシャツを着ただけとか、腰巻を締めた處だけに知覺異常を呈することなどもある。それから五官器には視野の狭小、聽覺、嗅覺、味覺等の減弱を來すが、これは一方だけ然も外傷を受けた側のみ來るものである。これは最も注意を要する症狀であつて、普通の障害なれば、外傷を受けた反對の側に起るものであるが、本症は同側に障害が起るのである。だから普通の醫師はこの理を知らずに、虚偽なりとすることが間々ある。殊に損害賠償を受くるとか云ふ場合の鑑定には最も注意を要するものであつて、本症と多くの關係がある鐵道史員には、この注意が就中必要である。

(原因) 微毒に發する。即ち腦微毒の一種であつて、主として成年の男子を犯すものである。

(症候) 麻痺狂には種々の病型があるが、これを一言にして盡さんとすれば、徐々として進行するところの馬鹿である。即ち本病の特徴は、叡智減退し、遂に全然消失するもので、その程度は種々あるが、甚しきものにあつては、親子兄弟の見境も附かず、今食事をして直ちに之を忘れて、再び食事を求め、或は年月日を忘れ、朝か夕かも明瞭でないものである。またこれには種々の定型があるが、凡そ左の三種に區別することが出来る。

(A) 徐々として進行する癡呆、即ち幻覺を起し、或はヒポコン德里性となり、或は憂鬱性となり、或は罪業妄想を起すことがあるも、遂に全然癡呆に陥るものである。

(B) 神經衰弱型、所謂麻痺狂性神經衰弱はこれである。

(C) 突然として發病するもの、即ち躁暴狂の型、或は誇大妄想型となつて來るもの。

本病の特徴は、精神及び性質の變化である、時としては輕症にして徐々に來ることがある。即ち感受力亢進、疲勞し易き、頭重、不眠等、所謂麻痺狂の神經衰弱期がこれである。この期間は

人々不定であつて、時としては一二年或は尙ほ以上なることがある。それに次で精神障害を起し、同時に性質の變化を伴ふものである。叡智の減退は長い間氣の附かぬことがある。これは習熟したる業務等は比較的缺點少く行ひ居るからである。けれども病勢の進むに従つて、患者は野卑となり、粗暴となり、動物的慾心亢進し、殊に色慾は最も旺盛となる。また發作的に暴れる。即ち躁暴行爲をなすが、此時期に至れば、患者の記憶力は高度に減退し、或は殆んど消失に近いものである。

(療法) 本症の初めは神經衰弱に似て居るから、家人は勿論、醫師もそれを知らぬことが多いから、よく熟練せる醫師を選び治療を受けなければならぬ。患者が財産を盡盡し、然も本人が氣狂ひと來ては誠に目もあてられぬから、早くこれを見出してこれを處置することは、家庭の上にも誠に大切のことであるし、また既に腦に變質を來してからは、如何なる療治も效を奏しないが、早い中ならば治癒に至ることがある。殊に最近はこの方面の療治法は大分進んで來て居る。この點から云つても早ければ早いほどよいわけである。だからして然るべき醫師に、假令それが神經衰弱と思つても、相當の醫師に診療を求むのは、素人として最も必要な注意である。予は

昨年神経衰弱なりと稱して來れる患者に、本症を發見して、家人に警告し、目下専門の病院にて治療中で、大分経過の良いと云ふ例を有して居る。

第五節 ヒステリー

(原因) ヒステリーは婦人に多い、婦人の神経の抵抗力が弱いと云ふことが重大な關係を持つて居るもので、文明はそれを助長するの傾きがある。

年齢の關係は、第一に春機發動期、即ち十四五才より十六七才の間、此の時代には非常に神経が過敏になつて居るから、よく注意せねばならぬ。若しも此際に過度の勉強を強ひたり、或はひどく苦心するやうなことがあれば神経質に陥り、身體の衰弱を來し、遂に取り返しのつかぬことになる。つまり婦人の一生中最も大切な時代である。次に月經閉止期即ち四五六才から五十才までの間で、この時代もまた注意せねばならぬ。この兩期は共に新たなる生活に入る過渡期であつて、肉體精神共に大なる變動を來すので、神経も甚だ過敏になつて居るから、此際には苦心、心配等の如き腦髓を過度に勞することは一切避けねばならぬ。

その他には生理的月經時を擧げなければならぬ。月經時には神経が過敏になつて居るから、若

し精神を刺戟するやうなことがあれば本症になるし、また妊娠中も精神を刺戟するやうなことがないやうにせぬと、間々本症に罹ることがあるから注意せねばならぬ。

(症候) 第一の症候としては頭重、頭痛がある。即ち何となく頭が重く、或は上より壓迫されたるが如く、或は箍を締めたるやうな感じが、多くの頭の後部に起り、或はまた前頭からして全部に渉ることもある。それから鈍痛もあるが、時としては刺すが如き劇しき痛みを感じることもある、そしてその場所は前頭或は後頭等に、一局處に限局することもあれば、また全部に渉ることもある。時としてはまた頭内を攪き拌はすやうな感じもする。次は眩暈で、數日間續いて起ることもあれば、また時々起ることもある。そして仰いで上を見ると、手を高く舉るとき、或は運動後、或は坐位に於て現はる、ことがある。また睡眠は多く妨げられ、甚だ不十分な眠りしか得ないものもあり、或は唯二三時間しか眠られぬこともあれば、或はまた終夜夢、悪夢等に襲はれ、覺めて疲労を感じることもある。そして斯様な場合には種々の空想が浮んで益々眠に遠ざかり、煩悶して夜を徹し、反つて曉に及んで僅かに眠り得ることがあり、爲めに翌日は身體が大に疲労することになる。尤も中には自分が不眠を感じ、徹宵眠らずと訴ふるにも係らず、傍人が見れば

毎夜五六時間は安眠し、鼾聲を放ちて熟睡することもあるから注意を要する。

また身體は何となく疲労の感じがあつて、職務を執るに倦怠を呈する。或はまた食欲欲乏し、胃の空虚なるに係らず反つて膨滿を覚え、胃部壓重鈍痛を感じ、時としては嘔氣、嘔吐、雷鳴、悪心、嘔吐を來すこともあり、爲めに山海の珍味も味無く、食する分量も甚だ少く、精神は一層不快となる。眼は常に鋭く周圍のものに注意し、他人の一舉一動を寸毫も見逃さずと注目を怠らない。時としては堪えず目を使ふか、微細なものを見るか、或は光線の不十分なる所にて物を注視するときは、暫時にして涙が出て羞明を感じ、眼内や眉間が何と無く重く、痛く、後には視力朦朧として注視に得堪えぬこともある。その他顔面は蒼白羸瘦し、笑ふこと少く、首を前に垂れる傾向があり、不活潑にして恥かしき態をなす。身體は瘦せ衰へて倦怠く、力が脱けたやうになつて、多く物を云はぬやうになる。尤もこれに反して肥滿して居る人もあるが、此等の人の肥滿は、一種浮腫的緊張の色澤を帯びることが多い。殊に面白いのはヒステリー癲癇を來すことであつて、患者は癲癇様の痙攣を發し、絶叫、號嘯し、床上に轉輾反側して、諸般の妄想的運動をする。また後弓反強と云ふて體軀を以て丁度橋のやうな格好に反り返る。所謂ヒステリー弓であ

る。或ひは眼注がビリ／＼動いたり、知覺が半身とか或は一部分脫失することもあれば、その他種々雜多の症狀を呈するものである。

次に精神的には感情の變化が主であつて、沈鬱となり、不愉快の感があり、餘計なことを氣にする、泣き易く悲み易い、つまりすべての刺戟に對して反應が過敏になる、だから健康時には何等の感觸をも動かさないもので、甚だ不愉快なる數時間の變調を來すを見るものである。即ち精神的知覺が過敏になるのである。病者は甚だ不機嫌で、傍人の動作が少しく自分の氣に食はぬか、または自己の欲するところが即時に行はれぬときには、忽ち立腹し、甚しきは人力を以て左右することの出來ぬことまでも腹を立てることがあるからして、時としては天候の晴曇もこれが叱責を避くる能はざることがある。或はまた家人の好意に對してさへ澁面を作り、小言を浴びせかける。また他人が自分の云ふことを聞き入れぬか、或はその意見に反對をするとか、若しくは輕侮さるゝやうなことがあれば、非常に憤怒し、或は涕泣することさへある。業務に對しては、直ちに飽き易く、讀書を初め業務を執り、人と對談するも忽ちに倦厭を來し、閉居し、或は傍人の高聲に驚き、路人の疾走に恐怖し、時に門前の犬の吠ゆるを聞いてさへ驚くことがある。

感情の變換もまた著しく、朝には爽快に談話せるも、午後には忽ち沈鬱して黙し、甲に對しては親しく喜びて語を交ふるに係らず、乙に對しては甚だ不機嫌なることがある。所謂愛憎の感があつて、自分の病に於ける訴へを謹聽するものは喜んで迎へるも、之れに反するものは排斥するに至るものである。それから感覺的快樂に向つても、健康時の如くには樂みを感じることなく、飲食物等に對しては嗜好の變化を見ることは少いが、讀書や音楽や演劇、遊戯等に對しては好感著しく減じ、聞いて面白からず、見て樂しまず、また家族、親族、友人等の喜ぶべき出来事や、哀むべき出来事を見聞するも、これに同情を表することは少い、始終陰鬱の思考が腦中を支配し、連日不機嫌で、子供を叱り飛ばしたり、良人に反抗したり、一家の不和もそれから來れば、不經濟もまたそれから起る、遂には交際の圓滑も飲くに至り、始終精神の働きは休まない。尙ほこの外にも澤山の症狀があつて、殆んど捕捉すべからざるものであるが、尙ほヒステリーの婦人は、子供を産むことが少いが、或は産まぬものである。

(療法) 本症の治療法としては、先づその原因を除くことが何より大切のことであつて、若し子宮病が原因するものであつては、それを治療するがよろしく、また飲酒、喫煙の濫用に因するものならば、之を禁ずる等の原因療法をやるがよろしい。そして成るべく花卉を愛するとか、小禽を玩ぶとか、庭園を逍遙するとか、力めて自然を伴侶とするがよろしく、冷水摩擦、冷水浴、海水浴または旅行等もよろしく、その他すべて神經衰弱に於ける療養法を守るがよい。

醫藥として従來用ひられたるは瀝草劑、カストリウム、阿魏丁幾等である。またST液の注射がよろしく、新藥にてはカルピタミン錠(一日三回毎食後三粒づつ)ヴァリドール(一日一〇滴づつ)、一日三回糖水に加へて服用)ボルニヴァル(一日三日一球づつ、服用)等が效があり、その他精神的療法、催眠術、教諭法等の應用もよろしい。

第十四章 尿に異常ある病氣

第一節 尿に異常ある病氣の見分け方

尿に異常があると云へば、先づ第一には分泌に異常あるもの、即ち尿量の普通より多いか少いか、次にはその成分に異常あるもの、またはその出る時の不時なものと、かう三種の場合がある。我々が飲食した水分の多くは尿となつて出るからして、飲料を多く攝れば、従つて尿量の多く

なるのは當然のことである。また尿と發汗とは拮抗の關係があつて、汗が多く出れば、尿の量が少くなる。従つて夏は小便の出方が少ない。これに反して汗の出ることが少ければ、尿の出る量は多いから、汗の出ない冬になると、尿量の多いのは元より當然のことであり、また下痢したり熱があつたりすると、尿量が少くなる。

以上の場合でなくして、尿量の多くなる、即ち病氣に尿の多くなるものには糖尿病、萎縮腎、單純性尿崩の三種である。單純性尿崩のときには、唯尿量が多いただけで格別のことはないが、糖尿病のときには、咽頭が非常に乾くと共に、食慾も非常に進み、いくら食つても肥らずに反つて瘦せて來ると云ふ風であり、萎縮腎は老人に多く、夜中度々小便に起きなければならぬと云ふ風のものである。尙ほ尿を検査して見ると、糖尿病のときには糖、萎縮腎のときには蛋白が含まれて居る。

尿量の少くなるものは、すべて浮腫む病氣がそれであるが、殊に急性腎臟炎のときには少くなる。然しこれには浮腫と云ふ重大な症狀があるから、これは浮腫のところ述べることにする。

尿中に普通には無きもの即ち異常成分の出るものでは、糖分の出る糖尿病、蛋白の出る腎臟炎

などであり、また尿に血液を混するものは腎臟及膀胱の病氣であつて、何れも重い病氣であるから、自分で鑑別するよりも、先づ早く醫受ける方がよろしい。

尿に膿の混るのは、大抵は淋毒性尿道カタル、即ち俗に云ふ淋病であるが、これは後に花柳病のところに記述する。また尿が白くなつて乳汁のやうになるのは、乳糜尿と云ふて糸狀蟲病に於ける唯一の症狀であるが、これは前に寄生蟲病のところに記載してある。

第二節 單純性尿崩

(原因) 不明なるが、神經病や微毒に續いて起ることがあり、遺傳の關係もあると云はれて居る。

(症候) 小便の出る量が多く、一晝夜に一斗に達することがある。それが爲めに口渴が甚しい。また皮膚は乾いて蒼白くなつて居るが、身體の工合はそれほど悪くない、若しまただん／＼身體が衰へるやうであつたならば、糖尿病を疑はねばならぬ。

(療法) 十分滋養分を攝らしめ、水分は成るべく多く、制限せずに與へて、口渴を醫すがよろしい。また食物は成るべく食鹽の量を少くする、即ち甘くすること、微毒の疑あるものは、これ

を治さねばならぬ。

第三節 糖尿 病

(原因) 本症は血液の中に餘分の糖を含む爲めに起るものであるが、その原因はまだ分らない、けれども年齢は四十才から六十才までの人に多くて、小兒や高齢の人には割合に少い、また男は女よりも多い。此病氣は遺傳の關係があり、痛風や肥胖病を患つたもの、子孫にも發し易い。その外微毒にも關係があれば、またバセドー氏病の後にも起ることがあるが、すべて座つて居つて、多く腦を使ふ人や、また甘い物を嗜むなども誘因となる、中流以上の豪奢な生活をするものに多く、其他精神興奮によつて誘發せられ、腦及び脊髓の病氣や、急性傳染病等に發し、婦人にあつては妊娠中に本症を發することもある。

(症候) 本症は肥滿して、一見強壯らしき人に來り、また初期には左程重大な症狀を呈せぬからして、格別のことも無いと思つて居る中に、だんぐ病氣が悪くなつて行くことが判る。本症の起るや、初めは食慾、食味の變狀、即ち食物の味が變つて來たり、腹が膨つたり、眩暈がしたり、頭の重いことや、逆上や不眠症など起すことがあるが、最も重要な容態は、尿に葡萄糖を混

ずることであつて、然も排尿の量は非常に多く一晝夜に三千乃至五千立方仙迷(約三升)或はそれ以上になる。比重は増大して一、〇三〇乃至一、〇四〇の多きに至る。普通健康者の尿は琥珀色を呈して居るものであるが、糖尿病者の尿は淡黄色を呈して、非常に綺麗な色になつて居る。また屋外に放尿したるときには、泡沫が澤山に出て容易に消えない。

それから本症に特有の症候は、食慾の進むことで、いくら食べても食べ飽きない。けれども身體はだんぐに瘦せて來る、また咽頭が渴いて湯水を澤山に飲む、皮膚には煩はしき癢痒がある。また處々に神経痛を發し、知覺や運動に障害を來し、女子にあつては月經不順を來し、また肺結核、喘息、陰萎、蛋白尿、四肢壞疽などを發することがある。病氣が重くなれば、糖尿病昏睡と云ふて、呼吸困難、精神朦朧、譫妄等を來し、また呼氣に芳香を帯びるに至るものである。(豫後) 糖尿病に罹ると、癒らぬと思ふ人があるが、決してさうでない、早い間に相當の手當をすれば必ず癒るものである。

(療法) 糖尿病は、他の病氣とは違つて、多くは藥だけでは癒らぬものである。即ちその原因となつたところの不規則なる生活法を改め、起居を規則正しくなし、同時に食養生に注意して、

精神を力めて安靜ならしむると、主として患者の克己心の發動に待たねばならぬ。即ち糖尿病の治療法の中最も大切なるものは大略左の通りである。

第一 食養生法

第二 攝生法

第三 藥治療法

(食養生法) 食物は一般世人が既に知つて居る通り、蛋白、脂肪、含水炭素の三つが主なる成分であるが、この三つの中で含水炭素は、最も糖になり易いから特に注意しなければならぬ。併し蛋白質即ち肉類からも糖分になるから、蛋白質も注意しなければならぬ。また六づかしいのは含水炭素の制限である、然し含水炭素は日常吾人の飲食物の中に最も多量に含まれて居る重要な養素であるから、その制限には非常の注意を拂はなければならぬ。若し不適當に制限すれば、昏睡状態に陥つて、遂に死に至るの危険が無いとも限らぬから、素人が無暗にやるのは甚だ危険であつて、醫者が一々を尿検査し、或は血糖と云つて血液の中にある糖分を検査し、また一方患者に耐容試験トレンツァンと云つて、どの位まで糖即ち含水炭素を與へてよいかといふことを検査してその分量

を定むるのである。

食養生即ち食物の中で如何なるものを用意し、如何なるものを食すべきやと云ふに、第一は含水炭素即ち澱粉食を注意しなければならぬ。これはどういふものを用意するかと云ふに、第一には菓子、汁粉其他多量の砂糖の入つたものは、殆んど如何なる場合でも禁じなければならぬ。その次には米、麥、饅頭、蕎麥、パン、芋等多大の注意を要するものである。併しこれはどの病人にも悪いと云ふわけではなく、病勢によつて其攝取すべき分量に注意すべきものである。

これに反して澱粉を含まぬもの、どんな人でも多少食べてもよいと云ふものは、青き野菜、チシャ、サラダ、小松菜、キャベツ、胡瓜の類である。

魚類はどれでも食べて宜しい、其他貝類や鳥獸の肉類等も無論食べて差支が無いものである。

それから脂肪の多い物は糖尿病者の食物として最も宜しく、鶏卵もよければ、豆腐、油揚等も多くの場合には用ゐる差支が無い。漬物等も少量なれば、殆んど差支が無い。

醬油も、調味料として用ゐるに於ては、元より差支が無いが、唯料理に砂糖や味淋を多量に入れるのは禁物である。醋やソースなどは無論用ひてかまはぬ、味噌も多くの場合用ゐるてよい。

牛乳は、人によつて違ふ場合がある。時には多量でも構はぬことがあるが、また悪いことがあるから、一般的には良否を云ふわけには行かぬ。併しヨーグルト、ケフィール、酸乳等は用ひても多くは差支が無い。

茶は、薄い番茶などならば、一向に差支が無いが、ビール、シトロン、サイダー、日本酒等はいけない。平野水や炭酸水は宜しい。

要するに各食品の選び方は、各病人によつて違ふものであるが、併し格別患者には苦痛が無く食養生が出来るものである。

(攝生法) 如何に食養に深き注意をしても、日常の不規則な生活法を改善しなければ何んにもならぬ。それで朝は成るべく早く起き、冷水摩擦、また乾布摩擦といつて乾いたタオルで皮膚を強く摩擦し、直ちに戸外に出で散歩または運動をするがよい。それから朝食を喫し、暫時休息をなしたる後再び運動に出かけるがよろしい、勿論それは輕症者に就てのことであるが、運動は極めて必要で、且つ甚だ有效なものである。適宜の運動を行ひ日常の生活を規則正しくすれば、幾分か糖の分量は必ず減るものである。けれども多くの患者は克己心に乏しく、日常自ら運動不足

を知りながら、之を實行するの決心と勇氣とに缺けて居ることが多い、或はまた一二日間は強くて之を實行しても、忽ち何等かの口實を求めて中絶し易いものであるが、運動は上述の如く、大に效能のあるもの故、是非共醫師の命令に従つて實行持續せねばならぬ。最初の數日間は、大變に疲労を感じるが、次第にその感じが減じて、反つて愉快を感じるものである。元より過勞に涉ることは慎まねばならぬ。殊に稍々重症患者に於ては特に注意しなければならぬ。

入浴は、概して至極よろしいものであるから、先づ少くとも一日一度の入浴はして欲しい場合が多い。

マッサージや、按摩なども、多くの場合には、至極結構なことである。

此外に食事の時間を一定して規則正しくすることも必要である。酒はよろしくない。また喫煙は、害こそあれ益なきもの故、これも止められたら誠に結構である。

次に職務はどうであらうか、重いものであれば、無論職業を廢めて、専心治療に従事し、少しかくなつたところで、一二年間も轉地療養でもするのは、誠に望ましい次第であるが、輕症の患者ならば、職業に就いて居つても差支ないが、唯注意すべきは、神經を余り過度に使ふことを避

けることである。また夜は十分安眠しなければならぬ。安眠せぬと翌日糖が餘計出るからして、安眠は何よりの注意である。それから非常に神経を使つたり、心配したりすると悪いから、精神の安靜は最も大切な條件である。

それから治療法の中で、家庭では出来ぬことがあるから、一定の時期は必ず相當の病院に入院しては治療を受けるがよい。尤も全治するまで、なくとも、病勢及び食物の分量や種類の決まるまで入院した方が患者の得策である。

轉地療養は多くは宜しい。海水浴場でも、温泉場でも、海でも、山でも宜しいが、どちらかと云へば、濕潤な寒冷な土地よりも、乾燥せる温暖なる土地の方がよい。そして傳地先にあつてもよく食養生や一般起居の注意を厳守しなければならぬ。

(藥物療法) 糖尿病に用ひる藥は澤山あるが素人が用ゐるに都合のよいのはジャンブルシードであつて、これを一回一、〇づ、一日三回服用するのである。それからオピウムは確に糖を減少するの効があり、最近發見されたインシュリンは最も効があると云はれて居る。また漢方にては山歸來の葉と蔓とを蔭干にせるものを刻み、これを番茶のやうにして飲まして居るが、これもな

かゝ効のあるものである。

第四節 無尿症

(原因) 兩方の腎腎が共に重い病氣に罹つたときに起るもので、殊に兩輪尿管が腎石によつて閉塞せられた場合に起るものである。その他尿道閉塞によつても起り、またヒステリーにて一時無尿症を來すことがある。

(症候) 全く尿の出ないもので、一兩日後には尿毒症を起すものである。尤も結石性無尿症にあつては、尿毒症を起すことがない。

(療法) 原病を治療することが第一の注意であつて、腎石症にあつては、外科的に之を除くがよろしい。

第五節 遺尿症(夜尿症)

(原因) 本症は、二才乃至八才の小兒に多く、時としては十五才、甚しきは三十才に及ぶものもある。その原因となるものは、不良なる教育、不適當な夕飯、糖尿病、萎縮腎、腸内寄生蟲、膀胱結石等である。

(症候) 本症は、多く熟睡時殊に就眠後二時間位のときに上圍を夢み、或は知らず／＼排尿することもあるから、就寝後二時間位に一度起して排尿させるが宜しい。寒冷や温熱も亦原因となるから、寝るときには、暑からず寒からずと云ふやうに蒲團をかけてやるのも必要の注意である。それから異様に深く眠るのもまた遺尿の原因となるから、此場合には規則正しく目を醒して排尿させるがよろしい。

(療法) 予(伊藤)の實驗によれば、アンチエメレンシンの皮下注射は、最もよく奏効するもので輕症は三回位にて全治して居る。

第六節 血色素尿

(原因) 中毒、身體の廣き火傷、他動物の血液を血管内に注射したるとき等に起るが、最も多きはマラリア、微毒であつて、此等の患者が寒冷に逢ふとき、または強行軍をなせるとき、或はまた精神上的の興奮或は過勞をなせるときに誘發せらるゝものである。

(症候) 尿は暗赤色乃至黑色にして、血色素を溶解して居る、また發作性血色素尿にあつては、發熱及び戰慄を以て起り、血色素尿を排泄し、發作は半時間乃至數時間續いて、一年以上反

復することがある。

(療法) 原因を除く、即ち病氣あるものはそれを治するがよろしく、尙ほ身心の過勞、寒冷に接するを避け、出來得るならば冬は温暖の地方に轉地して、力めて滋養食を攝るがよろしい。

第七節 腎盂炎

(原因) 淋菌、結核菌、大腸菌その他の微菌によつて起り、また外傷或は刺戟性藥品の内服によつても起る。

(症候) 腎臟部及び輸尿管部に、放射性的の痛みがあり、殊に壓迫によつて甚しくなるものである。尿は度々出たく、その量も多い。また尿は酸性にして濁り、膿汁、粘液、血液等を混するものである。その他惡寒がして熱が三十九度または四十度に昇るものである。

(療法) 靜かに臥て、局部に濕布または温巻法をなし、牛乳、米湯、葛湯、鶏卵等の無刺戟性の流動食を與ふ。なほその他の療治は一切醫師に任するがよい。

第八節 腎臟結核

(原因) 男子にあつては副睪丸、精囊、膀胱、攝護腺等にある結核から續いて起り、女子にあ

つては、喇叭管または卵巢等の結核に續いて起るもので、殊に十八才から三十才位ひの男子に多いものである。

(症候) 突然に頑固な血尿を以て始まるもので、その尿は濁つてそして壜渣に富んで居る。それから他の結核と同じやうに、夕方になると熱が出て、身體がだん／＼瘦せて行くものである。

(療法) 片方ならば早く除つて了つた方がよい。その他は肺結核と同様の療治を行ひ、カルア、グレス錠(小石川區大塚仲町三六救生藥園發賣)を毎食後に五粒づゝ服用して居るがよい。

第九節 腎臟結石症

(原因) 小兒と老人とに多いもので、坐食、肉類及び酒類の濫用、また輸尿管のすべての病氣は本病の原因となるものである。

(症候) 本症に特有の症候は、腎石痛と云つて、腎臟部にひどい痛みを發し、それが膀胱部、龜頭、腰部及び大腿に放散し、皮膚は蒼白色となつて冷く、前額に冷汗を流し、甚しきは戰慄、發熱、嘔吐、痙攣、人事不省等を來すことがある。尿には血液を混するが、甚しきは無尿症となることがある。

(療法) 根治には、外科手術によつて、結石を取るより外に方法がない。

第十節 膀胱カタル

(原因) 種々の微菌によつて起るが、殊に淋菌によつて起ることが多い。その他諸般の熱病、外傷、外科的器械の挿入、寒冒、隣接器官の炎症によつても起る。

(症候) 會陰部及び膀胱部に於ける疼痛及び尿意頻數が本症の特徴である。また尿は濁つて血糝或は膿様を呈し、時に軽度の發熱を來すことがある。

(療法) 急性症にあつては褥中に安臥するがよろしく、すべて腹部は温保し、無刺激性の飲食物を攝るがよろしい。本症には内服藥の外に膀胱を洗はねばならぬが、これは元より醫者の行ふ領分である。

第十一節 膀胱結石

(原因) 膀胱の中に、ひとりで石が出来ることもあるが、大抵は腎石が下つて來たものである。

(症候) 會陰部の疼痛、それから小便、るときに突然小便が止まつたり、または痛んだり血尿

が出たりするのが特徴である。

(療法) 結石破砕術によつて、これを外科的に除去するのが、最も確實である。

第十二節 膀胱癌腫

(原因) 多くは直腸、子宮等隣接の器官の癌腫から傳播するもので、四十才以上の人に多く起るものである。

(症候) 膀胱部に痛みがあつて、殊に排尿時にはそれが甚しい。そして血尿も出るし、また癌腫性悪液質になるのが特徴がある。

(療法) なるべく早く之を除去するがよろしく、さすれば一命を取り止むることもある。

第十五章 浮腫(水腫)

第一節 浮腫のある病氣の見分け方

浮腫とは、組織の中に水分が洩れて出る爲めに起るものであつて、その原因にはいろいろあるが、兎に角腎臟病、心臟病、脚氣、腹水など云ふ病氣のときに起り、何れも重篤の病氣である。

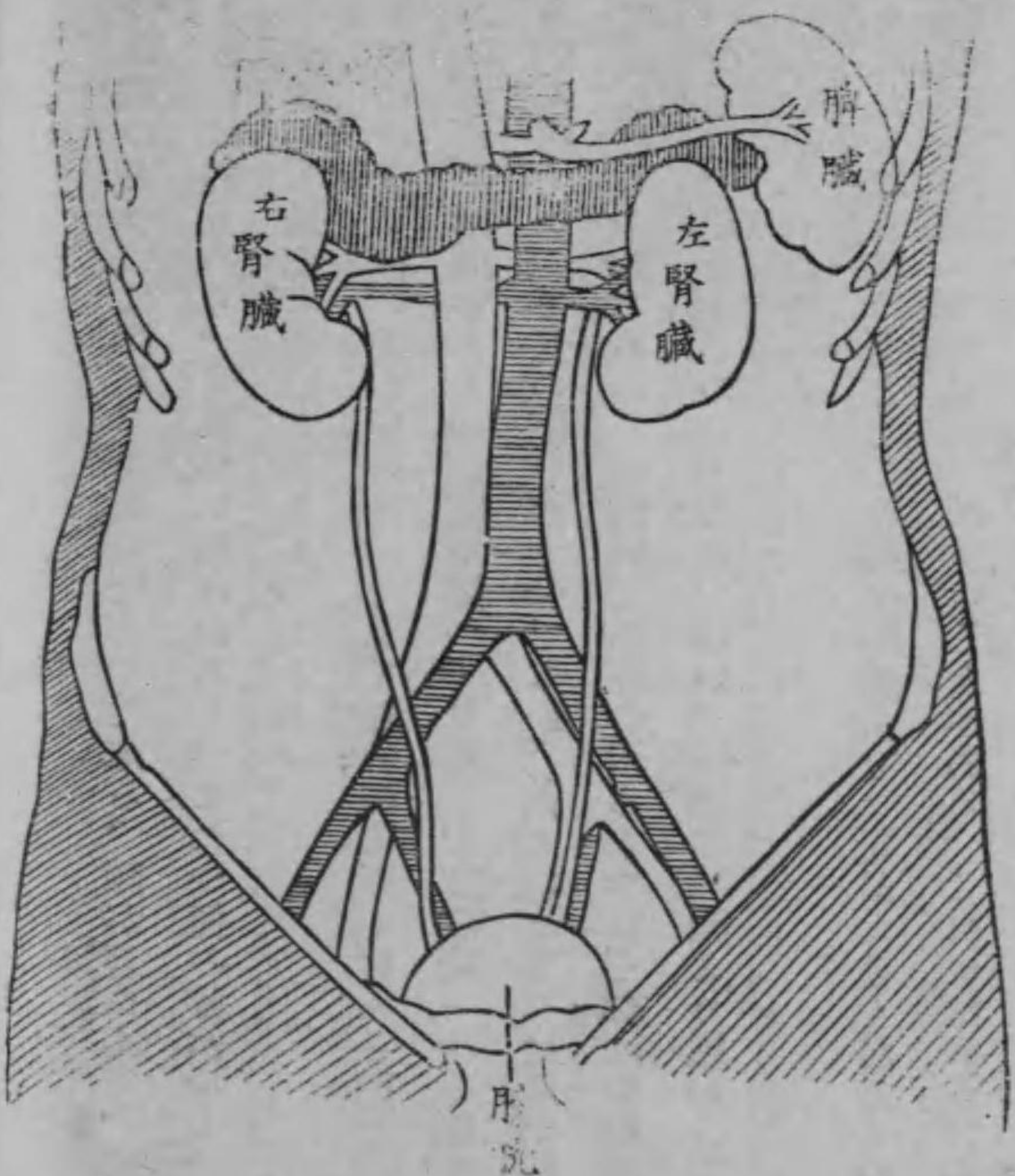
腎臟病のときには浮腫が顔から始まつて来る、顔が蒼白くて、眼の周圍が浮腫んで来る。急性のときには熱もあり、腎臟部に痛みがあり、また小便の量が少く、甚しいときには血尿が出る。尿を検査して見ると蛋白が出るものである。

脚氣のときには、足が麻痺る、そして脛骨の前面を壓すと凹む。外の病氣には決して麻痺は無いが脚氣には麻痺がある、皮膚を擦つて見ると、丁度紙一枚を隔て、擦るやうな感じがする。また運動麻痺もあつて足の運びが十分でない。甚しいときには腰が抜けて歩けなくなる。また動悸も亢ぶると云ふ風である。心臟病で浮腫の來るときはそれは餘程重いつきであつて、動悸が劇しく、少しの坂路を上るのにも容易でない。浮腫は心臟より遠いところ、即ち手の胛、足などから浮腫んで來るものである。

それから腹水は、主として腹部が浮腫んで、腹が大きくなるものである。

それから妊娠中、婦人が、浮腫むことがある。これは妊娠子宮の爲に、血管が壓迫されて下肢に浮腫が起つたならば、大事を取つて醫者に診て貰ふがよろしく、殊に、脚以外の浮腫があつて

(く除を腸し但)圖の臟内部腹



り、または麻痺があつたり
 するときには、早く醫者の
 手當を受けぬと手後れにな
 ることがあるから、注意せ
 ねばならぬ。

第二節 急性腎臟炎

(原因) 本症は諸般の傳
 染病、淋疾、膀胱カタル、
 腎盂炎等に續發し、また寒
 冒、外傷及び藥物の中毒な
 どに起るものである。

(症候) 初め惡寒がして
 熱が出る、同時に腎臟部に

痛みがある。それから浮腫を來すのと、尿量の減すのと、尿に蛋白分の出るのとは本症の主な
 徴候であつて、如何なる場合にも、その三徴候を缺くことはない。そして浮腫は顔面から始ま
 る、血色が悪く、色が蒼白く、眼の周圍が浮腫んで來るので氣が附く、家人が見て何だか顔色が
 變だからと云つて手や足を調べて見ると矢張浮腫がある。殊に脛骨の前面を壓して見ると凹む、
 それに顔面が貧血して、尿道が不足であると云ふやうなことがあつたならば、先づ腎臟炎に疑ひ
 を措かねばならぬ。此際醫者が小便を檢査すると蛋白や圓錐を見るものである。

(療法) 急性腎臟炎の養生は一口に云へば安靜温保であるから、成るべく暖かにして床の中
 に臥て居るがよろしい。藥物は利尿劑、發汗劑其他種々あるが、何れにしても素人療治の出來る
 ものでないから、必ず早く相當の醫者に治療して貰はねばならぬ。民間療法にては接骨木(芽又
 は眞皮)三匁に、水一合を入れ、五匁に煎じつめて、一日三回に分服するのが効があるから、こ
 れは醫藥と共に用ひてもよろしい。

第三節 慢性腎臟炎

(原因) 本症は多く急性症に續發するものであるが、なほ度々寒冒に罹るとか、または猩紅

熱、マラリア、微毒等も原因となることがある。

(症候) 本症は、多くは徐々に起るものであるから、久しい間本症に罹つたのを知らずに居ることがある。そして顔面には浮腫が出る。何と無く顔が腫れて居るやうな気がして、氣になるから、鏡を見ると成るほど浮腫んで居るとか、または家人に注意されるとかして初めて醫者に診て貰つて、慢性腎臟炎なることを知るものが多く、つまり格別の症候を呈しないものであるが、本症は尿量の減少し、蛋白を含むこと、浮腫が出る位のもので、症候は極些細なものであるけれども、その實なかく頑固な病氣であつて、殆んど不治の症と云つてもよろしい。體力は漸次衰退し、また皮膚の炎症或は潰瘍を起し、または尿毒症を起して、死に至るのが常である。

(療法) 本症はその経過が頗る長いものであつて、療養次第で生命に長短がある。その養生法は後に詳しく述ぶるが、主として刺戟性の飲食物を避け、成るべく淡泊なるものを用ひ、運動は嚴禁するに及ばぬが、出來得るだけ安靜にするのがよいのであるから、人並に歩行するとか、車に乗つて馳け廻るなどは宜しくない。精神も安靜なるが宜しいから、マア早く云ふと隠居様とでも云ふやうな生活をするのが何よりの攝生法である。藥物は用ゐるも宜しいが、浮腫あるときに

は醫者かも貰つて用ゐるがよろしい。

第四節 萎縮腎

(原因) 從來健康にして、牛飲馬食するものに發し、または好んで喫茶するものは、本症に罹る傾向を有して居る、その他マラリア、微毒、鉛中毒、痛風、脈管硬化症、老年等は屢々本症の原因となるものである。

(症候) 本症は、多くは陰然として發し、久しく疾苦を呈せざるが常である。そしてその症候を發するに至れば、頭痛がして、度々衄血が出、動悸が充ぶつたり、視力が悪くなつたりする、殊に尿の量は多くなつて、夜中にも一二度は起るやうになる、そしてその比重は減じて一〇一五以下となり、時としては一〇〇二に達することもある。心臓は肥大して脈搏は硬度を増して、丁度針金に觸れるやうに感ずるものである。

(療法) 藥物は殆んど不用であるから、身心の過勞を慎み、滋養に富める食物を攝り、屢々浴浴する等の外、原因に注意してそれを除くことが肝要である。

第五節 腎臟病の一般養生法

何病でもさうであるが、殊に腎臓病には養生が薬よりも大切であつて、養生の如何は直接に生命に關するやうなことがあるから、これに就て特に記述しやう。

第一は寝起きの注意であるが、これは急性症のときには、安靜溫保と云ふことが必要であるから、先づ温かくして、床の中に寝て、靜かにして居らなければならぬ。慢性症なれば強くて寝る必要のない場合が多い、併し身體を成るべく動かさぬやうの注意が必要であるが、多くは浮腫の取れたのを何時までも寝る必要はない。長く寝て居ると神経質になるからして、假令身體の安靜を保ち得るにしても、精神は不安になるからして、反つて悪影響を及ぼすやうのものである。安靜と云ふのは、單に身體の安靜のみでなく、また精神の安靜をも意味するものと心得ねばならぬ。要するに浮腫のあるときは、寝かすのは原則であつて、浮腫が取れば、だん／＼起すのであるから、急性症のときは先づ寝かす、それからだん／＼起すと云ふ風にするのである。その他起居も成るべく靜かにして、力めて心身の安靜を計るのが何よりの注意である。それから温かにして居ると云ふことも、また必要の注意であるから、寒い目に逢はせぬやうにしなければならぬ。併し温かいと云ふて、無暗に温保すると、反つて皮膚を弱くしていろ／＼の害を及ぼすか

ら、その點を考へなければならぬ。要するに腎臓病の治療法は、起居動作の注意は第一であつて、飲食物の注意は第二、藥物療法はその次に位するものである。

(食養法) 飲食物の注意、即ち食養生の大體を述べて見ると、一概には云へぬが、一般に通じた注意としては、すべて腎臓を刺戟する食物は避けなければならぬ。即ち鹽辛き物、藥味の類等は禁物である。その次に多少注意して與へなければならぬものは肉類である。尤も絶たなければならぬのではないが、多少注意を加ふるか、または制限しなければならぬことが往々ある。すべて病人は營養を良くする爲めに、多少の肉類や卵を食べるのは習慣であるが、此點は大に注意しなければならぬ。

食鹽は浮腫と關係あるもので、食鹽中に鹽の分量を増すと、浮腫が増して來る、食鹽の量を減すれば、従つて浮腫も減る場合が多い。また蛋白を澤山含んで居る食物、即ち肉類などは、尿毒症を起す原因物に變じ易いからして、腎臓病には肉類を澤山に與へてはならぬのである。

鶏卵も澤山は宜ろしくない。生卵を澤山に食べると、健康人でも輕微の蛋白尿が出ると云ふので卵を忌むのである。併し肉や卵を全然廢めさせる必要のない場合が多い、即ち多くの場合少し

食べさせるのは差支がない、殊に鶏卵は半熟にでもして食べ、一日二個や三個は何等差支のない場合が多い。

牛乳は、腎臓病患者の適食には違ひはないが、牛乳でなければならぬと云ふのは全然間違ひであつて、殊に我日本人にありては牛乳よりも米湯、葛湯、お粥などはどの位良いか判らぬ位であるから、外の食物を腹めてまでも飲ませる必要はない。殊に牛乳ばかり與へると、イヤな症状が起るからして、本人が好きで飲むなら格別、さもなければ強めて飲ませる必要はない、田舎などに行くとき、今でも牛乳でなければならぬやうに心得て居る舊式の醫者があるから特に注意をして置く次第である。

果物は一般によく、野菜も牛蒡、獨活、芹などの刺戟物を除けば大抵はよろしい、米は粥にしても、また御飯にしても何れも至極結構であるから、必ず米を主食とするがよい。酒は何種にしても申すまでもなく悪い。

此外に尿毒症の場合には、飲食物に非常に注意を拂はなければならぬ。殊に急に尿毒症が起つた場合には、米湯や牛乳の如き流動物に限るが、場合によつては牛乳を與へられぬこともあつ

て、唯果汁と砂糖水、炭酸水、平野水等少量を與へるに止まることもある。此際殊にスープはとろしくない。

萎縮腎にあつては、飲酒、喫煙、藥味等を避け、肉類を控へ目にするだけでよろしい。咽頭が乾くならば、湯水を飲んでも宜しいが、大量を一遍に飲まずに、少量づつ、度々飲むがよい。

ソップは注意を要するもので、若し飲むなら野菜ソップの方がよろしい。また肉類中罐詰、乾物、味噌漬、ハム、野獸の肉等は宜しくないから、先づ禁物と心得ねばならぬ。

以上述べたる事柄に就て、その要點を綜合すれば、大略次の通りである。

第一 心身共に成るべく安靜にすること。

第二 寒氣、濕氣を避け、成るべく温かにすること。

第三 身體殊に皮膚、口中等を清潔にすること。胃腸、便通を常に調整すること。

第四 飲食物中、香辛類殊に胡椒、芥子、生姜、ワサビの類、また鹽辛きもの及び多量の肉類殊に野獸肉の攝取を慎むこと。

第五 牛乳、野菜類、果物、米、パン等は良好なる飲食物と認むることを得る場合が多い。

(原因) 俗に心臓病と云ふのは、この瓣膜病のことである。それには種々の種類があり、またいろいろの原因もあるが、リウマチスからして心内膜炎を起し、その結果として本病となるものが最も多いもの故、リウマチスは恐るべき病氣である。

(症候) 心臟瓣膜病に罹ると、心臓の部分即ち左りの乳房のところが膨隆の傾きがある、殊に子供の心臓病なれば、此處が著しく突出するものである。それから手足はチアノーゼと云ふて、青紫色のイヤな色になる。心臓の部分の動悸が亢まつて、見ただけで判るやうになり、時としては心窩に動悸がすることもある。心臓に手を當て、見ると、ガラ／＼と猫の咽喉を鳴らすやうな音が手に觸ることがある。また手や足の靜脈に鬱血することもある。

以上の症候は、病氣が重くなつてから起るところの症候であつて、初めは心臓病と判らずに経過する、唯何となく食物の消化が悪いやうな感じがあつて、頭痛がしたり、眩暈がしたりするのが始めて醫者にかゝり、診察を受けて初めて心臓病と分ることが多い。そして通常心臓病と命名されてから、患者の訴ふる症候は、少し運動すると動悸が亢まる、呼吸が切れる、呼吸苦しくなる。

る。喘息にでも罹つたかのやうにヒドク咳嗽が出る、胸に痛みがあり、或は心臓に狹窄するやうな痛みがあり、心窩の處に痛みを起すこともある。また時として關節や筋肉にリウマチスのやうな痛みを起すこともある。そしてだん／＼に甚しくなると浮腫、是も心臓から遠いところの足の胛に始めは浮腫出し、次に手の先きや顔面が腫れて、腹に水が溜まつたりする。また鬱血と云ふて、身體の處々に血が滯るから、外からよく見ゆるところは口唇、鼻翼、兩頬、爪の先きなどで、此等は紫色になる。体内には鬱血が心臓内に起るは勿論、肺、肝臓、腎臓、胃腸等にも鬱血する。肺に鬱血すれば咳嗽、喀痰等氣管支カタルの症狀を呈し、肝臓に鬱血すれば黄疸を起し、腎臓に鬱血すれば利尿少くなり、胃腸に鬱血すれば食慾が振はず、嘔吐、便秘または下痢を起すやうなことがある。

以上述べた症候だけで終ればまだしもよいが、若しエンボリーを起すやうなことがあつては實に恐るべき結果を來すものである。一體瓣膜病に罹ると、血液の循環が悪くなる爲め、此處彼處に血栓と云ふて血の凝りが出来る。それは或は心臓の中にも出来ることもあれば、或は靜脈の中にも出来ることもあるが、殊に多く下腹の靜脈の中にも出来るものである。この血栓はよし出來たにし

ても、その出來た處に附着して居る間には、さしたる障はりも無いが、その中の一部分が剝離して、血液に循環して細小の血管に至り、茲に止まれば即ちエンボリー(栓塞)を起したもので、これが肺にヒツかれば肺のエンボリーとなり、腦に行けば腦のエンボリーで、此場合には恰も卒中と同じやうの症状を呈して卒倒し、また後に半身不隨の症候を残すものである。また神経系統の障害としては、腦エンボリーの爲めに軟化を來すこともあれば、また眞に腦に出血を來すこともある。これは殊に大動脈瓣閉鎖不全の爲めに、血液が多く腦に行き、遂に血管が破裂して出血するものである。その他精神障害としては鬱憂症と云ふて沈鬱に陥ることあり、また瓣膜病の経過中にリウマチスの如き關節の疾患を發することもある。

(養生法) それから今度は瓣膜病に罹つたら、どういふ風に養生すればよいかと云ふに、一言にして云へば、代償機能を失はぬやうにすることである。代償機能とは、心臓の一部に病氣があつても、心臓の他の一部分が平素より多く働いて障害を起さしめぬやうにすること、これを守るには、第一には營養療法である。消化れ易い滋養に富んだ食物を程よく攝り、かりそめにも暴飲暴食することなく、食事の時間は一定して間食せぬやうに注意せねばならぬ。心臓の働き正し

く、よく働いて居れば、少し位の故障があつても代償機能を失はぬが、身體が衰へると、病氣の方は反對に強くなり、心臓が衰へて代償機能を失ふもの故、常に滋養物を攝つて補ひを附けねばならぬ。また平常滋養物を攝つて居れば、よし代償機能を失ふやうなことがあつても、それにより十分恢復して行く事が出来るが、若し滋養物の供給がなくて身體が衰へ、代償機能を失ふやうでは、恢復が出来ぬから、何れの方面から見ても、營養療法は第一の攝生法である。

次には心悸亢進を來さぬやうに、最も注意を要する。これには劇しい運動は勿論、飲酒、二事過度、刺激性食物即ち唐辛子、胡椒、ワサビ等の刺激性食物を避け、熱い湯に入浴することも慎み、精神は常に平穩無事を保つやう、少し位氣にかゝることを見聞きしても、眼は素通しの眼鏡なり、耳は音響の容物なりと觀念して、心の平和を取り亂さぬやう、力めて心身共に安靜なるがよい。そして若し少しでも異常即ち浮腫、心悸亢進等があつたら、素人療治は出来ぬから、速に醫療を受けて、動悸を静め、利尿の途を講ぜねばならぬ。また胃腸に鬱血を來せしめたため、消化不良を來せる場合には、血行を良くする薬を時々用ひて、腸胃の鬱血を取るやうにするのも一つの注意である。

それから今度は、心臟病に罹れば、生命にかゝるか、かゝらぬかと云ふに、元來心臟病に罹れば、心臟は常より肥大して代償機能を奪む、即ち血行の悪しきを補ふ爲めに肥大するのであるが、それは元より限りのあるもの故、甚しくなると、遂に疲労して、遂には心臟麻痺に陥り、頓に死することがある。實に何時變化があるか分らぬものであるから、その覺悟で居らなければならぬ。併し心臟病に罹つたからとて、皆々そのやうであるとは云へぬ、病が軽く、攝生が良ければ、五年も十年も、二十年も三十年も生きて居る人も珍らしくない。

此病は、女は分娩と云ふ大役がある故、男子よりも危険の度が強いが、中には三人や五人の子供を産んで平気で居る人もある。要するに代償機能を失はぬ間は故障が無い、されば一旦不幸にして此病に罹つた以上は、六づかしい學問や、六づかしい事業は、皆々代償機能を失する基故、此等には適せぬものとあきらめて、世間の刺戟少き田舎に靜養するのは天命を保つ所以である。そして平素は動悸の出ない程度の運動を試み、ブラ／＼歩きなどは元より差支が無く、朝夕の冷水摩擦なども差支がない、海水浴は無論嚴禁で、海岸の散歩も人によりては注意せねばならぬが、山地や温泉場に轉地して、餘り熱くない湯に、一日一度位入るのはよろしいことで、冬季などは

箱根邊、夏ならば日光、鹽原、伊香保、輕井澤が適して居る。

それからまた未婚の男女にて、本病に罹れる場合には、結婚は考へものであるから、此場合には、然るべき醫師の診断を受けて、結婚に堪へるか否かを檢べて貰ひ、その意見に従はねばならぬ。

(療法) 瓣膜病に於て、代償機能を失せざる間は、特別の治療を要せない。前記の攝生法を守り、また炭酸浴、電氣浴等を試みるのである。若しまた代償機能を失したる場合には安靜に平臥して醫療を受くるがよろしく、この際に用ゐる薬は何れも細心の注意を要するものである。

第七節 脚氣

(原因) 脚氣は、數多の末梢神經に於ける變性的炎症によつて發生するところのものであるが、その眞の原因はまだ不明である。けれども米食と何等かの關係を有するもの、如く思はれる。本症は季節に大關係があつて、春の末から夏にかけて最も多く、冬は一番少く春と秋とはその中間になつて居る。それから本症はどんな人に多いかと云へば、年齢ならば壯年者、居常坐食する人に多く、また心身の過勞、暴飲、暴食、寒冒、營養不良に發し、腸チフス、赤痢、微毒、

脊髄疾患に併發することがある。一般に男子に多きも、妊娠、産褥中の婦人はそれに罹り易くなるばかりでなく、割合に重き脚氣に悩むものである。

(症候) 一と口に脚氣と云ふても、それには良性もあれば、悪性のものもある。また軽い脚氣もあれば重い脚氣もある。此關係に於て、醫學上には之を三種に區別して居る。第一は乾性萎縮性脚氣と稱し、俗に麻痺脚氣と云ふものである。その初期には手足に麻痺を感じ、次で手足の疲勞を覚え、漸次身體は倦怠くなつて来る。そして病氣が悪くなると、少し身體を動かしても息切れがしたり、動悸がして脈搏は八十以上に至り、胸若しく手足に寒冷を感じ、麻痺は漸次上方に昇つて、膝關節から大腿に傳はり、大胃から腹部に至り、甚しきは歩行することさへ出来ぬやうになつて、大小便まで一々人の世話になると云ふ、誠に悲惨な有様になつて行くのであるが、此種のもは良性であるから、大抵は癒るものである。

第二は、濕性水腫性脚氣と云ふて、女子に多いものであるが、これに罹ると、身體が浮腫んで、顔色は蒼白くなり、身體は殆んど血色を失ひ、大小便とも不通であつて、常に頭痛、眩暈、呼吸促進、全身厥冷等を來すものであるが、病勢が衰へて水腫が消退すると、漸次に身體が瘦

せて來るものである。

第三は、急性の悪性脚氣で、甚だ危険なものである。これは健康者に突然發して心悸亢進、胸若しく、呼吸迫はしく、脈搏頻數、顔面汚穢蒼白色等の諸症候を呈して、多くは苦悶中に斃るものである。

(豫防法) 本症は一度罹ると、兎角毎年起きたがるものであるから、成るべく未發に豫防する方法を取らねばならぬ。殊に他の地方に轉住せる人にあつては、此注意は尙更必要である。豫防としては暴飲暴食を慎み、成るべく滋養分の多いものを攝り、清潔にして高燥なる住居に起居し、適當なる運動を營み、足袋は一年中用ひた方がよろしい。それから毎日便通があるやうに注意し、御飯は米麥飯または半搗米を用ゐるがよい。

次に轉地療養、毎年脚氣に罹る人は、その季節になつたら、早速高燥の土地に轉地するがよい。殊に他國に居る人にあつては、産れ故郷が一番に宣しいものであるから、遊學中の學生などは、脚氣季節になつたならば、早速郷里に歸省するのが何よりの豫防法である。

(養生法) 脚氣患者の養生法として守るべきは心身の安靜であるから、成るべく安臥して居る

と宜しい、昔から脚氣の者は跣足で朝露を踏むと良いと云ふ俗説があるが、飛んでも無い間違ふことで、甚だ悪いことである。それからよく人のやる入浴、あれもいけない、殊に水腫性のものには大毒である。その他運動は一般に禁物であつて、運動すると、爲めに呼吸困難、心悸亢進等を來し、甚しきは良性症より悪性に轉じて、無慘を遂げた例はいくらもあるから、軽いからなど云ふて、閑に任せて無理な運動をしてはいけない。飲酒や房事の悪いのは無論のことであつて、食事も牛乳、パン、麥飯、半搗米を主として用ひ、不消化物や多量の飲料は禁物である。

脚氣に罹つて居る人が轉地する場合には、一段の注意を要するものであつて、一般に熱のある場合や、脈搏が八十以上に昇り、また呼吸数の二十四以上に増加せる場合には、轉地は絶対に禁物であるから、決して此禁を犯してはいけない、若し此禁を破つて慢りに轉地を強行すると、遂には衝心などを起して、不幸の轉歸を取るに至るものであるから、くれぐれも注意を要するものである。また輕症にして轉地に適するときであつても、汽車汽船等にも乗るときには、決して一日に長途を旅行してはいけないやら、平素の一日程を數日に分け、早く旅宿に着き、十分静養して後、また翌日に至り、その日程を取ると云ふ風にするのが肝要である。

(療法) 脚氣の重いのは、無論醫受を受けねばならぬが、軽いものは硫苦劑(稀鹽酸二、〇硫苦二〇、〇水二〇〇、〇右二日分一日三回分服)を服用して便通を利せしむるがよい。若しそれを服用しても通じが無かつたならば、この二日分を一日に服用するがよい。それから脚氣に醫者の賞用するものは、ヅキタミンBで、それには注射用ウリヒンを始め澤山あるが、素人用には糠エキスがよい。然しこの製法は面倒であるから、糠を煎じて用ゐてもよい、即ち無砂搗の糠一合に水二合を入れ、永く文火で煎じて、一合位に煎じつめたものを布片で漉し、一合を二日に用ゐるのである。それから豫防用及び治療用に都合のよいのはカルピタミンであつて(小石川區大塚仲町三六救生藥園發賣)豫防用には毎食後三粒、治療用には同じく五粒づつ、を一日三回用ゐるのである。また民間療法には野薔薇の根七、〇を煎じて用ゐるか、またはその實四、〇を粉末にして一日三回に分服するのがよろしい。

脚氣の重いのは無論醫者に罹らねばならぬ、また麻痺の残つたものには、ストリヒニンの注射がよく利くものである。

第八節 乳兒脚氣

(原因) 脚氣に罹つて居る母、または乳母の乳汁にて育てられた乳児には、脚氣を發することがある。此の場合に授乳者の脚氣が重症なるときは、その乳児の脚氣もまた重症である。けれども授乳婦人の健康なるにも拘らず、乳児の脚氣に罹ることがあつて、後に至つて授乳婦人に脚氣症狀を呈することがある。また時としては、乳児脚氣の重症なるにも拘らず、授乳婦人の脚氣は甚だ輕症なることがある。

(症候) 多くは吐乳に始まり、吐乳は一日一回乃至二回なることあり、または數十回なることもある。けれども吐乳の割合には、營養は甚しく侵害せられない。患兒の機嫌は悪しく、頻りに涕泣し、皮膚蒼白色となり、一般に不活潑となるものである。音聲は嘶嘎れ、手背、足背に浮腫が出で、口唇、鼻尖に紫藍色を呈し、尿利大に減少し、便は下痢または秘結する。呼吸や脈搏は微弱となるが、かくの如き、消化不良症に於けるが如き症狀は増悪するときは、益々衰弱するに至るものである。發熱は必ずあると云ふわけではない、假令熱があつても高熱はない。また病勢が増進すれば、固有の失聲を來たし、時としては無聲に陥ることがある。その他動悸が充ぶり、呼吸苦しい等の容態を呈する等、大人の脚氣に類似の徵候を來すものである。

乳兒脚氣は、人工營養法によつて養育せらるゝ乳児には起ることがない。また既に本症を發せるものにあつても、授乳を停止すれば大抵は癒るものである。けれども適當の時期に乳を離さなければ、衝心性脚氣となつて遂に死に至ることがある。

(療法) 脚氣病のある母、または乳母の乳汁を嚴禁して、これに代ふるに健康者の乳汁若しくは牛乳を與ふるがよろしく、それと同時に母または乳母の脚氣を早く療治して快癒せしむることが大切の注意である。一般に人工營養は、母乳の即ち天然營養よりも劣るものであるから、授乳者の早く癒ると云ふことは何より必要のことである。また本病に用ゐる藥物は、必ず醫師の指揮を受けなければならぬ。

第九節 腹水

(原因) 腹水の原因はいろいろあるが、門脈鬱血によつて來ることが最も多く、また心臟や肺臓の病氣の爲めに、全身の循環に障礙を來したるとき、または腎臟炎、癌腫、肺結核等の如き、衰弱を來す病氣の隨伴症狀として來るものである。

(症候) 腹腔内に液體の溜まる病氣であつて、多くは熱がない、尤も液體が一千グラム以上溜

まらなければ外から分らぬが、多量に溜まれば、腹部は膨大し、臥位によつてその形を變ずるもので、仰臥位にあつては、前面扁平状となり、側臥位にあつては、その下方が膨隆し、また起立すれば下腹部が著しく膨滿するものである。そして皮膚は緊張して光澤を呈し、下方にありては皮膚に龜裂を來す、臍は無くなることが多いものである。また腹水が多くして長きに亘るときは、皮下靜脈は怒張して蛇行状となり、また屢々腹壁、下肢及び陰部に浮腫を來すことがある。(療法) 強心劑、利尿劑、發汗劑或は下劑を投じて、その液水を排泄するに力め、また場合によつては局所に穿刺を施して滲溜液を排出するがよろしい。然し多くはまた忽ち溜まつて再三之れを繰り返さなければならぬものである。

第十六章 痙攣及卒倒

第一節 ヒキツケル病氣の見分け方

ヒキツケルと云ふことは、一つの病氣でなくして、或る病氣の容態の一つであつて、最も多いのは腦や腦膜または脊髄の病氣であり、また子供は高熱や腸寄生蟲があれば、よくヒキツケルも

のである。

その外にヒキツケル病氣は澤山あるが、先づ大人に最も多いものは、癲癇であつて、これはひつくり反つて泡沫を吹く、大人に熱が無くしてヒキツケルものは癲癇と思ふてよろしい。それからヒステリーでもヒキツケルかこれは婦人に多く、ヒキツケてもほんとうに意識を失はない。それから恐水病でもヒキツケルが、これは犬に咬まれたと云ふ既往症があり、それに水を飲むことが出來なくなるから判る。それから流行性腦脊髄膜炎にあつては、熱が出て、そして頂が堅くなると云ふ風であり、脊髄炎にあつては、少しの物音でもすぐそれが障ると云ふ風である。

それから破傷風と云ふ病氣は身體が強ばつて來るものであり。腦出血にあつては、そのあとで半身不隨を來すものである。また小兒に多いのは腦膜炎である。また腦充血腦や貧血でも一時卒倒することがあるが、これはほんの一時のものである。

第二節 癲癇

(原因) 本症は七才乃至二十才頃までに初めて發するもので、間々遺傳となつて現はれることもあるが、また神經衰弱、ヒステリー等の神經性疾患を患ふ家族にも見ることがある。その他兩

親の飲酒、微毒、難産、頭部の外傷、精神感動等が原因となることもある、また鼻腔、咽頭、耳内の真菌、腸寄生蟲、子宮轉位、妊娠等の爲めに反射的に發することもある。

(種類) 本症には輕症癲癇、重症癲癇、類似癲癇の三種の區別がある。

(症候) 輕症癲癇は、眩暈がして、談話或は遊戯の際、突然これを中止して、一時虛神の状態に陥り、間も無く醒めて、再び業務或は談話を持續するものである。また街路を歩行するに當つて、俄然その神識を失ひつゝ、なほ歩行を繼續して他人の家に至り、或は目的とせざる場所に至りて始めて醒覺し、どうして此處に來たのかと、自ら呆れて居るなど云ふのは間々あるのである。

重症癲癇の起るときには、種々の知覺異常、嘔氣、心窩苦悶、皮膚の蒼白及び厥冷、耳鳴、幻覺其他の前驅症狀が起り、それに次で患者は俄然神識を失つて卒倒し、顔面と全身の皮膚は蒼白となつて強直痙攣を來して、數秒の後には、眼球を廻轉し、齒牙をガツ／＼鳴らし、泡沫を吹き出し、時としては自ら舌を噛みて傷めることもあり、瞳孔は初め開大して後に縮小し、光線を見ても反應なく、暫時の後には昏睡状態に陥るものである。此發作は十秒乃至五分間位持續して

後、徐々に覺醒するが、その發作の回数は種々で、一日一回なこともあれば、或は二三回なることもあり、また一年に二三回のものもあるが、發作の頻回なるものにあつては、一發作を終らざるに早くも第二の發作を來し、常に癲癇状態に居るものもある。

類似癲癇は、患者は一時神識を亡失して、放火、殺人等の重罪を犯し、醒めて後少しも知らぬこともある。また強度の精神興奮、驚愕、恐怖等を發作性に來して、或は突然前方に走り、或は環狀に旋轉するなど、種々運動機の變調を來すものであつて、醫學上には頗る興味はあるが、社會的には危険なものである。或る精神病學者の如きは、ナポレオン其他非凡の豪傑と稱せらるるものは、多くは癲癇患者であつて、彼等のなせる處の常人の企圖し能はざる大偉業は、皆癲癇發作中の事業であると云つて居る。

又水癲癇と云ふて、水を見て起るものと、火癲癇と云ふて、火を見て起るものもあるが、此等は唯その起る機會が異なるだけで、その實は同様のものである。また癲癇の晝間に起るものと、夜間に起るものにより、晝間癲癇、夜間癲癇と區別するが、晝間癲癇は夜間のものより多く、また夜間癲癇は夜間のみ起るから、久しくその發作のあるを氣附かずに居ることもある。

(豫後) 癲癇發作の爲めに、直接に死を招くやうなことは甚だ少く、百人に一人も無い位であつて、然もそれすら大抵危険な場所です倒した爲めとか、即ち水夫の患者が卒倒して川中に陥つたとか、鑛夫の患者が卒倒の際、岩石に頭部を打つた爲めに、腦震盪を起して死んだと云ふやうなことである。癲癇は斯く生命の上には大して恐るべき病氣でないけれども、病氣そのものは甚だ頑固で、全治することは誠に少い、従つて豫後は一般に不良と云ふことになつて居る、殊に統計上癲癇患者は、他の精神病者のやうに、普通人よりは著しく短命であることは、無暗に生命上の豫後に關して樂觀すべからざることを證明して居るものと云つてもよい。反射的癲癇、例へば腸の寄生蟲及び癩痕等に因るもの、または症候的癲癇例へば腦の腫瘍に因るものは、原因たる所の病氣を除けば、多くは治するものであるから、眞性癲癇に比して豫後佳良の場合が多いものである。

(療法) 癲癇の治療法としては、原因の明らかなるもの、例へば腦の腫物等には、外科的に頭蓋骨に孔を開けて腫物を取り去るがよろしい。

(電氣療法) これは俗用に便利なるは感傳電氣である。導子は廻轉導子として、布のところを

よく濡らし、その一個を患者の手に持たせ、一個を頂部、背部、肩胛部に當て、廻轉摩擦するのである。その時間は大抵十分乃至二十分間で、電流の強さは患者によく感じて、然も刺すやうにピリ／＼しない程度がよい。電氣療法は一般血液の循環をよくし、營養をよくして、且つ有毒産物の停滯を防ぐため、本病にも有効のものとせられて居る。

(水治療法) 微温湯若しくは冷水に浸した手拭で、強く上半身を摩擦し、次に下半身に及び、最後に乾いた手拭で全身を拭ふのである。或はまた十五分間背部に冷水を如露にて雨状に灌ぎ、兼ねて同時に瀧のやうにドウ／＼と灌ぎ、約三十秒間胸部にも冷水を注ぐのが賞用されてゐる。

ローゼンベルグ氏は、華氏九十三度乃至九十五度の全身浴を毎日一回十分間宛することを勧めて居る。同氏は百十三度若しくは百十八度の温湯の中に十五分間位で、肩から以下の腕を浸すのが効力があると云ふて居る。

またフォイジン氏法と云ふのがある。それは中等度の温浴から始めて、漸次湯の温度を低めて行き、凡そ八十度に達したならば、三日程その温度で入浴せしめ、そしてまた漸次その温度を高めて行つて、恰度患者の身體に適當した、氣持のよくなつたときに、入浴の時間を短くするので

ある。此の時間は一回五分乃至十五分であつて、此等の方法は何れも血液循環を佳良にして、營養を増進し、兼ねて身體中に停滞せる有毒産物を排出する目的に外ならぬのである。

(藥物療法) 癲癇に効力のあると云ふ藥物は、その數幾百種にも及んで居つて、その多いことは結核の藥物にも優るほどである。併し乍ら斯く有効藥物の多いと云ふことは、また一面に於いては、真正に有効なる藥物の無いことを證明せるに均しいもので、悲しいかな、吾人は未だ癲癇の眞の特効藥あるを耳にしない。それで癲癇に効力ある藥物中、現今最も多く用ひられ、殆んど特効藥であるかの觀があるものはプローム劑である。併しプローム劑は、唯癲癇の發作に對して偉大なる効力があるのみであつて、癲癇そのものに對しては、何等の效果も無いものであるから、若し服藥を中止すると、永く消失して居つた發作は、再び現れて來るのが多いものである。

プローム劑の中で、最も汎く用ひられ、且つその効力の優れて居るのは臭素加里である。その他臭素ナトリウム、臭素アンモニウムなどもまたこれに次で汎く用ひらる、藥劑である。臭素加里の用量は、大人の癲癇患者には一日量三グラムから六グラム位が普通で、八グラム以上になると中毒を起すと云はれて居る。併しこれは大體の用量であつて、人各々異つた體質を持つて居る

やうに、藥に對しても非常に過敏で、少量にて容易く中毒を起すもの、また中々抵抗力が強くして、大量を連用しても平氣で居るものなどがあるから一樣に云はれないが、婦人や矮小の男子は普通の男子よりもその量を稍少くし、また身體の偉大な人には、稍大量を與へるも差支が無いわけである。プローム劑を内服として與へるには、胃を刺戟する虞れがあるから、成るべく薄く溶かして水藥となし、且つ重曹、苦味丁幾の如き健胃劑を共に與へるがよろしいのである。

プローム劑を用ひ始めたなら、途中で止めるのは甚だよろしくないから、必ず一二年間は持續して用ひなければならぬ。然るにプローム劑は之を服用しても體外へ排泄されることは甚だ徐々であるから、身體の中に澤山蓄積して、中毒を起す虞れがあるから、素人が調劑して服用するには随分慎重の注意が必要である。

プローム劑の中毒を起して來ると、最も多く現はれるのが、プローム疹と云ふ、豌豆または小豆の大きさもある赤い隆起した發疹が身體中に出來ることである。また思考力の衰弱、記憶力の減退、身體筋肉の疲勞感、反射機能の減弱、食慾減少などは屢々起つて來る。甚しきは嗜眠若しくは昏睡状態に陥るものもある。

ブローム劑を用ひるときには、必ず日常取るところの食鹽の量を減する必要がある。即ち鹹味の多い物は絶対に食はぬやうにせねばならぬ。これは身體の中からブロームを驅逐して、己れがこれに代る作用がある爲めに、折角服用したブロームも、大量の食鹽を取れば、これが爲めに體外に驅除せられて効顯を呈せぬところから、之を防ぐ目的に外ならぬのである。此食鹽の量を減じて、ブローム劑の効力を十分に現はさうと云ふ目的で、近時セドブロールと云ふ藥劑が出来た。その他ブローム劑にはプロマリン、プロムラールなど種々新劑がある。またブローム劑以外の藥劑ではカルビタミン錠(小石川區大塚仲町三六救生藥園發賣)がよろしい。これは一日三回毎食後に三粒づゝ服用するのであるが、これはブロームのやうに蓄積作用を呈することなく、然も神經の強壯藥をも含んで居るから、この方はブローム劑よりも實際に有効であるとして賞用する人が多くなつて來た。

第三節 狂犬病(恐水病)

(原因) 狂犬に咬まれた爲めに起るものであるが、また咬まれなくとも、嘗められた爲めにも起ることがあるから、犬に手を嘗めさせるなどは速に廢すべき惡習である。

(症候) 潜伏期は不定であるが、咬傷が頭に近いところほど短い。本症の全経過は前兆期、恐水期、麻痺期の三期に分つもので、前兆期にあつては、頭痛、不眠、全身倦怠、精神の鬱憂を來し、次で本症の主徴なる恐水期に入り、一種固有なる強直性痙攣發作によつて嚥下作用を營む能はず、遂には單に水を思ふても、その發作を來すに至るものである。最後の麻痺期は、全身の麻痺症狀の増進によつて、幾干もなく死に至るものである。

(豫防法) 狂犬に噛まれた場合には、速かにその創傷の上下を堅く縛つて醫師に處置して貰ふがよい。唯此處に注意すべきは、狂犬毒は他の毒とは違つて石炭酸や昇汞は効が無いから、必ず二名クレオリンか、クレゾールを用ひなければならぬ。また橙の汁でもよろしい、これは醫師が心得置くべきことである。

豫防注射は、北里研究所式では十八回、押田式では十回で完了するが、何れでもよろしい、然し何れをやるにしても、必ずこれだけの回数をやらぬと免疫力が出ぬから注意を要する。

(療法) 既に症狀を發せるものは、如何にしても治療の方法はない。

第四節 流行性腦脊髄膜炎

(原因) ワイヒゼルバウム氏の、メンゴコツケンによつて起るところのものである。此微菌が鼻咽喉より或る動機によつて侵入し來り、これが腦膜に達すれば、此處に炎症を起して、恐るべき重患を起すものである。そして軟腦膜に膿性で、石鹼汁の如き滲出液が出て、次で脊髄膜にも同様の變化を來し、また腦室内にも膿性液が滯溜して來るのである。此微菌は細胞外にも無論存在するが、主として細胞内にあるが故に、細胞内重球菌の名を得たのである。

本病は元來小兒病の一種であつて、百人の患者中八十人は十才以下、二十五人は哺乳兒に起ると云ふことである。また本症は多く集合生活の處に流行するものである。

(症候) 本症の定型的のものは、多くは二日間の前驅期がある。そして此期には全身の違和、不安、惡寒、軽度の頭痛、頸痛があり、その他既に四肢に牽引性の痛みを感じるものである。斯くの如き症状が約二十四時間乃至四十時間も續くと、急に頭痛が劇甚となり、眩暈、嘔吐が加はり、音響、光線を嫌ふやうになり、惡寒増惡して戰慄を來すに至り小兒にありてはヒキツケルこともある。

患者は不安にして睡眠せず、然れども一二日間は、なほ意識は明瞭である(甚しきものは直ちに瀉濁するものもある)頭が自ら後方に引張られ、頸痛の劇烈なるを訴える。熱は初め三十九度を出ないが、後には四十度前後に至る、尤も種類によつては極軽い熱しか出ないこともある。次で頭痛は益々劇しくなり、頸、背、四肢の筋肉が強直を來し、頭部は後屈して、軀幹と直角をなすほどになるものである。脊柱は前方に弓狀に曲るからして、極めて幼弱なる小兒にては、後頭と臀部とが相離るゝこと遠くないものである。そして皮膚及び筋肉に觸るれば、直ちに劇痛を起し、讒語を發し、意識は全く瀉濁するに至るものである。

(豫後) 先づ患者の四〇乃至五〇%は死亡するものであり、また時としては八〇%にも達して、甚だ恐るべきものである。

(療法) 本症は法定傳染病、即ち警察に届出をする病氣であつて、無論素人療治は出來ぬ。また腰椎穿刺によつて、早期に腦脊髄液を排除すれば、大に病の豫後をよくするものである。

第五節 破傷風

(原因) 破傷風菌によつて起るところの傳染病であるが、此微菌は、土壤、塵埃、牛馬の糞便の中にあつて、そして人體の創傷から入つて來るものであるから、怪我した人の傷、産婦にあつ

ては子宮粘膜炎の損傷、初生児にあつては臍から微菌が入つて、本症を起すものである。

(症候) 多くは微菌が入つてから、五日乃至十日位経つと、頭痛、四肢の痛みがあり、怪我した場所が痛んで来て、何となく不安となる。これが即ち前驅症である。それから間もなく今度は強直が起つて来る。身體が強ばつて動かなくなる。咀嚼筋殊に咬筋に疼痛性强直痙攣を起して、口を開くことが出来なくなる。即ち牙關緊急が起つて来るので、物をいふことも出来なければ、物を食ふことも出来なくなる。次で顔面を始め、頂部、軀幹、四肢の筋肉等も同様の痙攣が起つて、少し誰かに觸れられたとか、甚しきは夜具が觸り風が吹いたのでも此痙攣が起つて来る、此痙攣發作時には、軀幹が後方に反り返る、所謂後弓反張をなすものである。精神は明瞭であるが、甚しき不安、興奮、不眠症を來すものである。熱は無いこともあるが、多くは高熱があつて殊に死ぬ前、または死んでから後に四十五度五分などいふ大熱を發することもある。

(豫後) 非常に危険であつて、死するものは百人中五十人乃至九十人に及ぶものであるが、潜伏期や病氣に罹つて居る時期の長いものほど豫後が宜しい。

(療法) 破傷風菌は、酸素を嫌ふものであるから、創傷を空氣に觸れしめ、或は清潔法、消毒

法等を嚴重にするのは、豫防的の効がある。また既に本病を發せる後は、元より熟練なる醫師の施治を要するものであるが、患者は薄暗き室に入れて、十分安靜ならしむるがよい。前にもいふ如く、此病氣は少しの刺戟にても痙攣を起すものであるから、家人は力めて安靜を守り談話を低聲にてなし、少しの音響動搖を來さざるやうの注意が肝要である。

第六節 腦溢血(中風)

(原因) 頸の長いスラリとした瘦形の人、肺癆質といふて、肺結核に罹り易いと同じやうに、デブプリ肥つた頸の短い人は、卒中質といつて腦溢血に罹り易いのは、素人でも知つて居るところであるが、本症は必ずしも肥つた人にもみ來るものと限つて居ない。する分瘦せた人にも來るものである。また遺傳の關係は確かにある故、父祖代々此病氣で斃れたといふやうな家の子孫は、深く注意せねばならぬ。

本症は、居常酒を嗜む人、つまり酒の毒に中つて居る人に多いものであり、それからまた微毒も有力なる原因となる。それで四十才以上の人に多く起るものは多くは中酒であり、若き人に起るものは微毒が多い。また心臓病の爲めに起ることもある。(心臓病参照)

(症候) 本症初發の現象は、卒倒、人事不省等の所謂卒中發作である。此發作の起る前には前驅症として頭痛、眩暈等を來すことがあるが、多くは突然であつて、人を呼ぶことも、他から支へる間も無いものである。そして飲酒の際、入浴の際、上圍の折などによくその發作が起るものである。症狀の軽い場合には瞬時にして覺醒するが、然しその瞬間は茫然自失の状態で、次第に呂律の廻らぬやうになり、同時に左か右かの半身不隨を來すやうになる。即ち中風或は中氣の有様で床上に横はるのであるが、若しまた病氣が劇烈に起つた場合には、昏倒した儘覺めずに、死に至ることが往々あるが、極く軽いのは、夜間睡眠中に起つて翌朝目覺めて起きやうとするときに、初めて半身不隨を覺ゆるものである。

(豫後) 初めの發作は軽くとも、二度目に重い發作が起ることもあつて、豫後を斷定するのは困難である。また卒中發作中に顔色が蒼白になつたり、熱が出たりするのは、先づ恢復の見込は無い。また發作が起つてから六ヶ月経つても手足の利かぬものは、永久に癒らぬもので、癒るものならば、六ヶ月以内に手足が利いて來るものである。

(豫防法) 腦溢血の主なる原因は、飲酒、梅毒、心臟病であるから、酒を飲まぬやう、六百六號の御厄介にならぬやうに心かけ、心臟病ある人は、よくその養生を守り、平素便通をよくし、精神を静め、飲食物も成るべく淡泊なるものを攝るやうの注意が肝要である。また遺傳のある人、酒を嗜む人等は冷水浴を怠らずやるのは、血管の弾力を強めて、確かに豫防の效を奏するものである。また遺傳素因ある人等は、時々醫師に就て血壓を計つて貰ひ、若し壓力が高いときにはそれ／＼の處置をして貰ふがよろしい。

(療法) 患者が卒倒して人事不省になると、驚きの餘り大聲に呼んだり、揺り起したりなどするが、それは非常に害があるから、成るべく安靜にして置く方は良い。それで不便な場所に倒れた場合の外はそのまゝ身體を動かさぬがよい。そして頭部を高くして、靜かに横臥せしめ、衣服を緩め、胸部を廣げて新鮮の空氣に觸れしむるがよい。また頭部には氷嚢を當てるが、若し麻痺の起つた半身が、左側か右側か分つたときには、頭部はその反對の側を冷すとよい。腦内の溢血が右側に起れば左側に麻痺が起り、左側に起れば右に來ると云ふ風に、病原と麻痺とは、常に反對に交叉して起るものであるから、頭部を冷すには、麻痺せる反對の側を冷すのは法則になつて居る。普通患者の目は、病原を睨むやうになつて居るものである。それから素人は患者を呼び醒

さんとして、水を飲ましたり、或は薄荷や寶丹などを口に入れるが、これは甚だ危険である。何故かと云ふに、かかる場合には、物を嚥み下す作用は無いから胃の方に流れないで、反つて氣管の方に入り込んで肺炎を起す虞れがあるから、斯様のことをせずに、その代りに膀胱部に芥子泥を貼るとよろしい。卒中の時には、瀬戸物を割つて、背中を切ることが素人の間に行はれて居るが、これは一種の瀉血法であるから、行つてもよろしいけれども、それよりも耳の後部に十五條乃至二十條の水蛭を貼けるがよろしい。それから液瀉をして排便を促すのは腦力の血壓を下げるの效力があるから、これは必ず行ふべき應急療法の一つである。

治療法としては下劑または沃度劑などを與へるが、勿論醫師の施治を要するものである。そして症狀輕快するに至らば、電氣療法、マッサージ、按摩法等を施すのである。

第七節 腦膜炎

(原因) 腦膜炎の原因はいろいろあるが、最も多いのは、結核菌によつて起るところの結核性腦膜炎であつて、主として小兒を侵すものである。

(症候) 腦膜炎には急性と慢性とあり、急性症は惡寒がして熱が出で、頭が痛み、眩暈がしたりして、多くはヒキツケル、患者の顔貌は苦悶の狀を呈し、頭部を後方に屈して更に之を前屈せんとすれば、著しく抵抗あり、眼球は上逸し、眼球運動が制限せられて凝視し(俗に云ふ眼が据る)口は密閉して容易に開口せず、時には頭痛を訴へ、また自ら手を以て頭部を壓迫し、讒語を發し、また煩悶して時々躁暴狀となり、或は一步進むときは嗜眠狀となる。かゝる際に最も家人を驚すのは所謂腦膜炎性叫喚である。即ち突然として泣き叫び、家人も共に泣かざるを得ざるに至らしむるものである。斯くの如くして症狀漸次に進行するときは、先づ患者の精神狀態は著しく犯され、全く人事不省即ち昏睡期に移行し、兩便は失禁し、眼は見えず、食物は嚥下し得ず、呼べど、叫べどまた答へず、唯呼吸運動と、心臟の鼓動とをなすのみである。然も尙時々痙攣發作を反復して、嘔吐をなさんとするも、胃中空虛にして吐物なく、その苦悶は見るに忍びざるものである。斯くして死期は刻々迫り來つて、遂に黃泉の客となるものである。

(豫防及び後遺症) 結核性の腦膜炎は、その殆んど全部が死の轉歸を取るものであるが、これに反して漿液性腦膜炎及び化膿性腦膜炎は、その過半は助かるものであるが、その多くは智力の障礙を残して、或は白痴となり低能となる。また中には肉體的の故障を残して、盲目、聾、啞、

跛行症等の不具を來すことがある。

(看護法) 腦膜炎は、前述の如く頗る重篤なる病症であるから、少しにても疑はしき症状あるときは放任せずに、直ちに醫師の診察を求むるがよろしく、且つ此際病床にあつて心附いたことは最大洩さず、醫師に告知して診査上の参考たらしむるがよい。

若しまた腦膜炎の診斷を下されたときには、病室を隔離して、病室内には責任ある人の外出入を禁じなければならぬ。またその病室は成るべく廣くして且つ暗く、漸く事物を辨する程度とすべく、その他音響を避け、患者の耳及び眼は勿論、その他の五官器も出來得るだけ安靜ならしむるがよい。そしてなるべくは熱練したる看護婦を雇ひ入れるがよろしい。

(療法) 營養に注意し、滋養灌腸を施し、頭部には氷囊、氷枕等、耳下には水蛭を貼し、甘汞下劑の内服或は灌腸を施し、また心臟衰弱の徴あらば、興奮劑を興へる等である。

佐多博士(芳久氏)が多數の實驗によれば、初期に於て度々腰椎穿刺を施して、腦脊髄液を取れば、結核性と雖も、何等後遺症を残さずして恢復に至るとのことであるから、試むるがよからうと思ふ。

第十七章 麻痺

第一節 麻痺ある病氣の見分け方

麻痺とは、筋肉が痿弱して固有の働きをなすことが出來ぬもので、彼の中氣に來る半身不隨などはその適例である。麻痺は腦及び脊髄または神經の病氣に起るもので、頗る多いものである。その中脊髄癆に來るものは俗に云ふヨイ〜である。また初め外傷か、熱病があつて、後に麻痺を來すものは脊髄炎であり、小兒のときに熱病を患つて、それから足の利かなくなつたのは小兒麻痺である。それから常に鉛を扱ふ人に来る鉛毒麻痺、酒客に來る酒毒麻痺もある。

腦神經麻痺はその犯さるる神經によつて特有の症状を發するもので、顔面殊に口角が曲つて、口笛を吹くことの出來ぬものは顔面神經麻痺であり、また言語に障礙を來すものは迷走神經麻痺の疑がある。それから脚氣は足殊に脛骨に初め麻痺が起つて、追々に大腿、腹部、上肢、口圍等に及ぶものであるが、それは既に浮腫のところ記述してあるから、茲にはその他の主なるものに就て記述しよう。